

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第88集

中峯遺跡

平成8年度農免見高稲取線II期地区建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第88集

中峯遺跡

平成8年度農免見高稲取線Ⅱ期地区建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



遺跡遺景（北側から）



出土土器集合（楠華堂撮影）

序

中峯遺跡が所在する東伊豆町は伊豆半島の東岸部にある。東側には相模灘、残りの三方は天城連山に囲まれている。当町は稻取・片瀬・熱川・北川などの温泉や、海岸線近くまで延びる尾根でのミカン栽培で全国的に有名である。東伊豆町の遺跡は、戦前より既にその存在が知られているものもある。昭和25年には峠遺跡において学術調査が行われた。最近では、縄文時代早期の石器製作址が検出されているなど、町内において多くの考古学的成果を上げている。

今回の中峯遺跡の埋蔵文化財調査は、農免見高稲取線の建設に伴うものである。検出された谷状地形の中からは、ミカン畑の開墾による破壊を免れた縄文時代早期から中期までの遺構・遺物が検出された。特に縄文時代前期前半の関山式土器、有尾式土器、清水ノ上Ⅱ式並行期の土器や、前期後半の諸磽b式土器、北白川下層Ⅱc式土器は、県内でも希有な資料である。また石器においても、打製石斧・打製石鎌・石皿や、石錐製作に由来する多量の黒耀石の剥片が出土し、当時の生業の様相をうかがい知る貴重な資料が得られた。結果的に縄文時代前期代の東日本・西日本との地域的交流の復原を可能とする資料の一つを獲得したのであり、この地域の歴史に新たな知見を加えたと言えよう。また、今回の調査が稲取周辺における初めての本格的な発掘調査となり、本報告が今後この地域の埋蔵文化財に対する重要な指針となることは言うまでもない。

最後になったが、調査ならびに報告書作成にあたっては、静岡県伊豆農林事務所・静岡県下田土木事務所・東伊豆町教育委員会などの関係機関各位に深謝すると共に、資料整理や酷暑の中で現地調査に参加した調査員・作業員の労をこの場を借りてねぎらいたい。

平成9年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

1. 本書は静岡県賀茂郡東伊豆町大字船取字中峯に所在する中峯遺跡の調査報告書である。
2. 調査は平成8年度、農免道見高稲取線II期地区建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、伊豆農林事務所からの委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を実施した。
3. 現地発掘調査は平成8年7月から9月まで行った。整理作業は現地発掘調査と並行して現地事務所において、一部基礎的な整理作業を行い、10月から平成9年3月まで遺物実測・図版作成等の本格的な整理作業を実施した。
4. 調査体制は次のとおりである。
所長 斎藤忠、副所長 池谷和三、常務理事兼総務部長 三村田昌昭
調査研究部長 石垣英夫、調査研究四課長 横本敬之、調査研究員 岩本貴・勝又直人
5. 本書の執筆は調査研究員勝又直人が行い、編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
6. 本書の遺物撮影はカラー図版については補華堂（補本真紀子氏）に依頼し、その他の遺物写真については当研究所が行った。
7. 黒曜石の螢光X線分析による産地同定は、国立沼津工業高等専門学校の望月明彦氏に依頼した。
8. 土層中のアカホヤの分析については、国立沼津工業高等専門学校の高橋豊氏、プラントオーパール分析については㈱パリノ・サーヴェイに依頼した。
9. 全ての出土資料及び調査資料は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

凡　　例

1. 本書における遺構表記（略号）は次のとおりである。
S B・竪穴住居跡 S F・土坑 S P・柱穴、小穴 S X・その他

目 次

巻頭カラー

序

例 言

凡 例

目 次

第I章 位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第II章 調査経緯と調査方法

第1節 調査に至る経過	5
第2節 発掘調査の方法と経過	5

第III章 基本土層と検出遺構

第1節 基本土層	8
第2節 検出遺構	8

第IV章 出土遺物

第1節 土器・土製品	21
第2節 石器	55

第V章 小 結

〈附編〉 1. 中峯遺跡周辺の地質 高橋豊（国立沼津工業高等専門学校）	71
2. 中峯遺跡の自然科学分析 パリノ・サーヴェイ株式会社	83

挿図目次

第1図 遺跡分布図	2
第2図 遺跡周辺地形図	4
第3図 試掘坑位置図	6
第4図 グリット図	7
第5図 遺構位置図	9
第6図 調査区北壁土層図	11
第7図 S B 1実測図	12
第8図 S B 2実測図	13
第9図 S B 3実測図	15

第10図	S F・S P位置図	16
第11図	S F実測図 1	17
第12図	S F実測図 2	18
第13図	S F実測図 3	19
第14図	土器実測図 1	22
第15図	土器実測図 2	23
第16図	土器実測図 3	24
第17図	土器実測図 4	25
第18図	土器実測図 5	26
第19図	土器実測図 6	27
第20図	土器実測図 7	29
第21図	土器実測図 8	30
第22図	土器実測図 9	31
第23図	土器実測図 10	32
第24図	土器実測図 11	34
第25図	土器実測図 12	35
第26図	土器実測図 13	37
第27図	土器実測図 14	38
第28図	土器実測図 15	39
第29図	土器実測図 16	40
第30図	土器実測図 17	41
第31図	土器実測図 18	42
第32図	土器実測図 19	43
第33図	土器実測図 20	44
第34図	土器実測図 21	45
第35図	石器実測図 1	56
第36図	石器実測図 2	57
第37図	石器実測図 3	58
第38図	石器実測図 4	59
第39図	石器実測図 5	60
第40図	石器実測図 6	61
第41図	石器実測図 7	62
第42図	石器実測図 8	63
第43図	石器実測図 9	64

挿表目次

第1表	柱穴計測値表	20
第2表	土器観察表 1~7	48~54
第3表	石器計測値表	65

写真図版目次

巻頭カラー 中峯遺跡遠景（北側から）

中峯遺跡出土土器集合

図版1 中峯遺跡遠景（南側から）

図版2 中峯遺跡全景（画面上方が西）

図版3 1—調査区北壁土層堆積状況 1 2—調査区北壁土層堆積状況 2

図版4 1—調査区北壁土層堆積状況 3 2—S B 1 完掘状況（東側から）

図版5 1—S B 2 完掘状況（西側から） 2—S B 2 土坑完掘状況（南側から）

図版6 1—S B 3 磚出土状況（南側から） 3—柱穴群完掘状況（北東側から）

図版7 1—土器283出土状況（東側から） 4—土器284出土状況（北側から）

図版8 1—石皿31出土状況（北側から） 5—S F 8 内石皿32出土状況（西側から）

図版9 1—S F 1 完掘状況（北側から） 2—S F 3 完掘状況（北側から）

3—S F 4 完掘状況（北側から） 4—S F 6 完掘状況（北側から）

5—S F 5 完掘状況（北側から） 6—S F 7 磚出土状況（北側から）

7—S F 7 完掘状況（北側から） 8—S X 1 検出状況（北側から）

図版10 1—土器281 2—土器276

図版11 土器275

図版12 1—土器279 2—土器284

図版13 1—土器274 2—土器283 3—土器280 4—土器282 5—土器集合 1

図版14 土器集合 2

図版15 土器集合 3

図版16 土器集合 4

図版17 土器集合 5

図版18 土器集合 6

図版19 土器61

図版20 土器集合 7

図版21 土器集合 8

図版22 土器集合 9

図版23 土器集合 10

図版24 土器227

図版25 土器集合 11

図版26 土器集合 12

図版27 土器集合 13

図版28 土器集合 14

図版29 土器集合 15

図版30 土器集合 16

図版31 土器集合 17・18

図版32 打製石斧集合（表）

図版33 打製石斧集合（裏）

- 図版34 1—打製石器・打製刃器・剥片 2—石核12
 図版35 1—磨製石斧14 2—磨製石斧15
 図版36 磨石集合
 図版37 石皿集合

附編図版目次

（附編1）

第1図 稲取中峯遺跡付近の地質図・地図断面略図	73
第2図 稲取中峯遺跡の地質柱状断面図（S B 1・谷地形底部付近）	76
第3図 稲取中峯遺跡入口と周辺地域の表層地質柱状図	77
第4図 稲取中峯遺跡の地質断面にみる重鉱物組成（粒数%）	78
第5図 稲取中峯遺跡の地質断面にみる火山ガラスの消長（粒数）	79
第1表	72
第2表 中峯遺跡で認められた火山ガラスの化学組成	80
写真図版 火山灰顕微鏡写真	82

（附編2）

第1図 中峯遺跡の遺構平面図および試料採取地点	84
第2図 S B 1付近の模式柱状図および分析層位	85
第3図 植物珪酸体群集	87
第1表 2区北壁とS X01の植物珪酸体分析結果	86
写真図版 植物珪酸体	89

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 地理的環境

中峯遺跡は静岡県賀茂郡東伊豆町大字稻取字中峯に所在する。東伊豆町は伊豆半島の東海岸に面し、町の西は河津町、北側には天城湯ヶ島町・中伊豆町、北東側には伊東市と接している。いずれの町も温泉が各所で湧出している。また東伊豆町は天城連山東側の傾斜地を利用したミカン栽培も盛んである。

伊豆半島は静岡県の東部に位置し、その山地の中には富士火山帯南帶に属する火山が多く見受けられる。その火山群の一つである天城山を中心とした山地が東伊豆町の北西側に連なる。三筋山・大峰山・浅間山などは天城山南麓が開析作用を受けて、孤立化した山塊を形作るようになった。これらの山塊は天城山の初期噴出物である安山岩類によって構成されている。天城連山の峻険な斜面地も、その山塊の一つである三筋山の中腹付近から海岸線に向かって緩傾斜となり、旧石器時代から現代に至るまで人間の手により利用されてきた。中峯遺跡が位置する地域一帯も、三筋山中腹付近に源を発する志津摩川等の開析作用により、多くの小谷が樹枝状に入り込んでいるものの、その尾根上も狭陥ではあるが比較的平坦な土地が形成されており、早い時期から人間に利用されていている。中峯遺跡は志津摩川河口から北へ約1150mの位置、川を東側に望む比較的平坦な尾根上にあり、その尾根は大峰山から延びるものである。今回の調査区は尾根の東側の緩やかな斜面部に設定されている。現在、遺跡周辺は比較的平坦な土地が形成されているためミカン畑として開墾・栽培されている。遺跡付近からは海に浮かぶ伊豆諸島が遠望できる。

第2節 周辺遺跡

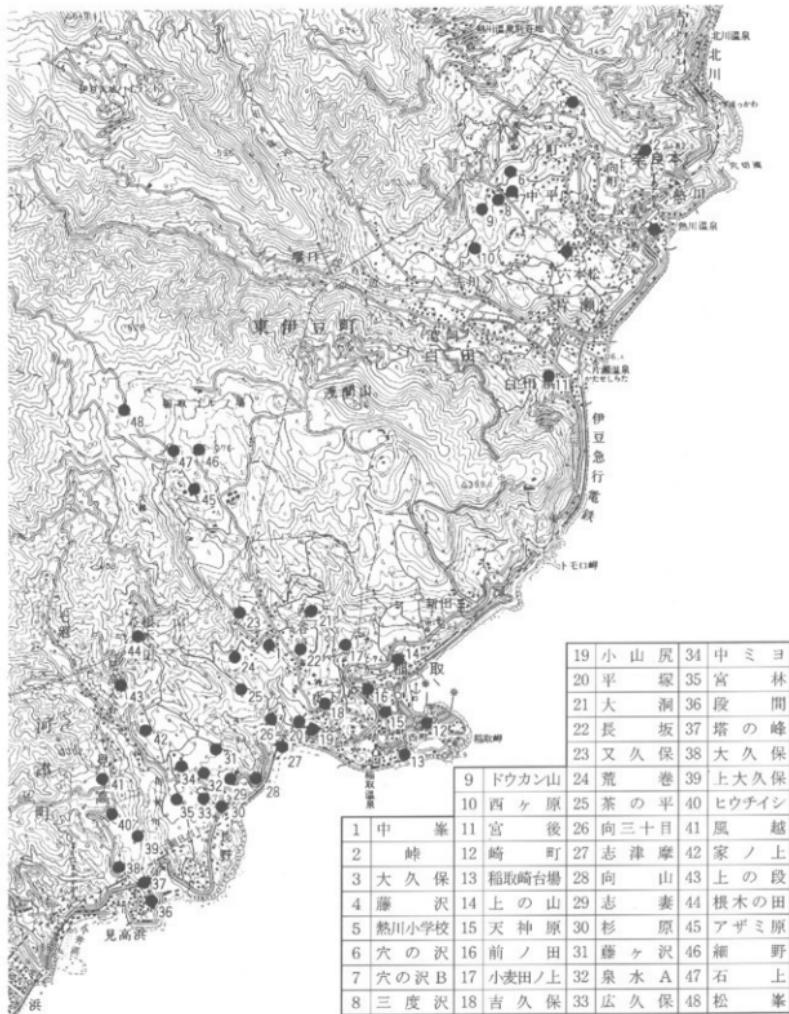
中峯遺跡周辺では数多くの遺跡が確認されており、その大半が縄文時代の遺跡である。東伊豆町内においては、熱川周辺と稻取周辺の2地域に遺跡が集中する。中峯遺跡が位置する稻取地域では標高200m程度までの斜面地に遺跡が多く分布する。

考古学史において東伊豆町の遺跡が学会の場で発表されたのは足立鉢太郎氏及び中谷治宇二郎氏の論考を嚆矢とする。昭和2年に足立鉢太郎氏が『静岡県史跡名勝天然紀念物調査報告』第3集誌上において町内の遺跡について触れている。特に大川周辺採集石製品の実測図が掲載されている。それは垂飾と考えられる資料である。中谷氏は同年『人類学雑誌』誌上において東伊豆町をはじめとする伊豆半島南部地域の遺跡を紹介している。現在の東伊豆町に該当する地域では12ヶ所の遺跡を確認している。その文中で静間遺跡・崎町遺跡からは磨製石斧が表採されていることを報告している。静間遺跡出土の石斧の側面には擦り切り技法の痕跡が観察されたという。また崎町遺跡出土の磨製石斧は誌上に掲載された実測図から加工斧と考えられる。以上のように町内の遺跡は主に遺物の表採という形で存在の確認がなってきた。昭和62年から静岡県教育委員会が中心となって編集された県内遺跡地図では東伊豆町内において34ヶ所の遺跡を報告している。

旧石器時代の遺物が確認されているのは中峯遺跡の西側の荒巻遺跡である。尖頭器が1点出土している。町内においては旧石器時代の遺物が出土しているのは、この1遺跡のみである。

縄文時代の遺跡は前述したように多く確認されている。町内において主要遺跡としてあげられるのは奈良本の峠遺跡・白田の宮後遺跡である。峠遺跡は昭和24年に吉田格氏により調査の先鞭がつけられ、最近では竹石健二氏が中心となった調査において、縄文時代早期の石器製作址が確認されている。

草創期～早期の資料が出土しているのが穴の沢・宮後・茶の平・峠遺跡である。穴の沢遺跡は昭和53



第1図 遺跡分布図

年に閑野哲夫氏が中心となって調査が行われ、早期の東海系土器である入海・天神山式土器や打越式土器が出土している。峠遺跡では最近の調査で草創期最末期の撚糸文系土器や田戸上層式並行期の土器から前期初頭の花積下層式期の土器まで出土している。また黒耀石を利用した打製石器の製作していた屋外石器製作址が2基確認され、石器製作に由来する剥片・敲石・台石等が多く出土している。宮後遺跡

では1982～1994年まで計4回発掘調査が行われている。この一連の調査により早期～後期まで時期的に幅のある資料が得られている。早期では押型文・石山・神ノ木式土器等が出土している。前期の資料が出土しているのは峠・藤沢・穴の沢・穴の沢B・松峯・宮後遺跡である。前述した穴の沢の調査では諸磯式土器が出土している。遺構としては前期中葉の土坑が検出されている。土坑内部には拳大の礪をケルン状に積み上げていたという。また宮後遺跡の第3次発掘調査において清水之上Ⅱ式並行期から十三菩提式期の土器が出土している。中期の資料が出土しているのは宮後・吉祥原・宮田・広前・穴の沢・細野・アザミ原・大洞・長坂・小麦田ノ上・茶の平・天神原遺跡である。宮後遺跡では五領ヶ台・勝坂・加曾利E式土器など中期全般にわたる資料が遺構外から出土している。隣の河津町では見高段間遺跡が中期の主要遺跡として上げられる。海岸段丘上に位置するこの遺跡からは早期から中期までの遺物が出土している。特筆すべき遺構としては中期の敷石住居跡が大正14年の第1次調査、昭和43年の第2次調査で確認されている。後期の資料は前段階に比べて遺跡数が激減する。東伊豆町内では宮後・大洞遺跡で確認している。特に計4回の調査が行われた宮後遺跡では、これまでに後期前葉～中葉、堀之内I式～加曾利BⅡ式の土器群が出土し、同時期に比定される堅穴住居跡4基、敷石住居跡3基が検出されるなど、周辺に後期代の集落域が形成されていた事が裏付けられている。晚期の資料は町内では確認されていないが、隣の河津町姫宮遺跡で晚期の条痕文系土器の出土が報告されている。櫛王式・氷I式土器が出土している。

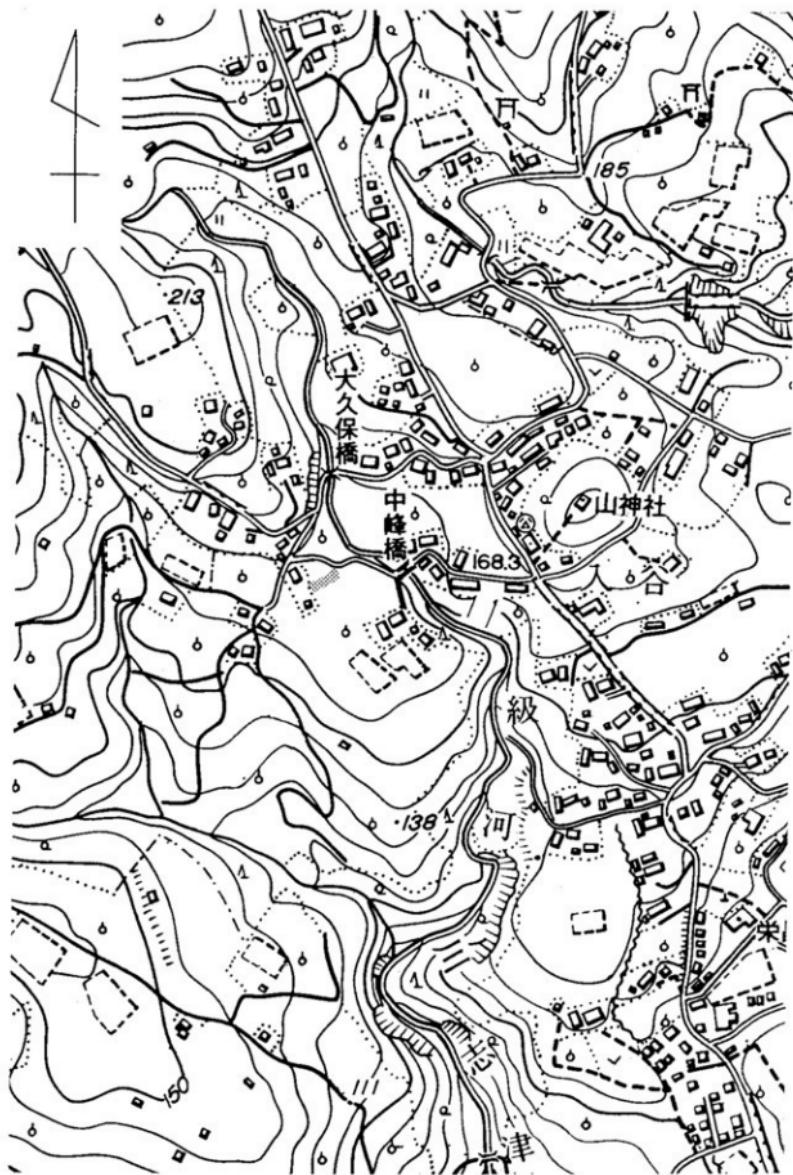
弥生時代の資料が出土しているのは細野遺跡の1遺跡のみで、縄文時代の遺跡数と比較して、その数はかなり少ない。河津町では前述した河津駅西方に位置する姫宮遺跡において、中期後半の有東式期の方形周溝墓が検出されている。

古墳時代の資料が得られているのは上の山・天神原・崎町遺跡の3遺跡からである。土師器や須恵器が出土している。奈良・平安時代の資料は現在発見されていない。

中世の遺物が確認されているのは長坂・上の山遺跡である。中世陶器が採集されている。この他に河津町内では河津川を西に臨む丘陵上に川津城が存在する。

近世の遺跡としては幕末期の砲台跡である稻取岬南岸の稻取岬台場が知られている。また町内各所に江戸城築城石の石切場が多数存在する。石切場については最近、東伊豆町教育委員会により精緻な調査が実施されている。

巨視的に見て伊豆半島東海岸部における縄文時代の遺跡で中峯遺跡と同時期に営まれた遺跡は数多い。管見触れる範囲においてあげるとするならば、熱海市初島宮前遺跡・下多賀蔵之内遺跡・伊東市東大室クズレ遺跡・上の坊遺跡・三の沢遺跡である。上の坊遺跡は縄文時代前期前半代の清水之上Ⅱ式並行期の土器である仮称「上の坊式土器」の標式遺跡でも著名である。また他の3遺跡においても、前期後半の関西系の土器、北白川下層式土器の出土が見られ、また宮前遺跡では東関東系の浮島式土器が出土するなど東西の交流を裏付ける資料が散見される。伊東市東大室クズレ遺跡・三の沢遺跡では諸磯b式の浮線文系・沈線系土器の良好な資料が得られている。またこの他に十三菩提式期の土器の出土も報告されている。昭和33年に刊行された『伊東市史』の地名表では諸磯・北白川下層式土器の出土が知られている遺跡を11ヶ所紹介しており、伊東市周辺に該期の資料が濃密に分布しているのがわかる。一方、伊豆諸島においても同時期の遺跡が存在する。東京都神津島上の山遺跡・半坂遺跡や御蔵島ゾウ遺跡等があげられる。神津島は中伊豆町柏嶺と並び著名な黒耀石の産地であり、同島産出の黒耀石は縄文時代を通じて、東海・南関東地方にかなり流通している。中峯遺跡周辺においても大島・利島・鶴渡根島等を眺められ、伊豆諸島との近さを感じることができる。また伊豆半島東海岸地域は相模灘等の海を挟んで東側が房総半島など関東地域と目と鼻の先に位置する。あらゆる時期においてこの地域は関東的な文化圏の傘下にあったといえる。



第2図 遺跡周辺地形図

第Ⅱ章 調査経緯と調査方法

第1節 調査に至る経過

中峯遺跡が所在する稻取周辺地域は、海岸線近くまで迫る丘陵が小河川等の解析作用を受けて緩やかな斜面地が形成されている。しかし平坦地が少ないとあって丘陵部のかなり奥まで住宅地やミカン畑として利用されている。この丘陵部奥地と主要道である国道135号線とを連絡する道路は自動車が1台のみ通行可能な狭隘なものが多く、特に農業經營面においても、かねてから行政上における検討課題にあげられてきた。

このような状況の中で稻取から東伊豆町の西側に隣接する河津町の見高地区まで農免道の設置が検討された。この農免道見高・稻取線が設置される地域一帯は既に数多くの旧石器・縄文時代の遺跡の存在が知られていた。今回の第Ⅱ期地区、特に町道入谷・天城1号線と町道大久保・荒巻線をバイパスする地区はその時点までミカン畑として利用されていたが、遺跡の北方、三筋山に繞く尾根上に既知の遺跡である又久保遺跡が存在している。海側に向かってこの遺跡の範囲が広がることや、また設置予定地区的耕作土から下位の地層にも未知の遺跡の存在が予想されたため、伊豆農林事務所・下田土木事務所・東伊豆町・県教育委員会が協議を行った。その結果、県及び当研究所が担当者を派遣し、試掘・表面採集等による遺跡確認調査を実施することが決定された。95年11月に設置予定地に數か所の試掘坑を設定し、掘り下げたところ、縄文時代の所産と考えられる石器・土器片が出土し、さらに試掘坑壁面に遺構らしき土層が観察された。この調査報告を受けて関係諸機関が協議を行い、その結果、指導機関として県教育委員会文化課、調査実施機関として県埋蔵文化財調査研究所への委託が決定され、発掘調査は平成8年7月から実施された。

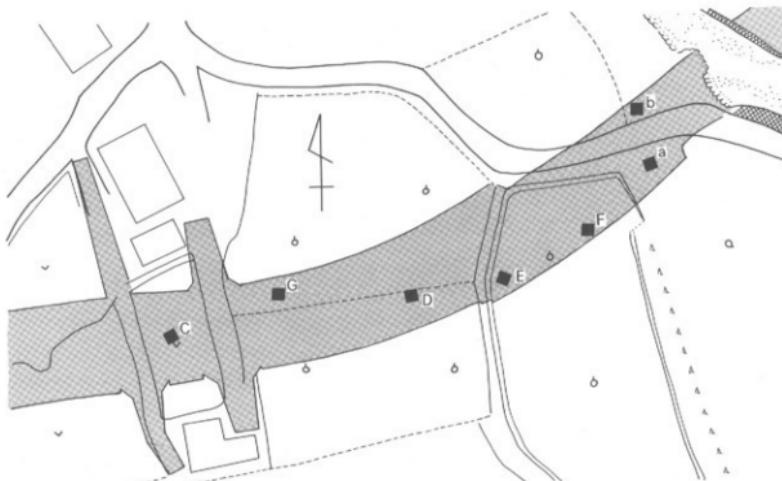
第2節 発掘調査の方法と経過

1 調査の経過

発掘調査にあたっては現地事務所用地と作業員の確保等が問題となつたが、東伊豆町が6月から用地確保と作業員募集を行い、また7月初めには事務所が開設され、7月8日から調査が開始された。

試掘調査の結果遺構の存在が想定されたC・D・Gの各試掘坑が位置する地区を調査区として設定した。発掘調査にあたり便宜的に小道と石垣によって区画された試掘坑Cの位置する区域を1区、残りのミカン畑の区域で、試掘坑D・Gが位置する地区を2区とした。また排土の処分については調査区から東に臨む志津摩川の対岸部の同じ農免道建設予定地内に盛土として運搬・処分することが関係機関の協議により決定された。

まず調査区内に植樹されていたミカンの木の伐採を業者に委託、伐採後草刈りを行い、前回の試掘坑を確認して、1区から重機による表土除去を開始した。しかし1区では遺構・遺物が全く確認されず直ちに調査を中止し、調査対象地区を2区に限定した。この時点で1区・2区という呼称を廃止し、報告を行うのは旧2区のみとした。一方旧2区では試掘調査の結果から、遺構面が平坦地であると判断、表土除去を実施したが、遺構面が谷状地形を呈しているのが判明し、排土量も予想を超えて積算の仕切り直しがはかられた。また排土搬出のため調査区と堰掘・中峯線とを接続した箇所から土器片が出土し、関係機関と協議し今回の調査対象地外に2つの試掘坑a・bを設定し、掘り下げを行った。その結果土器片が数点出土したものの、その一帯の地形が志津摩川に向かって傾斜しており、遺構の存在はないものと判断し、調査区の拡張は中止された。



第3図 試掘坑位置図

遺構面が検出されるまでは重機により耕作土層等を剥ぎ取り、同時に作業員を投入し遺構の有無等の精査を行った。この作業過程において遺構のプランは確認できなかったが、基本土層第5層より大量の遺物が出土した。これらの遺物は周囲の遺構から谷状地形へ流れ込んだ遺物と判断され、またグリット杭設定がその段階までなされなかったこともあり、遺物は一括遺物として取り上げている。またこれら一連の作業において遺構面の早期把握が必要であり、調査区中央部北壁付近、及びSB3北壁付近に試掘坑を設定掘り下げを行っている。その際、調査区中央部北壁付近から分銅型石斧3・石皿34が、またSB3付近では台石35が出土している。遺構が確認されたのは8月上旬で、まず土坑・柱穴群を調査の後、SB1・2・3の調査を実施した。遺構面検出後も遺構からの排土が相当量あるものと見込んで、遺構・遺物の検出がなされなかつた旧1区にベルトコンペアを用いての搬出を実行したが、遺跡に運搬が容易なアルミ製の小型ベルトコンペアを使用したため、調査区で検出された谷状地形の急傾斜では排土を流すことができないことが判明した。よって排土は調査区東端へ一時仮置きし、時期を見て随時重機及びトラックで搬出した。

調査区内に業者委託による基準杭設置を行ったのは8月中旬である。また遺構の全容が明らかになつた9月上旬には業者委託による空中写真撮影を実施した。

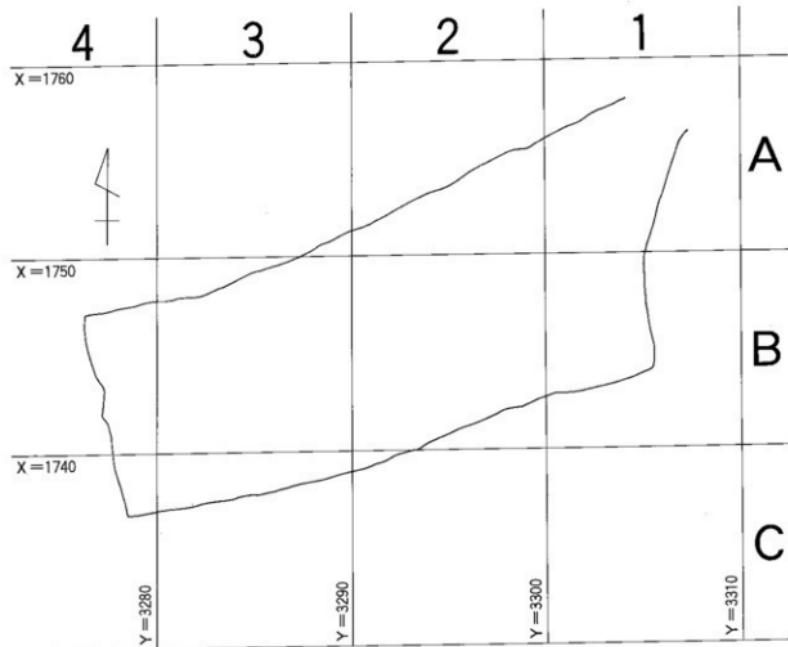
また調査中に自然科学分析が必要と判断されたため、9月に国立沼津工業専門学校の高橋豊氏や専門業者に依頼し、土層中からのサンプル抽出作業を行った。出土遺物の整理については現地事務所内において洗浄、個々の遺物の注記を行った。現地の広報活動としては8月下旬に発掘体験教室を開催した。また調査完了時に遺跡見学会を開催を予定したが当日雨天のため中止した。現地調査が全て終了し、現地事務所・発掘機材等の撤収が完了したのは9月下旬である。

2 調査・整理の方法

調査区内には10mメッシュの基準杭を4本設定した。今回の調査では遺構検出面で設定したため、基本土層5層以上の位置で出土した遺物は一括遺物として報告している。遺構内部から出土した遺物に關

しては、トータルステーションで出土位置と標高を記録して取り上げを行った。調査区内で検出された遺構・地形測量に関してもトータルステーションを使用し、遺構は20分の1に図化した。また遺構内のセクション・エレベーションについては調査日程が限られていた事もあり、現地での図化は断念した。遺構写真については 6×7 中型カメラ・35mm小型カメラを使用し、各調査員が撮影をして行った。遺構写真についてはタワーや高所作業車の使用を考えたものの、調査区周辺がミカン畠で地盤が軟弱であり、また調査区内の地形が平坦でなく、いずれの手段も孰れない状況であるので今回の調査にあたっては脚立を主に使用している。

室内整理は10月から開始した。まず遺構図面の整理・作成と並行して、出土遺物の接合・拓本を実施した。土器については全ての中から、報告書に掲載するものを抽出したうえで、出土時の取り上げ番号の他に抽出番号を新たに付与した。石器は出土したほとんどの資料を掲載するため、そのまま実測・トレース作業に移った。土器は破片資料が多く、図版については拓本と断面図を2分の1縮小で掲載した。また復原できた資料については期間的に限られていたこともあり、実測用の立面写真撮影を業者に委託した。この資料は3分の1縮小で掲載した。遺物カードについては個々の報告書用の図版が完成した時点で作成に移った。原稿の執筆は12月から、遺物の写真撮影は1月から実施した。



第4図 グリット図

第III章 基本土層と検出遺構

第1節 基本土層

基本土層図は調査区北壁土層図（第6図）を採用した。今回の調査で検出された地形が南北に延びる谷状地形を呈していたこともあり、調査区中央部が地表面からの深さが約3mをはかる。

層位については附編1・2に詳細な報告がなされており、本節では概要のみを触れる。第1層は耕作土層であり第1層の下半部には黒ボク層が認められた。この層位から遺物はほとんど出土していない。附編1の高橋氏の報告では耕作土、及び暗褐色・暗灰色・黒色・黒褐色腐植質土の5層に細分している。附編2のパリノ・サーヴェイの報告では現耕作土・暗褐色シルト層に分類している。第2層はカワゴ平バミスの堆積層である。色調は白～黃白色で、層中にはごく希にバミスと共に噴出された黒耀石の細粒子が見られる。高橋氏の報告では上位から褐色ローム層・カワゴ平軽石層・灰白色安山岩片の3層に細分している。附編2ではカワゴ平軽石を挟む明褐色ローム層と報告している。第3層は黄褐色土層で遺物の出土はほとんどない。附編1では2つの褐色ローム層に分類している。最下部には斜行層理が認められるという。附編2では褐色シルト層に分類している。第4層はスコリア純層である。谷への流入土ではなく、地山を構成している層位である。附編1においては河津町上佐野の鉢ノ山火山由来のスコリアと判明した。第5層は黒褐色～暗褐色土層である。遺物の大半はこの層位から出土している。この層位からは縄文時代前期代の遺物が大量に出土している。附編1では暗褐色・黒褐色腐植質土層の2層に分類している。附編2においては暗褐色シルト層としている。第6層はSB1の覆土である。図中に見える土器は61である。附編1では暗褐色腐植質土層、附編2では暗褐色シルト層としている。第7層は暗褐色土層である。今回確認された唯一の遺構構築面である。附編2では暗褐色シルト層としている。第8層はSB3の覆土である。色調・土質共にSB1の覆土とほぼ同一のものと判断される。第9層はSB3の炉跡の焼土である。第10層は黄色土層である。附編1では黄褐色ローム層、附編2では明褐色ロームとしている。なお土層中からは前述したカワゴ平軽石・鉢ノ山火山由来のスコリアの他に、鬼界アカホヤ・神津島天上山スコリアが検出されている。また各層より当時の植生を裏付けるプランツ・オパールが検出されている。

第2節 検出遺構

遺構の概要（第5図）

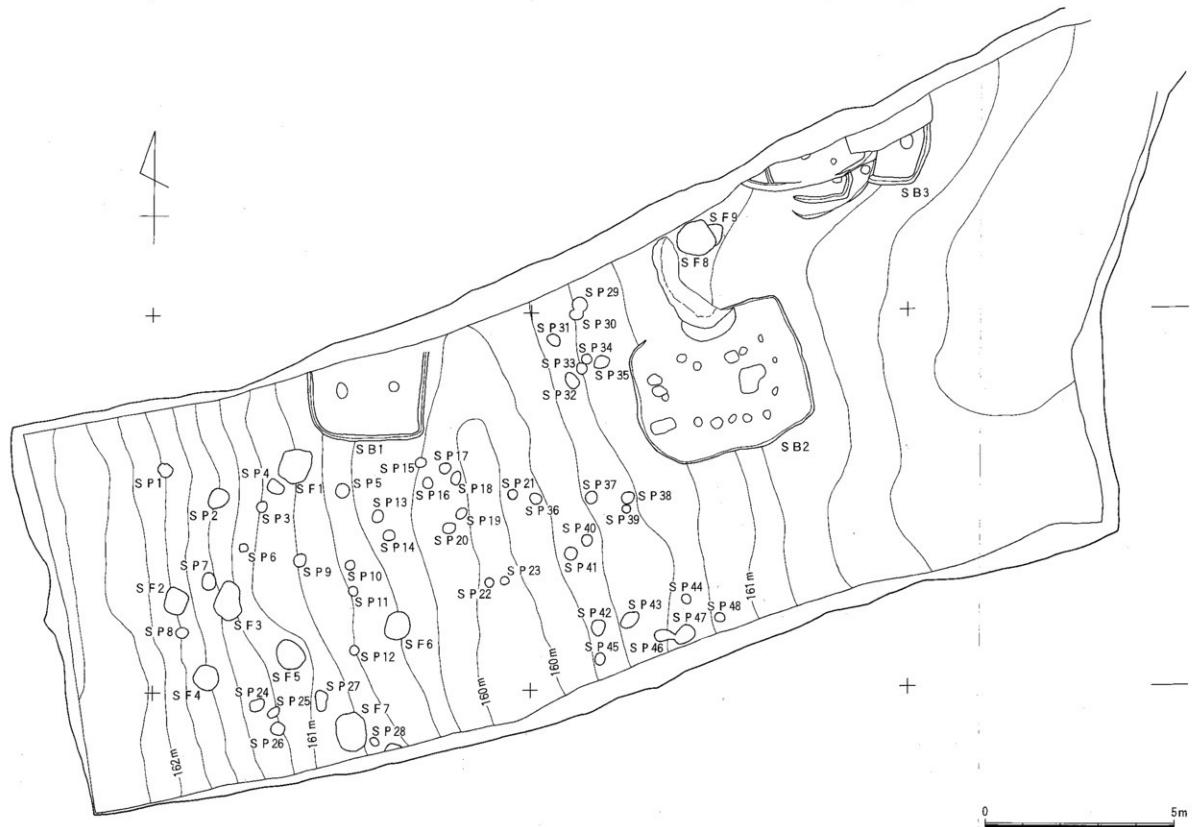
今回の調査では堅穴住居跡（SB）が3基、土坑（SF）が9基、柱穴（SP）が48基、屋外炉と考えられる遺構（SX）が1基確認された。SB1と土坑群・柱穴群は今回検出せられた谷状地形の埋土中に掘りこまれたもので、遺構の覆土と遺構構築土層との識別が極めて困難であった。これらの遺構は谷状地形を構成する基本土層第10層の黄色土層面でようやくプランを確認しえた。SB2・SB3及びSF8・9については直接第10層に掘り込まれていた遺構であり検出は容易であった。

堅穴住居跡は概ね調査区の北寄りに、土坑群・柱穴群は調査区東半部において検出されている。土坑群は標高160.4mより高い位置で検出されている。

堅穴住居跡（SB）

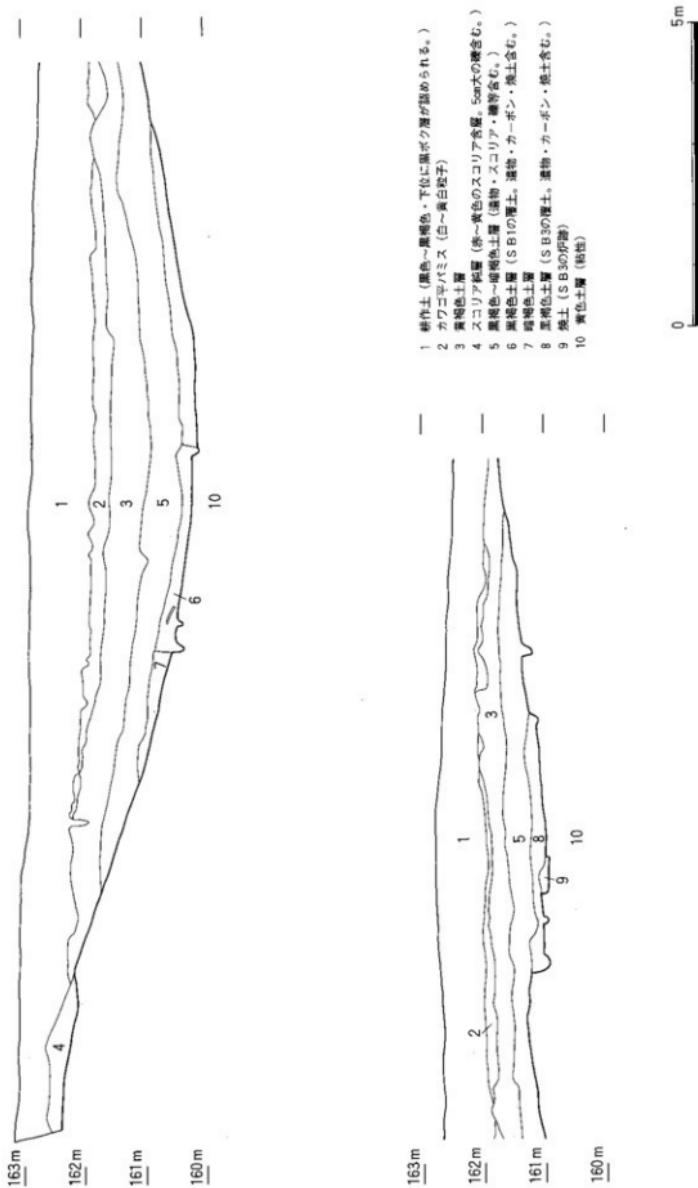
SB1（第7図）

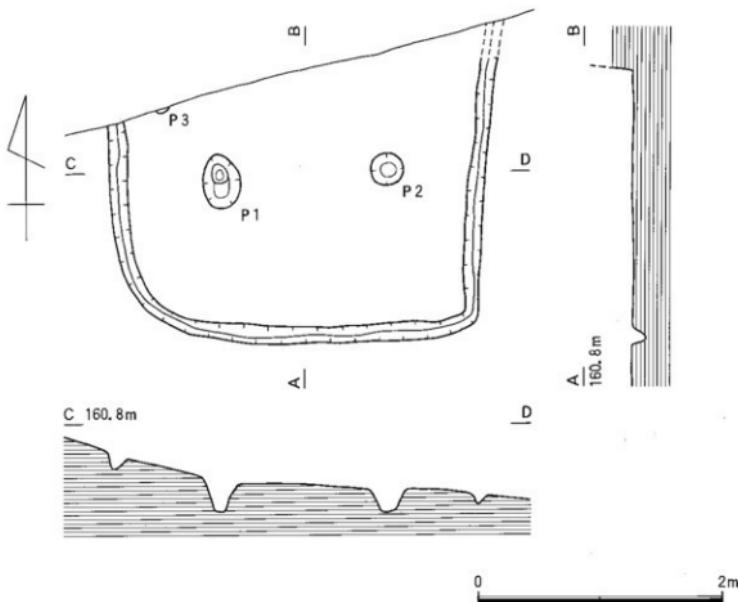
SB1はB-3グリットの調査区北壁際で検出された。おそらく遺構の3分の1は調査区外に存在している。今回検出できたのは壁溝と主柱穴が2基、調査区壁際に柱穴が1基である。SB3の平面形は隅



第5図 遺構位置図

第6図 調査区北壁土層図





第7図 SB 1実測図

丸方形と考えられる。主軸方向は遺構の全容が明らかでないが、ほぼ真北に向くものと考えられる。この主軸に直交するC・Dのエレベーションの計測値は3.1mをはかる。この遺構は谷状地形の底部付近に構築されている。住居床面も構築時には東側へ傾斜していたはずだが、貼床等は明瞭に確認できなかった。

壁溝はその検出状況から住居跡の壁際を全周していると思われる。断面形はV字状で壁溝の深さは西辺付近では約14cm、南辺は約10cm、東辺付近は約7cmをはかる。当時の床面を考慮に入れれば、壁溝東辺はおよそ14cm程度はあったものと考えられる。

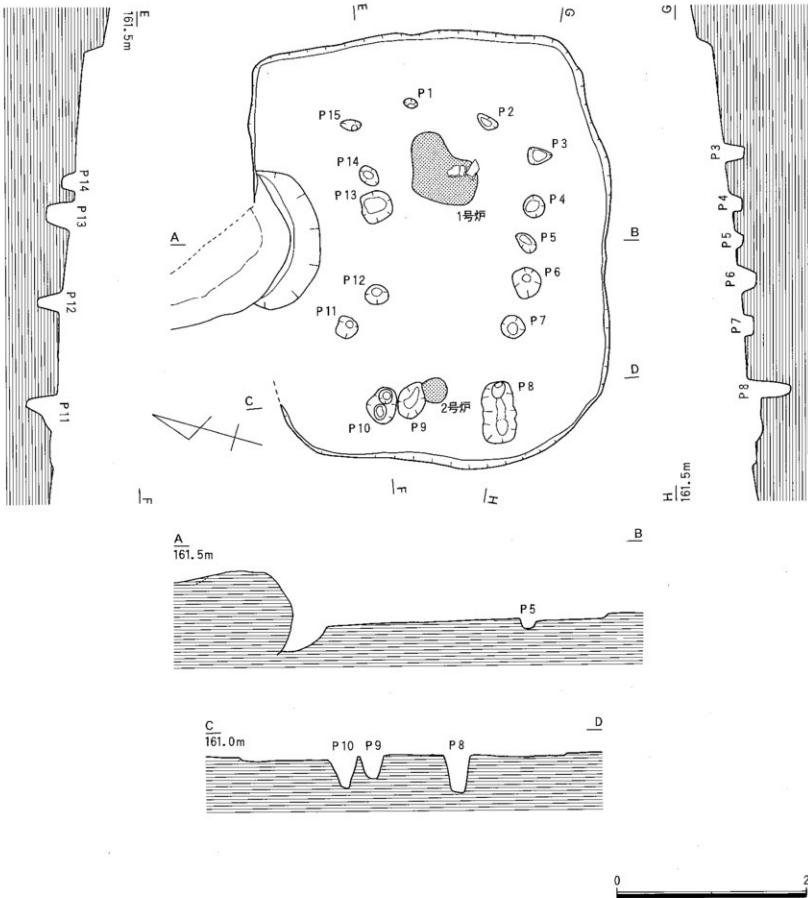
主柱穴と考えられるP1・P2の最深部はそれぞれ28cm・18cmをはかる。当時の床面の高さを考慮に入れれば、P2の本来の深さは約30cm程度であったものと考えられる。P3については調査区北壁際で検出されたこともあり、詳細は不明である。

この遺構からは土器61が覆土中より（第6図）出土している。所属時期はこの出土土器の形式から縄文時代前期前半代と考えられる。

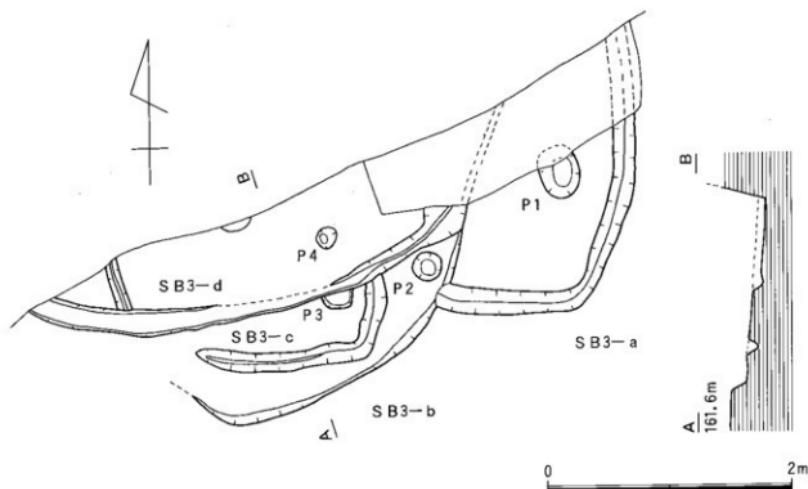
S B 2（第8図）

S B 2はB-2グリット北半部・A-2グリットに所在する。平面形は隅丸長方形で、遺構内部からは柱穴が15基、炉が2基、そして遺構北壁中央部に土坑が検出された。S B 2の主軸方向はN-70°-Eである。主軸の計測値は4.64mをはかる。この遺構は谷状地形の東側斜面に位置しており、床面の傾斜から見てもある程度の貼り床が存在していた可能性があったが、調査時には検出できなかった。またS B 1のような壁溝も検出できなかった。

壁の残存高は最高値が東壁付近で約22cmをはかる。北壁のはば中央部には自然の岩が露出している。この岩に沿って深さ約26cm程度の土坑が掘り込まれている。この土坑はS B 2に確実に伴うものであり、



第8図 SB2実測図



第9図 SB3実測図

内部より土器18が出土している。岩自体は自然のものであり、基本土層第10層内に混入していたものである。地元ではこのような自然の岩を自然（じねん）と呼んでいる。住居構築時にこの岩が地面から露出していたかどうかは判然としないが、結果的にこの土坑は岩肌を利用したものであり、貯藏穴として利用されたものと考えられる。

柱穴は15基検出された。計測値が深さ約20cm以上をはかる柱穴はP3・6・8・9・10・12・13である。他の柱穴は深さが約11~15cm程度である。炉跡は2ヶ所確認している。住居東側が1号炉、西側が2号炉である。1号炉には礫が数点見られた。平面は不定形である。2号炉はP9と重複している。時期的には炉が先行する。

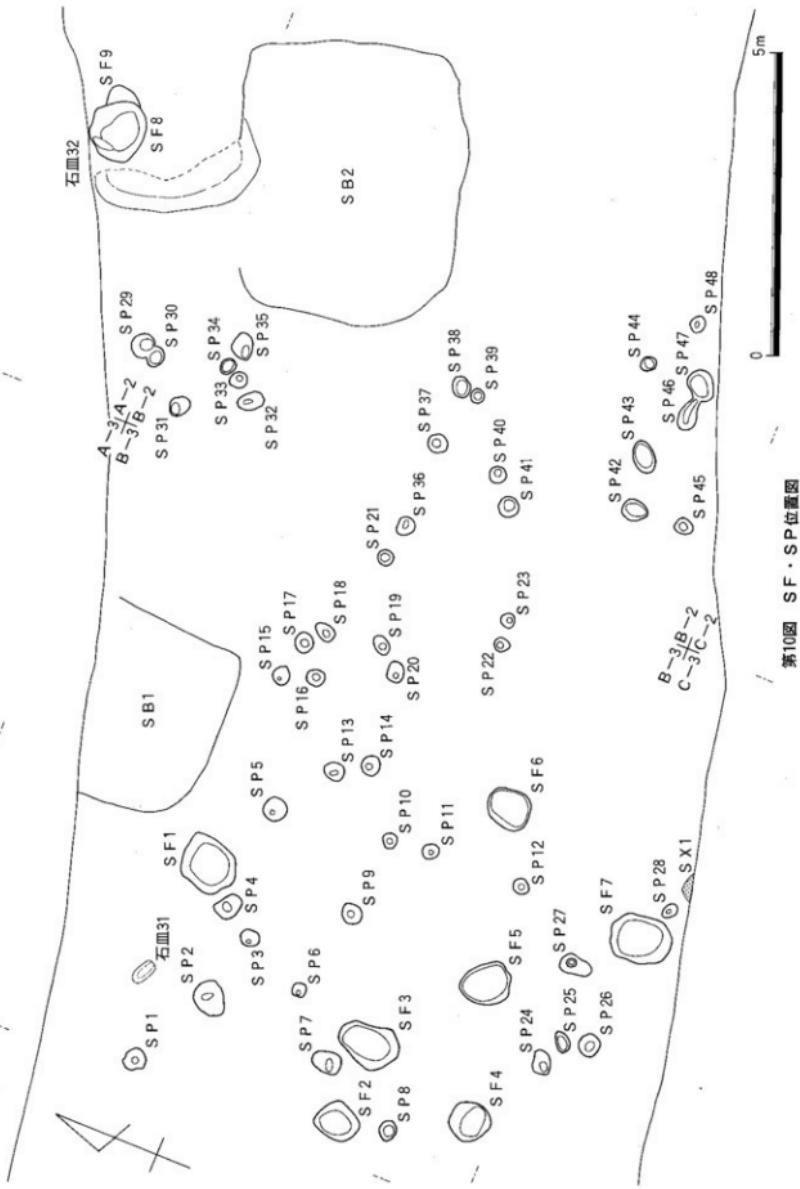
S B 2 からは土器18・25・28・126・147・197・204・242・253の9点が出土している。石器は13の剥片の他に19点剥片が出土している。遺構の所属時期は土坑から出土した18の縄年観から縄文時代前期前半代と考えられる。

S B 3 (第9図)

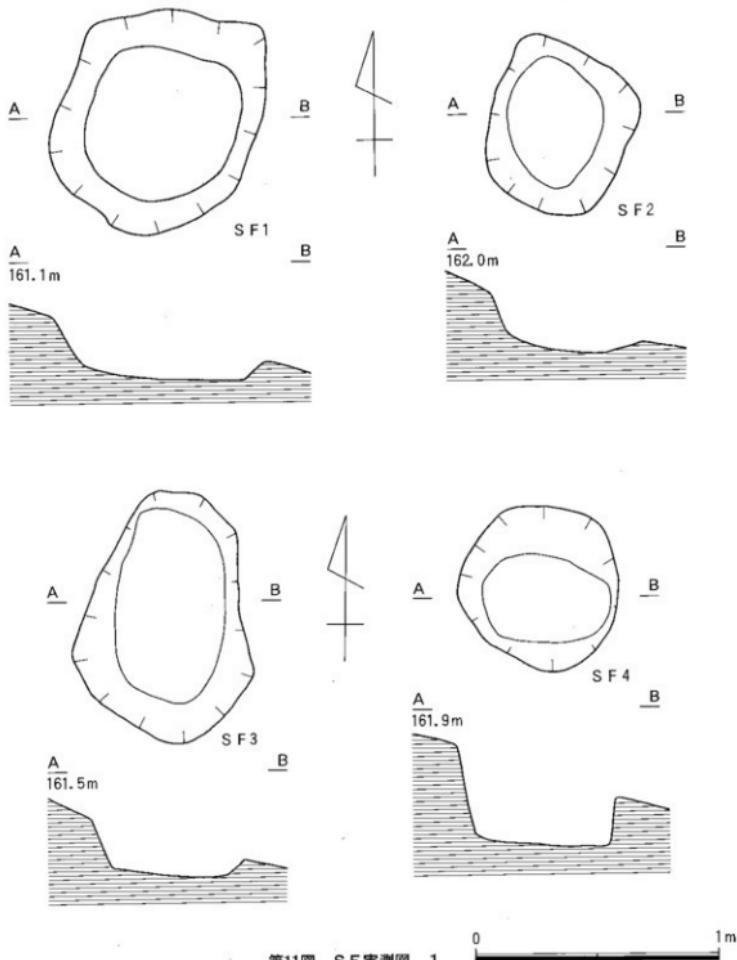
S B 3 はA-2グリット調査区北壁際からA-1グリット西端にかけて位置する。この遺構は少なくとも4回の建て替えが行われており、さらに遺構の大部分が調査区外に存在している。遺構の覆土は黒褐色土で調査時には遺構内の切り合い関係は判然としなかった。本報告では新旧関係ではなく位置的関係から、東側よりS B 3-a・b・c・dとして事実説明をしたい。

S B 3-a からは壁溝の一部と柱穴1基を確認した。遺構の北側は調査区外に、西側はS B 3-b・d等に破壊されたものと考えられる。残存状況から平面形態は楕円形と考えられる。壁溝は横断面形はV字状を呈する。南東隅は深さ約6cm程度であるが、南辺西端付近では約18cm、東辺北端付近では約11cmをはかる。柱穴P1は床面から深さ約14cmをはかる。

S B 3-bは少なくともS B 3-aを切っており、時期的には先行するものと考えられる。この遺構からは壁の一部と柱穴P2・炉跡を各1基確認した。壁は南壁と東・西壁の一部が残存している。平面形体はその残存状況から楕円形を呈していたものと考えられる。壁と床面との高低差はP2付近で約20cm、



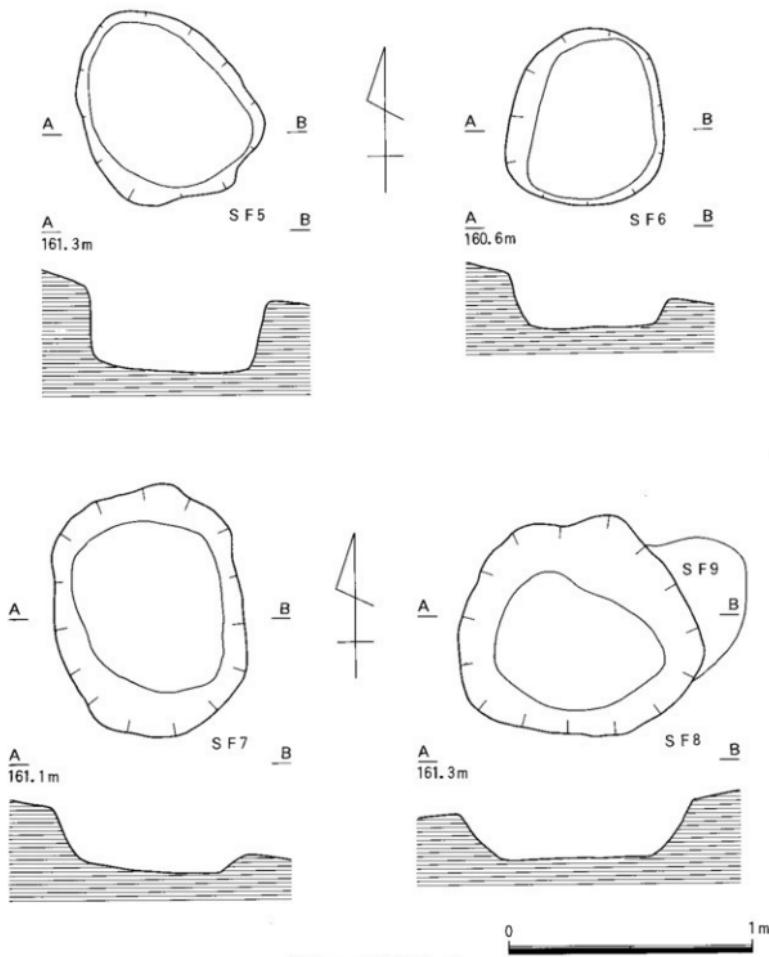
第10圖 SF・SP位置圖



第11図 SF実測図 1

南壁中央部で約13cm、をはかる。柱穴P 2は床面から深さ約10cmをはかる。

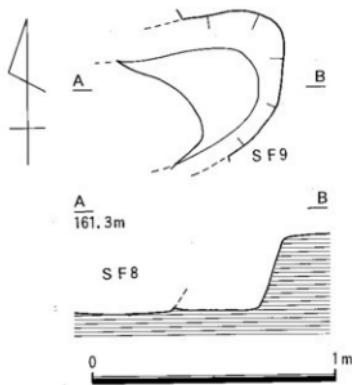
SB 3-cは壁溝の一部、と柱穴P 3を確認した。時期的にはSB 3-b・dより先行する遺構と考えられる。その残存状況から住居の平面形体は隅丸方形を呈していたものと考えられる。壁溝は南辺と東・西辺の一部が残存している。南西隅は壁溝が途切れているが、このあたりからは黄色土層の下から硬質のスコリア純層が露出していることから、あえて壁溝を設けなかったものと考えられる。壁溝の深さは南辺で約10cmで東辺は約14cmをはかる。柱穴P 3は深さ約6cmをはかる。北半部をSB-dにより切られている。



第12図 SF実測図 2

S B-dは壁溝と柱穴P 1を確認した。S B 3-cを切っており時期的に先行するものと考えられる。遺構の残存状況から隅丸方形を呈していたものと考えられる。壁溝の横断面形は東側ではV字状、西側では逆台形状を呈する。深さは東側で約9cmをはかる。床面は随所にスコリア純層が露出している。貼床は確認されなかった。P 4は遺構のほぼ中央部に位置する。深さは約26cmをはかる。他には柱穴は確認されなかった。

S B 3-a~dからは58・59・89・92・117・119・124・149・163・209の10点が出土した。石器は35の台石の他に剥片が18点出土している。これらの遺物がS B 3-a~bのどれに属するのかは判然とし



第13図 SF実測図 3

し、計測値は長径105cm、短径77cm、深さ26cmをはかる。SF 4はグリットの南辺のやや西端寄りの位置で検出された。平面形はややいびつな円形を呈し、計測値は長径68cm、短径66cm、深さ30cmをはかる。SF 5はグリットの南辺のほぼ中央部に位置する。平面形はややいびつな梢円形を呈し、計測値は長径87cm、短径68cm、深さ30cmをはかる。SF 6は前述したSF 1～5よりも、さらに谷状地形の底部寄りの位置で検出された。平面形は梢円形を呈し、計測値は長径72cm、短径65cm、深さ22cmをはかる。SF 7はC-3グリットで検出された土坑である。グリット北辺中央部、調査区南壁際の位置で検出された。平面形はややいびつな梢円形を呈し、計測値は長径103cm、短径78cm、深さ22cmをはかる。土坑内部からは礫が数点出土している。礫からは使用痕は確認されなかった。前述したSF 1～7までは谷状地形の西侧で検出されたものであるが、SF 8・9については谷状地形の東側、A-2グリットで検出された。SF 8はグリット中央部からやや南より、調査区北壁際の位置で検出された。この土坑はSF 9を切っていることから、時期的にSF 9より後出のものであろう。平面はややいびつな梢円形で、計測値は長径102cm、短径92cm、深さ26cmをはかる。土坑内部から石皿32、磨石25が礫数点と共に出土している。SF 9はSF 8に切られていることから、時期的に先行するものと考えられる。計測値は深さ29cmをはかる。この土坑からも礫が数点出土しているが、礫には使用痕は確認されなかった。

柱穴 (S P・第10図)

中峯遺跡からは48基の柱穴が検出されている。柱穴に関しては検出基数が多いことから、位置・平面形・計測値等を一覧表(第1表)にまとめて掲載し、本文においては柱穴群の概要のみ記述したい。柱穴群はB-2・3グリットを中心に検出された。柱穴は主に調査区中央部・SB 2北隅付近に集中域が確認されるが、配列等は看取できない。出土遺物に関しては3基から土器細片の出土が確認されているが、そのいずれも縄文時代前期前半代の所産と考えられる。よって柱穴群の所属時期は該期以降と思われる。

その他の遺構 (S X・第10図)

C-3グリットの調査区南壁中央部際に炉跡が検出されている。おそらく全体の半分は調査区外でありその全容は判然としない。南壁の土層の観察では、基本土層5層付近であるが、遺構らしき落ち込みのラインも観察できなかった。屋外炉の可能性がある。この遺構の周辺からは土器284が出土している。

ないが、163・209を除く8点までが縄文時代前期前半代に位置付けられるものである。

土坑 (S F・第10～13図)

中峯遺跡からは9基の土坑が出土している。9基のうちB-3グリットからは6基、C-3グリットからは1基、A-2グリットからは2基確認した。土坑についてではグリットごとに個々に記述してみる。次の5基はB-3グリットから検出された。SF 1はグリットのほぼ中央部からやや北西よりの地点に位置する。平面は不定形を呈し、計測値は長径93cm、短径80cm、深さ25cmをはかる。SF 2はグリットの西辺中央部付近に位置する。平面は不定形を呈し、計測値は長径77cm、短径67cm、深さ21cmをはかる。SF 3はグリットのSF 2から約70cm東側に位置する。平面形は不定形を呈

第1表 柱穴計測値表

番号	グリット	平面形態	計測値(cm)			備考
			長径	短径	深さ	
1	B-3	不定形	39	35	26	土器75出土
2	B-3	橢円形	58	48	58	
3	B-3	橢円形	31	26	28	
4	B-3	橢円形	46	34	26	
5	B-3	円形	40	37	41	
6	B-3	方形	23	20	28	
7	B-3	橢円形	50	37	22	
8	B-3	橢円形	35	28	20	
9	B-3	円形	35	32	22	土器130出土
10	B-3	橢円形	27	21	25	
11	B-3	円形	28	26	20	
12	B-3	円形	29	27	14	
13	B-3	橢円形	33	29	19	
14	B-3	円形	30	29	25	
15	B-3	橢円形	33	27	26	
16	B-3	円形	32	29	17	
17	B-3	円形	33	31	28	
18	B-3	橢円形	37	24	25	
19	B-3	橢円形	34	24	25	
20	B-3	橢円形	35	27	27	
21	B-3	円形	26	26	11	
22	B-3	円形	28	26	16	
23	B-3	円形	23	23	12	
24	C-3	不定形	44	22	36	
25	C-3	橢円形	35	22	18	
26	C-3	円形	38	35	21	
27	C-3	橢円形	55	32	22	
28	C-3	橢円形	29	20	27	
29	A-2	円形	40	38	27	S P 30と重複
30	B-2	橢円形	36	30	21	S P 29と重複・短径は推定値
31	B-2	橢円形	36	26	18	
32	B-2	橢円形	46	29	12	
33	B-2	橢円形	32	26	17	
34	B-2	橢円形	30	23	14	
35	B-2	方形	47	36	18	
36	B-2	橢円形	34	28	18	
37	B-2	円形	34	33	23	
38	B-2	橢円形	36	32	18	
39	B-2	円形	23	22	14	
40	B-2	円形	29	28	28	
41	B-2	円形	34	34	33	
42	B-2	橢円形	45	37	24	
43	B-2	橢円形	54	35	24	
44	B-2	橢円形	29	21	14	
45	B-2	橢円形	33	29	16	
46	B-2	不定形	58	30	15	S P 47と重複・長径は推定値
47	B-2	橢円形	60	33	43	土器142出土・S P 46と重複
48	B-2	円形	27	25	22	

第IV章 出土遺物

第1節 土器・土製品

中峯遺跡からはおよそコンテナ4箱分の土器片が出土している。土器片の所属時期は縄文時代早期から中期までと考えられる。時期的に遺構からの出土土器は縄文時代前期前半の所産と考えられる。土器片の大半が出土したのは基本土層第5層の黒褐色・暗褐色土層からである。これらは遺構面検出作業中に出土したものである。現地調査段階において、周囲の生活領域からの流れ込んだ遺物と判断されたことから、一括遺物として取り上げている。遺構から出土した土器片については可能な限り出土位置・標高を記録した。今回の報告にあたっては、遺構から出土した資料の解説も本章において行う。本節における分類基準は從来の土器型式に批准し、更に各群を細分してみた。ほとんどの器種は深鉢と考えられ、確実に浅鉢と考えられる資料は1点のみである。なお土器の時期・型式等については関野哲夫（静岡県教育委員会）・池谷信之（沼津市教育委員会）・木崎道昭（当研究所）の指導を得た。

第1群土器（1～6）

縄文時代早期に比定される土器群を一括した。全部で6点出土し、報告には全て採用した。全て基本土層第5層からの出土である。

第1類（1・2・4・6） 土器胎土中に繊維・石英・長石・金雲母・黒雲母等を含む。器面の調整は表面にヘラ状工具を使用した沈線文、裏面には条痕文が観察される。器厚は6から8.5cmをはかる。4は横位に施された沈線の上位に左・右上方から斜行沈線を施す。色調は暗褐色を呈する。1は横位に施された沈線の下位に、格子状に沈線を施している。2は横位の沈線と重複するように同じ工具を用いて刺突文・斜行沈線を施している。2の裏面には特に条痕文が観察される。6は器面の両面とも条痕文が観察される。前述の3点に比べ焼成は良好で、堅致な仕上がりである。

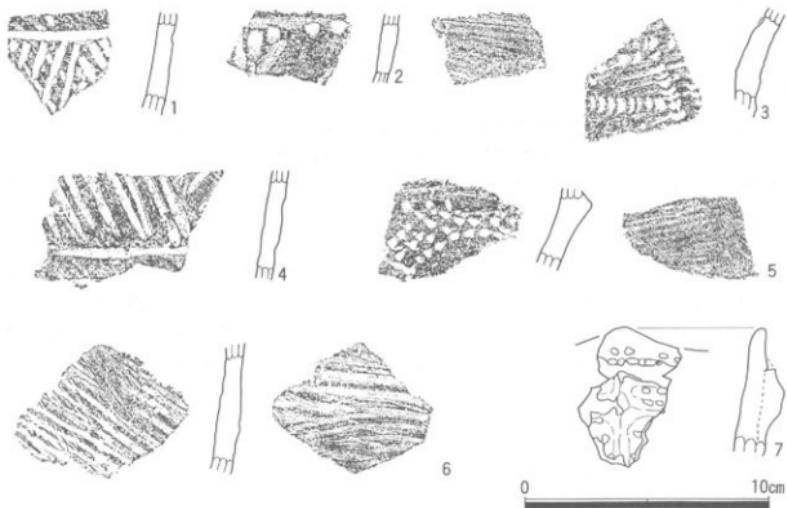
第2類（3・4） 土器胎土中に繊維・長石・石英・砂粒等を含む。器面の調整は表面には棒状の工具による刺突文が施されている。器厚は7から13.5cmをはかる。裏面には条痕文が施されている。4は棒状工具による刺突文が三列、弧状に施されている。部位としてはくびれ部付近と考えられる。3は地文に条痕文が施されている。その上に半截竹管状の施文具による刺突文を施している。

第2群土器（7～73）

縄文時代前期前半に比定される土器群を一括した。遺構から出土している土器群はこれに該当する。遺物のほとんどが包含層からの出土であるが、遺構から出土しているのは7点を数える。

第1類（7） 土器胎土中に繊維を含む。7は95年11月の試掘調査時に出土した土器である。試掘坑Dからの出土である。部位はその残存状態から波状口縁の波頂部付近と考えられる。表面には隆帯を横位に2条めぐらせ、波頂部付近の口唇部直下から縦位に隆帯を1条付加している。隆帯脇には細かい刺突文が施されている。裏面はナデ調整が施されている。

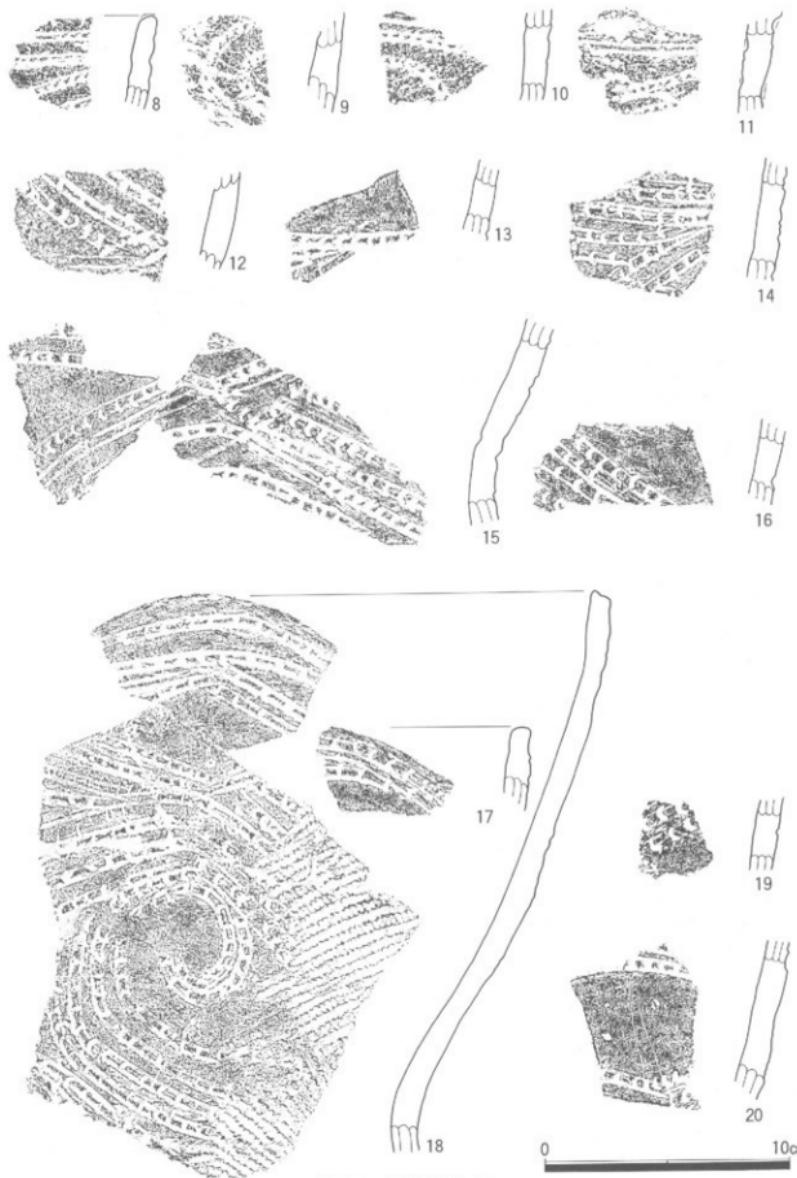
第2類（8～73） 土器胎土中には基本的に繊維・石英・長石・砂粒等を含む。ただし個体によっては繊維の含有量が微量、また破片によってはほとんど見られなかった個体もある。比較的砂粒も含む。



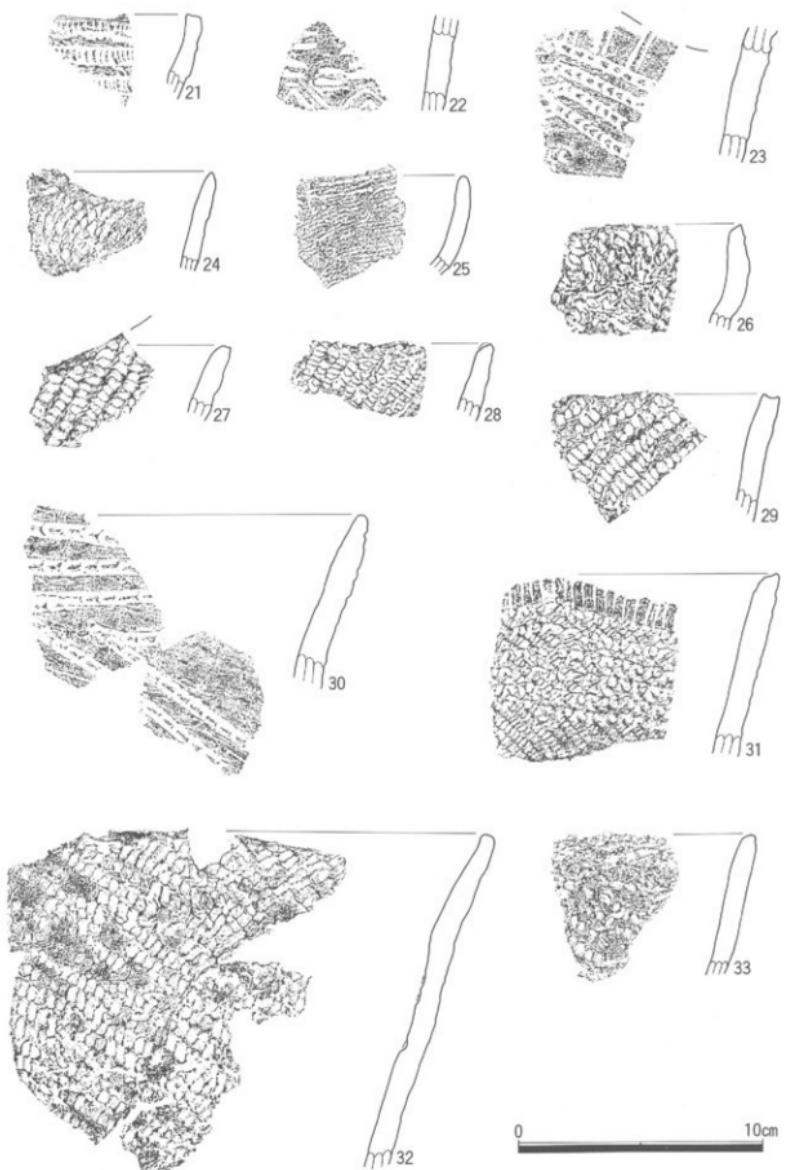
第14図 土器実測図 1

1. 器面の文様は半截竹管状の施文具を用いて爪形文を施している資料を一括した。

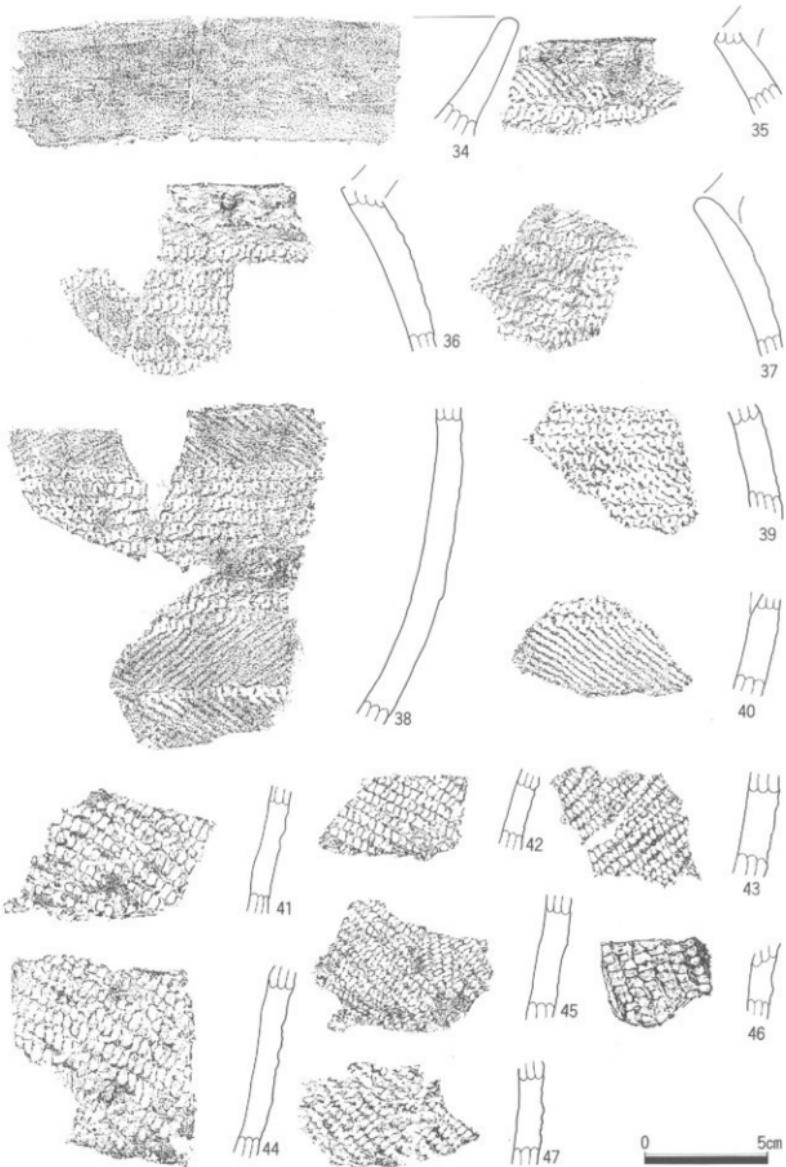
8～11までは胎土・文様から同一個体と判断された資料である。8のみが口縁部の資料で残りの3点は胴部の資料である。口縁端部は丸く仕上げられ、直線的に立ち上がる。9・10の資料から菱形文の内部に渦巻文が描かれていたと考えられる。11の上位には並行沈線が描かれている。これらの資料は被熱のために赤色化している。12～20までは胎土・文様から同一個体と判断された資料である。この個体は繊維を極微量含む。18はこれらの中でも残存状況が一番良好な資料である。口縁部は波状口縁と考えられる。胴部は大部分欠損しているが判然としないが、胴部一度くびれ部を有し、やや内湾気味に立ち上がる。器面の文様は口縁部直下に半截竹管状施文具により菱形文を施し、その下位に渦巻文を施す。同じくくびれ部付近の15は菱形文が描かれていることから、18の渦巻文のさらに下位には菱形文らしきモチーフが描かれていたものと考えられる。18についてはその一連の文様を斜行縄文を用いて消している。斜行縄文の上位はLR、下位はRLである。渦巻文の左上方にはまた別個体の半截竹管状の施文具による爪形文が観察される。渦巻文の中央部には施文以前に横位のナデの痕跡が観察される。裏面はナデ調整である。18はSB2北壁際の土坑から出土したものである。20は菱形文の中央部付近か。焼成以前に線刻がなされている。12はSF4からの出土である。21・23・30は口縁部の資料である。21は前述の資料とは異なり幅の広い半截竹管状の施文具を使用している。口唇部直下から横位の3条の爪形文を施している。23はその残存状況から波状口縁と考えられる。繊維は微量含まれる。口唇部から縦位に並行沈線を施し、その直下に菱形文を施している。裏面はナデ調整か。30もその残存状況から波状口縁と考えられる。口唇部直下から爪形文を横位に3条施し、その下位に斜方向に2条の爪形文を施している。裏面はミガキ調整が施されている。22は胴部の資料である。上位には半截竹管状の施文具を用いて、押し引き気味に刺突し、その下位に同一施文具を用いて波状文を描く。裏面はミガキ調整を施す。繊維は微量含む。



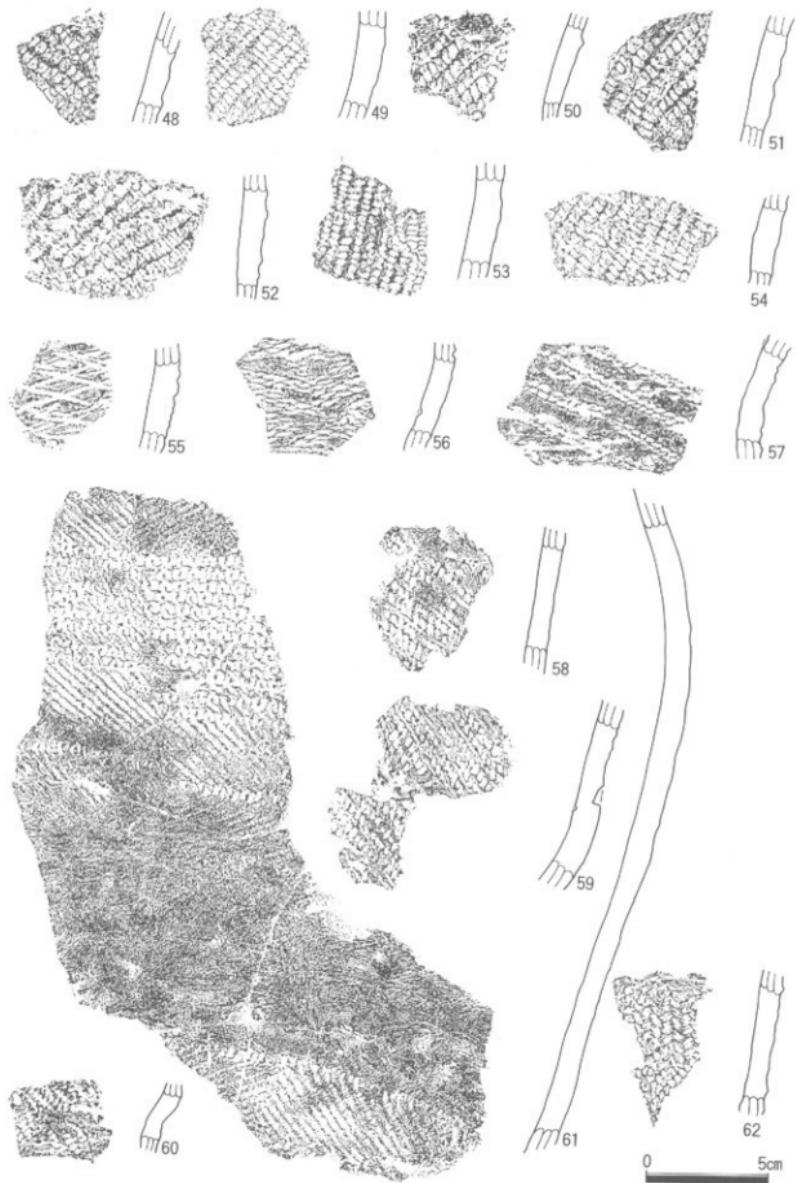
第15図 土器実測図 2



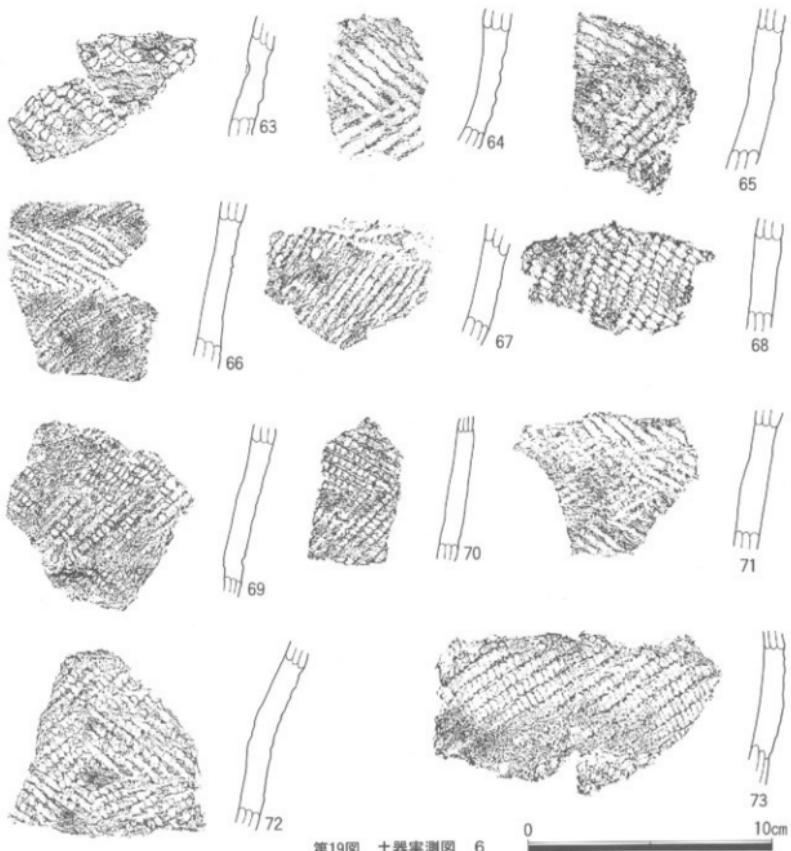
第16図 土器実測図 3



第17図 土器実測図 4



第18図 土器実測図 5



第19図 土器実測図 6

0

10cm

2. 器面の文様は縄文・撚糸文等を主体に施している資料を一括した。

24～29、31～33までは口縁部の資料である。24・26・28・29・33はその残存状況から単純口縁と考えられる。24は直線的に立ち上がる。器面にはLRの斜行縄文が施される。26は内湾気味に立ち上がる資料である。器面には異条縄文が施されている。28はSB2から出土した。器面にはLRの斜行縄文が施されている。29も器面にLRの斜行縄文が施されている。33は直線的に立ち上がる資料である。器面には異条縄文が施されている。25・27・31・32はその残存状況から波状口縁と考えられる資料である。25は内湾気味に立ち上がる資料である。細かい節を持つLRの斜行縄文が施された後に、口唇部直下に2条の刺突文を施している。施文具は半截竹管状の工具の可能性がある。SB2からの出土である。27は器面にLRの斜行縄文が施されている。31は直線的に立ち上がる資料である。口唇部は内削ぎ状を呈する。口唇部から縦位に並行沈線を施し、その直下に6段のループ文を施している。裏面はミガキ調整を施している。32も直線的に立ち上がる資料である。波頂部は欠損している。器面に粗いRLの斜行縄文

が施されている。裏面はミガキが施されている。44と同一個体である。34~40まではその胎土と文様から同一個体として判断された資料である。胴部は内湾気味に立ち上がり、おそらく38の上位付近が胴部最大径をはかる部位であり、そこから頸部に向かって径を減ずる。35~37は頸部付近の資料である。その頸部から34の様な口縁部が直線的に立ち上がると思われる。口縁部の器面はナデ調整が、内面はミガキ調整がなされ、頸部から数段のループ文が施されている。なお土器製作時に頸部まで施文し、かなり乾燥させてから口縁部に形成する粘土紐を追加して接合しているため、34の下端折損面には頸部に施文された紐文がプリントされているのが観察される。61はSB1から出土した資料である。胴部下位は直線的に立ち上がり、胴部最大径をはかる部位からはわずかに内湾気味にすぼまる。胴部上位には数段のループ文が施文されているが、胴部下位に無文帯を設けている。下端には再度ループ文が施されている。41~54・60・63・67は斜行縄文が施されている胴部の資料である。41・42・44~48・60はRLである。44は32と同一個体である。60はくびれ部を持つ。43・49~54・67はLRである。55~57は撚糸文を施している。55は網状撚糸文である。58・59はその胎土・文様から同一個体として判断された資料である。器面に付加条縄文RL+@が施されている。2点とも被熱のため赤色化している。裏面はミガキ調整が施されている。SB3からの出土である。62は組紐文を施している。64~66・68~73までは羽状縄文が施されている。64は筋が判然としない。内湾気味に立ち上がる資料である。72は中位付近でわずかに外折する資料である。

第3群土器（74~153）

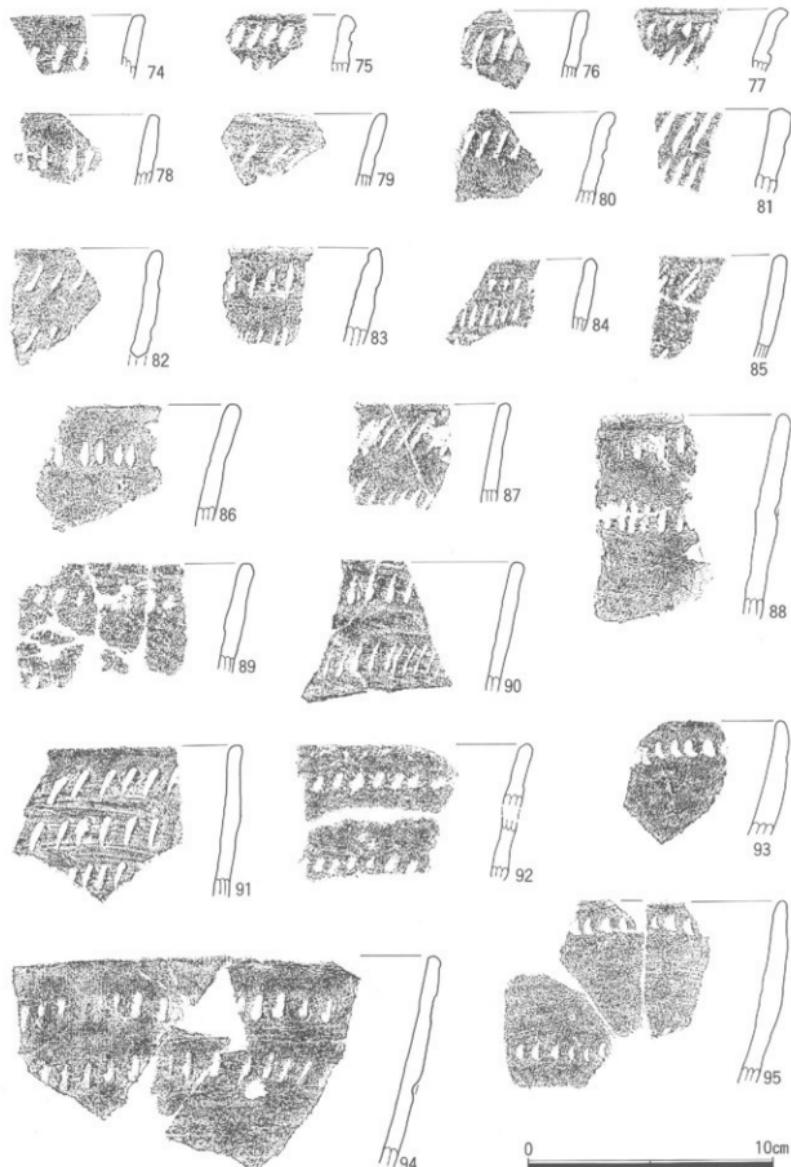
第2群土器とは別系統と考えられる縄文時代前期前半代の土器を一括した。遺構から出土しているのは12点を数える。

第1類（108~113） 土器の胎土中には纖維は一切含まれない。長石・石英など白色系の粒子を含む。文様は貝殻腹縁で刺突したものである。裏面には条痕調整がなされる。焼成は良好で、他の土器群と比べて3~5mmと薄手で、堅敏な仕上がりである。

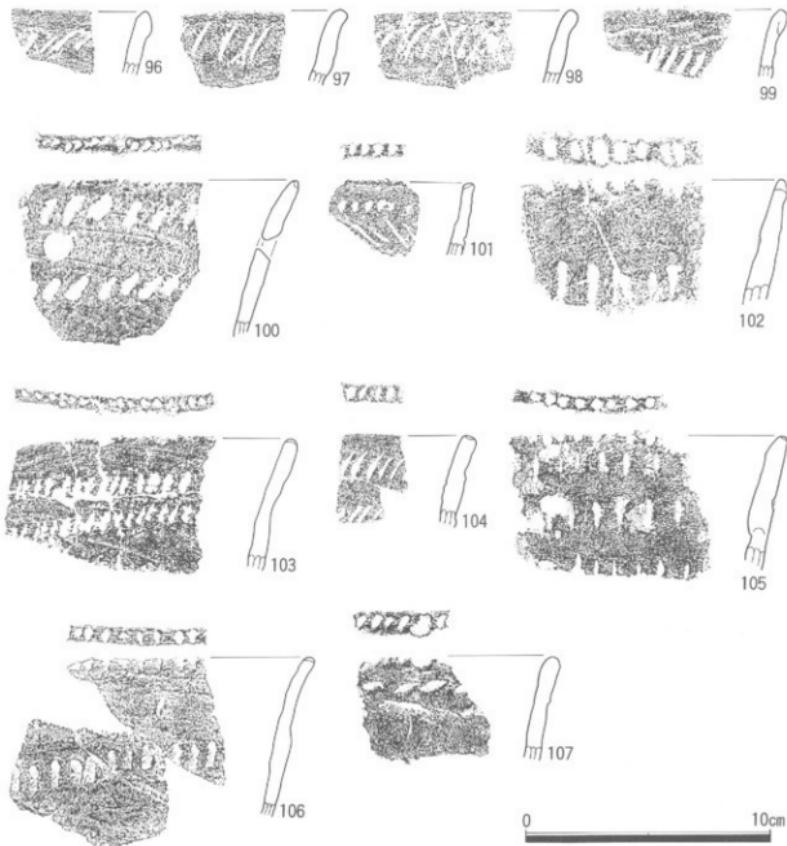
108・111~113はその胎土と文様から同一個体と判断された資料である。108は口縁部である。直線的に立ち上がる。器面には消えかかっているが、口唇部直下から貝殻腹縁で羽状に刺突している。また口唇部も貝殻腹縁で軽く刺突させ、刻目を施している。111と112は貝殻腹縁による刺突文の下位に条痕調整が施されている。37は部位的には前述の2点より下位である。両面とも条痕調整が施されている。109も施文具は判然としないが、胎土と器厚の薄さから第1類に分類した。110は外反気味に立ち上がる。器面には少なくとも2条の刺突文が観察される。貝殻腹縁による刺突文か判然としない。

第2類（74~107・114~153） 土器の胎土中には纖維・雲母類は一切含まれない。長石・石英などの白色系粒子を比較的多く含む。器面に観察される文様は全て刺突文である。器面には刺突文を施す前に横位のナデ調整を行うため、各部分に擦痕に近いナデ跡が観察される。前述の第1類と比べて器厚は厚手で、焼成もわずかに劣る。砂粒等を比較的多く含むため器面はざらつく感がある。また第1類が裏面を条痕調整を施すのに対して、第2類は専らナデ調整を施しており、資料によっては指頭痕が明瞭に観察される。なお刺突文のタイプは概ね次のように分類される。

Aタイプ・先端部が平坦なヘラ状工具で施文したもので、縦位にもしくは右・左のいずれかの方向へ傾斜させ、横方向へ連続して刺突される。工具の先端部は丁寧に整形したものもあれば、けばや凹凸があり刺突文自体が「コ・E」字状に観察されるもの、半截竹管状の施文具である可能性があるもの等、様々なパターンがある。第2類に属する土器群にはこの文様が多く採用されている。



第20図 土器実測図 7

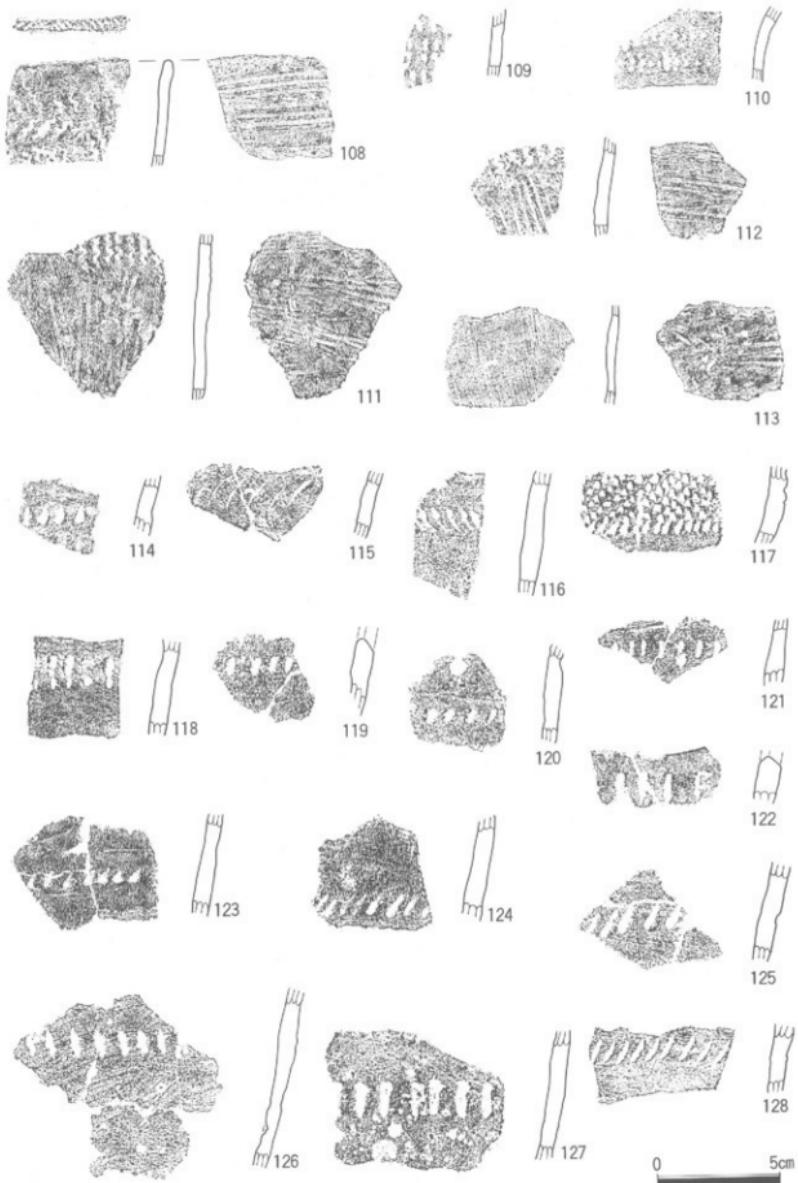


第21図 土器実測図 8

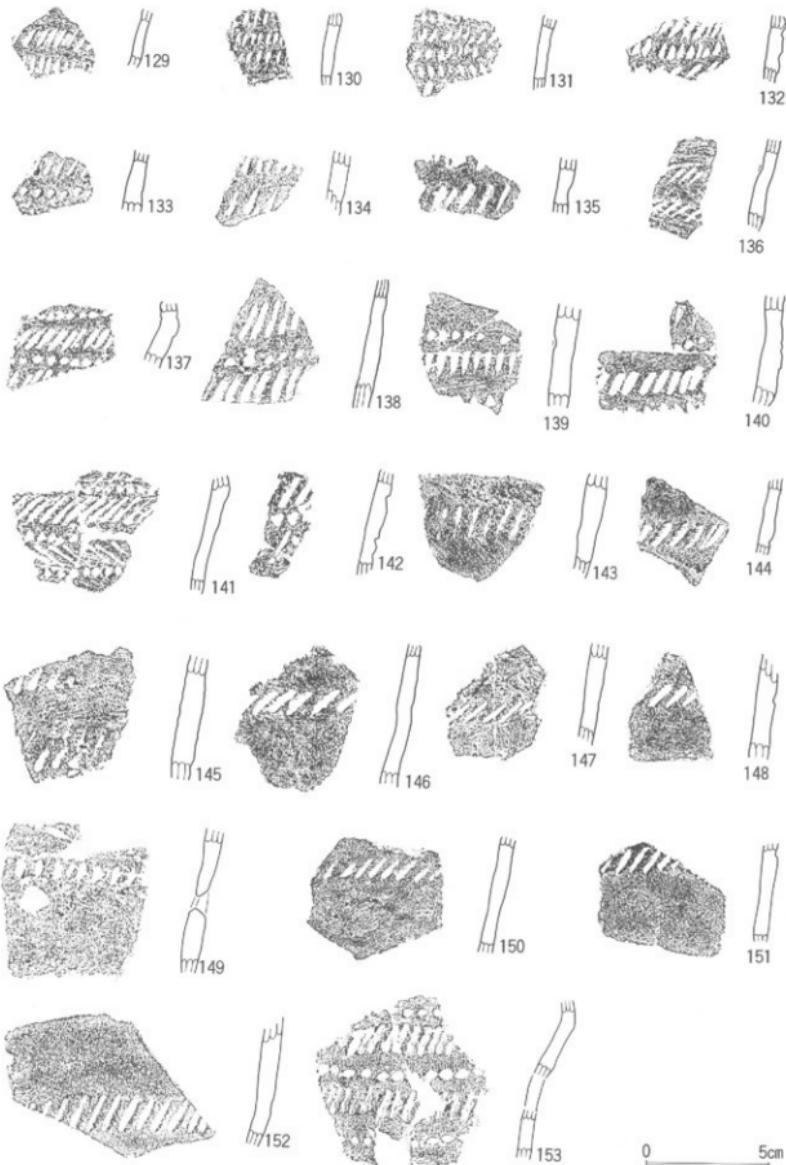
Bタイプ・明らかに半截竹管状の施文具の使用が確認される。器面には半月状の刺突文が観察される。施文具の外側を器面に押し刺した結果である。第2類に属する土器群にはあまり見られない。

Cタイプ・先端部を尖らした棒状工具、もしくはAタイプの施文具の端部を用いて刺突するため、仕上がりが点状の文様として観察される。Cタイプのみで文様帯を構成する例は少なく、Aタイプと交互に横方向へ連続して刺突されることが多い。

74~107は口縁部の資料である。74~99までは単純口縁である。大半の口縁部が直線的に立ちあげているが、77・80・96~99は口唇部付近を外側にわずかに屈曲させている。96~99はその胎土と文様から同一個体として考えられる。93・95もその胎土と文様から同一個体として考えられる資料である。わずかに内湾気味に立ち上がり、口唇部直下にBタイプの刺突文を施し、約4.5cm程の間隔を開けてから、同一の施文具を用いて刺突文を施している。施文のパターンとして口唇部直下に連続刺突文を横位に施す。



第22図 土器実測図 9



第23図 土器実測図 10

そして間隔を置き、もう1条連續刺突文を施すのが多い。91については3条刺突文施している。75・77・81・84についてはかなり密接させている。また85については2条の刺突文を完全に重複させている。74・75・94は薄い板状の施文具を使用しているが、下端部をわずかに折り曲げて刺突しているため刺突文下端がややふくらみを持つ。

100~107までは口唇部に刻目を有する口縁部である。前述の単純口縁の資料と同様、連續する刺突文を2条施す資料が100・103・104である。100の口唇部の刻目は先端部が鋭く加工されたまた別の施文具を使用している。103の文様は先端部に凹凸を有する板状工具を使用している。104は刺突が浅いため半截竹管状の施文具を使用したものか判然としない。101はAタイプとCタイプの文様の組み合わせである。102・106は口唇部からかなり間隔を開けて連續した刺突文を施している。105の口唇部は100と同様、また別の施文具を用いて刺突している。器形については100・103・106が器厚が薄手で外反気味に、もしくはやや外折して立ち上がるものに対し、102・105のように器厚が厚手で、直線的に立ち上がる2タイプに分類される。

114~153は胴部の資料である。大半がAタイプの施文が観察される。114・118~122・124~128・143・144・146~152はAタイプの刺突文を1条横位に連続して施す資料である。118は先端に凹凸がある施文具を用いている。120は上位に表から穿孔しようとした痕跡が観察される。124・127については比較的の器厚が厚手に仕上げられている。Aタイプが2条施されているのが、134~136・145の4点である。136についてはかなり薄手の施文具を用いている。145は上位の刺突文列の一部がナデ消されている。Bタイプの文様が観察されるのは115・116・123・129~132である。115は胎土と文様から96~99と同一個体である可能性がある。129~131は器厚が薄手に仕上げられている。そのため文様は施文具を斜め方向から浅く刺突させたものである。132・133・137~142・153はAタイプとCタイプの文様が交互に施されている。特に137・141・153については屈曲部を有する。屈曲部付近の施文については残存部の比較的大きい141・153からみて、基本的に3条の連続したCタイプの刺突文の間にAタイプの刺突文列を配するもので、文様列5条を1つの単位として考えられよう。なお遺構から出土した資料は次の通りである。126・147がS B 2から、89・92・117・119・124・149がS B 3から、151がS F 7から、75がS P 1から、130がS P 9から、142がS P 47から出土している。

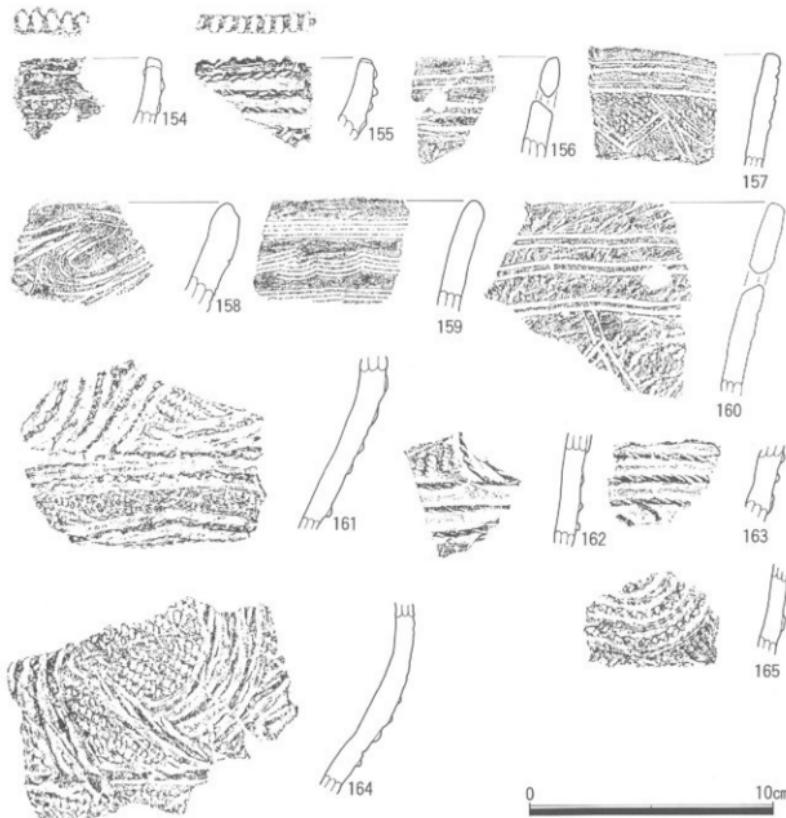
第4群土器 (154~254・262・270・271・274~281)

縄文時代前期後半代に比定される土器群を一括した。ほとんどの資料が基本土層第5層からの出土である。遺構から出土しているのは6点である。S B 2・S B 3からの出土である。

第1類 (154~254・270・271・274~281) 土器胎土中に石英・長石・雲母・砂粒等を含む。第2群土器まで胎土中に含まれていた纖維は一切含まれない。焼成は良好で、仕上がりも堅緻である。

1. 器面に刻目・縄文を施した細い粘土紐 (浮線文) を貼り付けている資料を一括した。

154・155は口縁部の資料である。2点とも口唇部に刻目を施している。154は縄文が施された浮線文を横位に2条貼り付けている。155には刻目が施された浮線文を3条貼り付けている。2点とも内湾気味に立ち上がる資料である。161~165は胴部の資料である。161は地文にR Lの斜行縄文を施している。横位に3条貼り付けられた浮線文の上位には、渦巻状もしくは蕨手状に浮線文が貼り付けられていたと考えられる。162・163はその胎土と文様から同一個体と判断される。163はS B 3からの出土である。164は地文にR Lの斜行縄文を施している。下位に横位の浮線文を1条貼り付けた後、その上位にさらに蕨手状の浮線文を貼り付けている。165は縄文を施した渦巻状の浮線文を貼り付けている。281は胴部から口

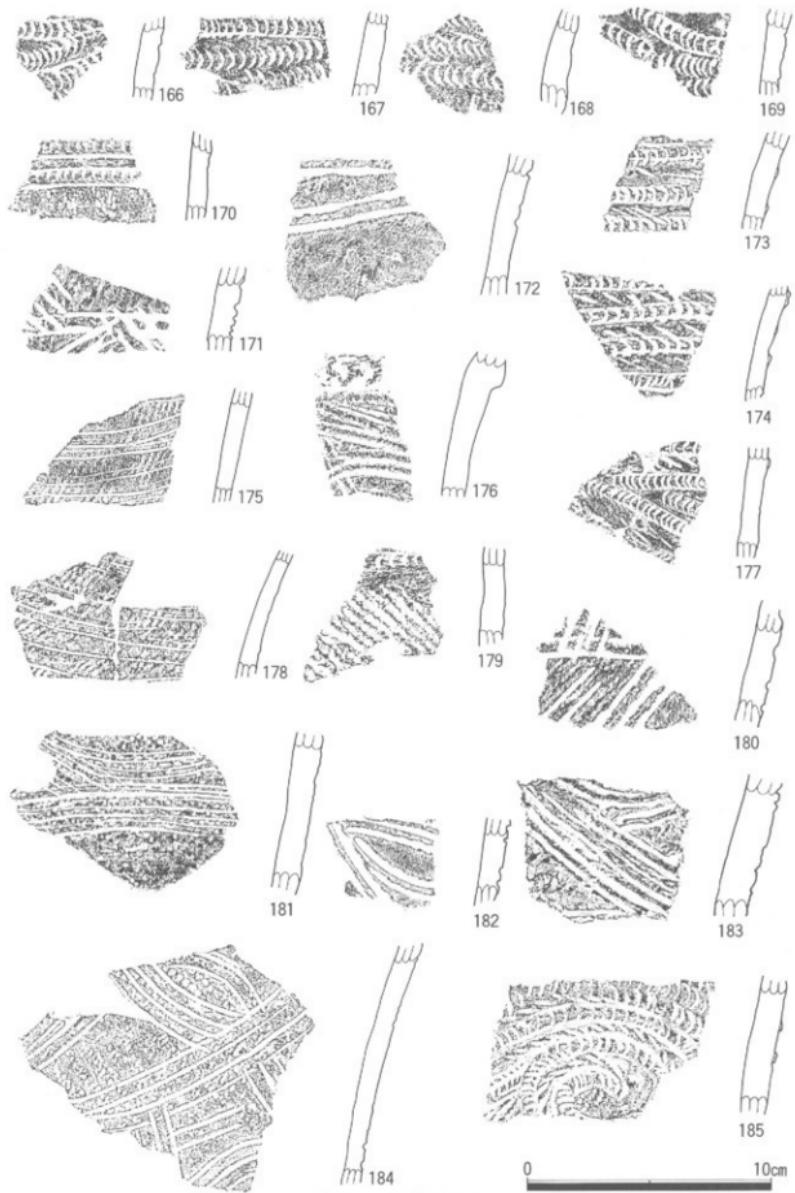


第24図 土器実測図 11

縁部にかけて残存する資料である。器形は直線的に立ち上がり、中位付近からわずかに内湾気味に立ち上がる。この資料は波状口縁を呈し、底部にもわずかな隆起が見られる。器面には複数の浮線文が貼り付けられている。地文はR Lの斜行縄文である。地文を施した後、器面に浮線文を貼り付け、さらにR Lの斜行縄文を施している。内面はナデ調整が施されている。

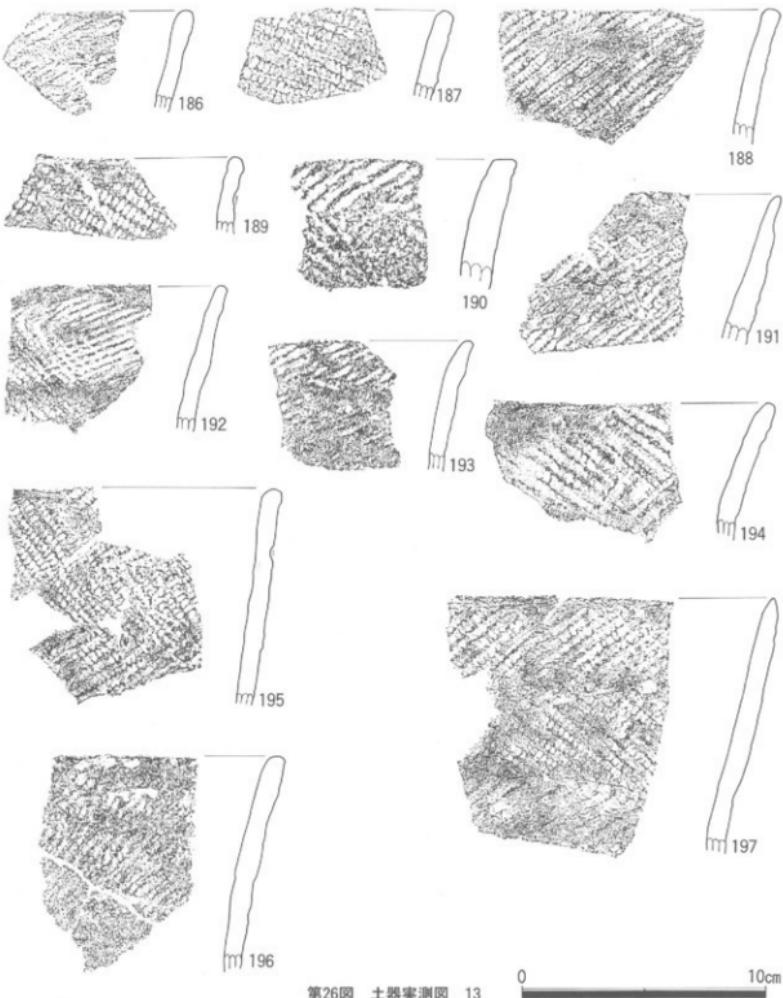
2. 器面に半截竹管状の施文具を用いて爪形文・平行沈線文を主体に施している資料を一括した。資料の中には浮線文を伴うものも存在するが、本報告ではこのタイプの中に一括して分類した。

156～158・160は口縁部の資料である。156は口唇部の直下に3条の平行沈線文を施している。157は地文にR Lの斜行縄文を施している。口唇部直下に2条の平行沈線文を施し、その下位に同一の半截竹管状の施文具を用いた網状文が観察される。160も157と同一の施文パターンである。ただし地文はかなり粗いLRの斜行縄文を施している。158は半截竹管状の施文具を波状に押し引きした資料である。166～



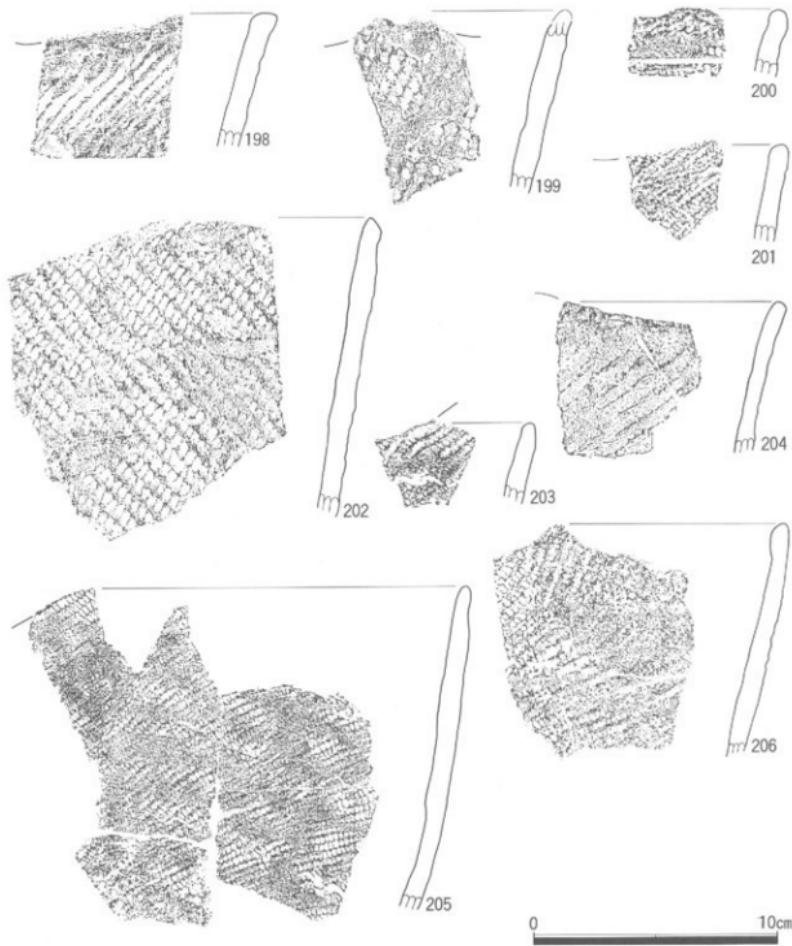
第25圖 土器実測図 12

185は胴部である。166～170・173・174・177・179・185は爪形文が施されている。166～168はその胎土と文様から同一個体と判断される。3点とも爪形文が施されている。169も爪形文が施されているが、前述の個体とは別個体である。170・179は下位にR Lの斜行縄文が施されている。173・174はその胎土と文様から同一個体と判断される資料である。横位に貼り付けられた各浮線文の間に爪形文が施文されている。浮線文上に観察される刻目は、爪形文が施された後、ヘラ状の工具を用いて施されたものである。177も浮線文を伴う資料である。185は渦巻状に浮線文を貼り付けた後に爪形文を施している。173・174は同一個体の可能性がある。171・172・175・176・178・180～184は平行沈線を施した資料である。172は横位の平行沈線を2条施している。その下位には無文帶が観察される。171・180はその胎土と文様から同一個体と判断される資料である。まず横位に平行沈線を施した後に斜位の平行沈線を施している。175・178はその胎土と文様から同一個体として判断される。器厚は比較的薄手であるが焼成は良好で、仕上がりも堅敏である。地文にL Rの斜行縄文を施し、その上にヘラ状の工具で横位の沈線を施している。176は墻帶直下に平行沈線が横位・斜位に施されている。墻帶は同一工具により刺突されている。181は地文にR Lの斜行縄文が施されている。横位の平行沈線を3～4条施し、その上位に平行沈線文を施す。182・184は平行沈線で構成された木の葉文が施されている。184は地文にR Lの粗い斜行縄文を施し、斜位の平行沈線文を2条施した後に、木の葉状のモチーフを描いている。器形から肩部中位付近と判断される。183は渦巻状に施していたものと考えられる。274は今回の調査で出土した土器の中において、浅鉢と判断された唯一の資料である。底部から胴部中位付近まで残存している。器形は直線的に立ち上がり、内折して垂直に立ち上がったものと考えられる。地文はR Lの斜行縄文である。内折部外面には横位の並行沈線文が描かれ、それに斜交するように2条沈線が観察される。275は口縁部から底部まで残存している資料である。残存率は約3分の2である。器形は底部から外反気味に立ち上がり、口縁部は丸く仕上げている。土器を真上から観察すると楕円形状を呈している。底部も楕円形であることから、製作当初からその器形を意図したものであると考えられる。地文にはR Lの斜行縄文を施している。口唇部直下に2条、基部中位に1条の横位の爪形文を施して文様帶を区画している。区画された文様帶の内部は残存状況から、半截竹管状の施文具を用いて三角形のモチーフを巡らしていたものと考えられる。モチーフの内部には蕨手状の文様が描かれている。施文の順序として地文のR Lの斜行縄文を施し、その後に半截竹管状の施文具を用いた文様が描かれたと思われる。さらに各三角形モチーフ間の地文はナデ消すという工程が観察される。これら一連の工程の後にさらに別の施文具により、器面に不規則ながら細かな爪形文を残している。内面は横位のミガキ調整が施されている。276は胴部下位から口縁部まで残存する資料である。器形はやや直線的に立ち上がり、胴部中位の文様帶付近より外反しながら立ち上がっている。口縁部は丸く仕上げられている。地文はR Lの斜行縄文を施している。口唇部直下には1条、胴部中位には2条の横位の爪形文を施して文様帶を区画している。文様帶内部は並行沈線による木の葉文が施されている。各木の葉文間の地文は、ナデ消された痕跡が部分的に観察される。内面はナデ調整が施されている。277は復原実測した資料である。胴部中位から口縁部まで残存している。器形は文様帶付近から外反気味に立ち上がるものと考えられる。口唇部はやや平坦に仕上げられている。地文はR Lの斜行縄文である。口唇部直下には3条、胴部中位には2条の横位の爪形文により文様帶が区画されている。特に口唇部直下の各爪形文の間にヘラ状の工具を用いて斜方向の刻目を施している。文様帶の内部は半截竹管状の施文具により、三角形のモチーフが描かれている。胴部中位を区画する2条の爪形文は間隔を設け、その間の地文はナデ消している。278は胴部上位から口縁部付近と考えられる。器面全体には半截竹管状の施文具による並行沈線文を施している。地文はR Lの斜行縄文を施している。279は95年11月の試掘調査時に出土した資料である。試掘坑Dからの出土で、調査区B-3グリット付近である。胴部中位から口縁部まで残存する資料である。器形はやや直線的に外反するである。口縁部は丸



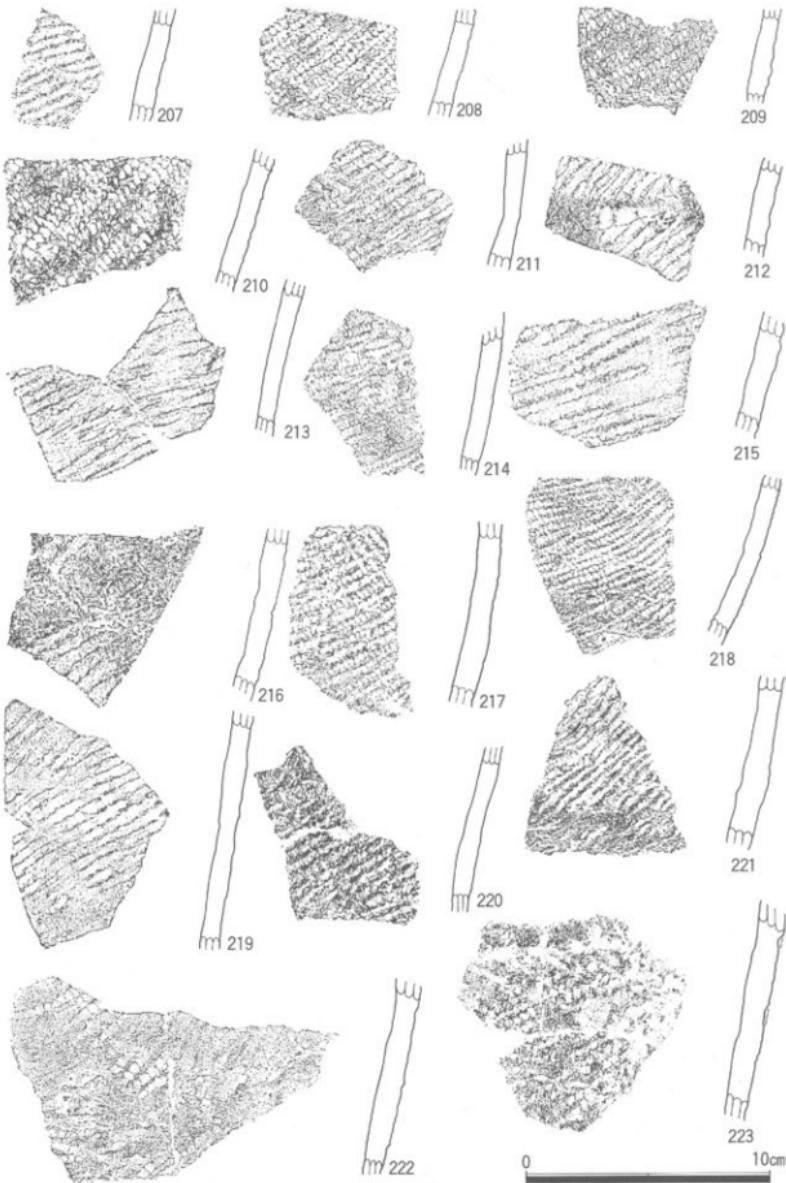
第26図 土器実測図 13

く仕上げられている。口縁部には2単位の小突起が観察される。残存部からこの資料は275と同様に梢円形を呈していた可能性がある。地文はR Lの斜行縄文を施している。口唇部直下に2条の爪形文と1条の隆帶を、残存部の下位には2条の爪形文により文様帶を区画している。区画された文様体の内部には半截竹管状の施文具により三角形のモチーフが描かれている。その内部にはさらに縱位の並行沈線が施されている。各三角形モチーフ間の地文は、施文工程の最後でナデ消されている。隆帶の刻目は爪形文が施された後につけられたものである。

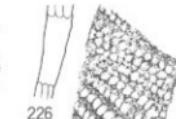


第27図 土器実測図 14

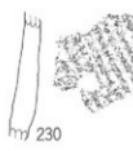
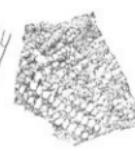
3. 器面の文様は縄文・撚糸文等を主体に施している資料を一括した。第2群土器の第2類-2との区別は土器胎土中の繊維の有無によって行った。よって第2群土器第2類-1にも存在する繊維を極微量しか含まないタイプの土器と同時期・同形式の資料が混在している可能性があることを前置きしておく。186~206は口縁部の資料である。186~197は単純口縁である。193については残存部中位付近からわずかに外折させている。L Rの斜行縄文が施されているのは186・188・191・193・196である。R Lの斜行縄文が施されているのは187・189である。190・192・194・195・197については羽状縄文が施されている。189・195・197の3点の胎土は金雲母を多く含むのを特徴とする。焼成もすこぶる良好で仕上がりも堅緻



第28図 土器実測図 15



229



231



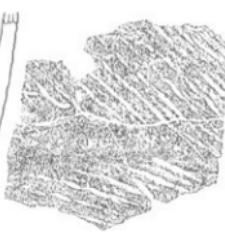
234



236



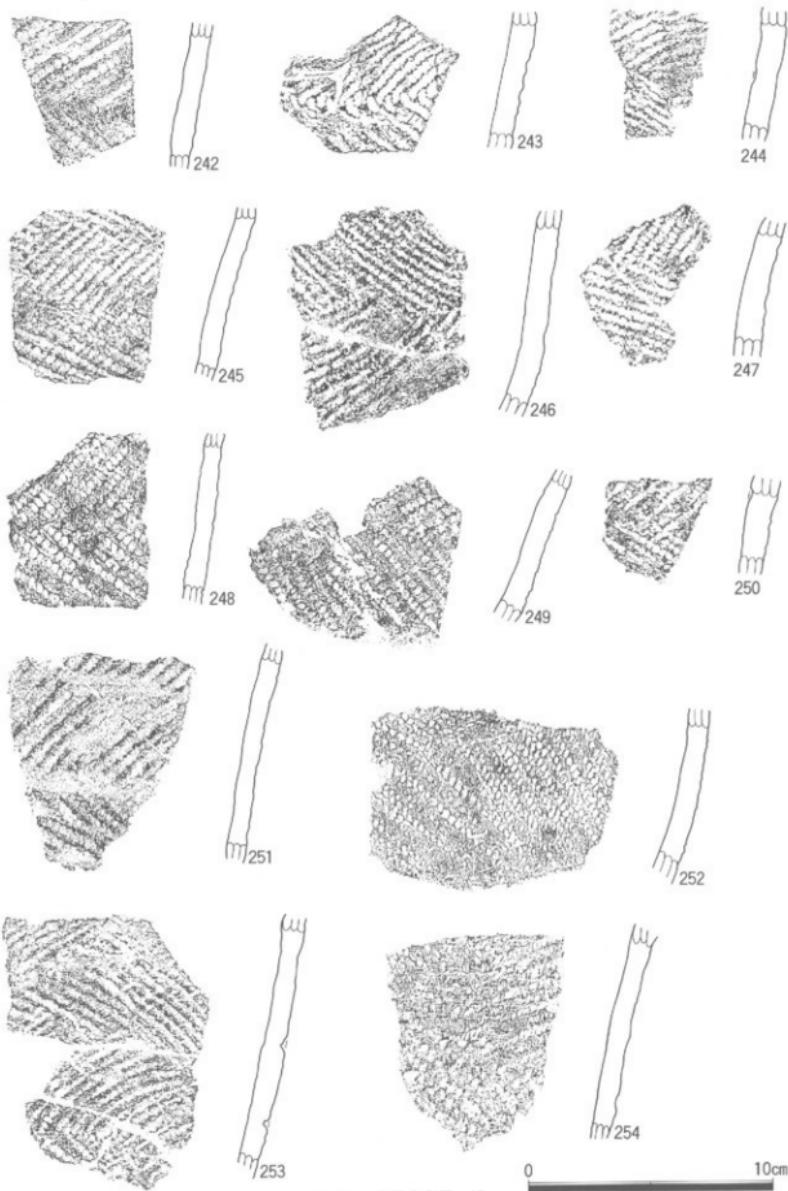
239



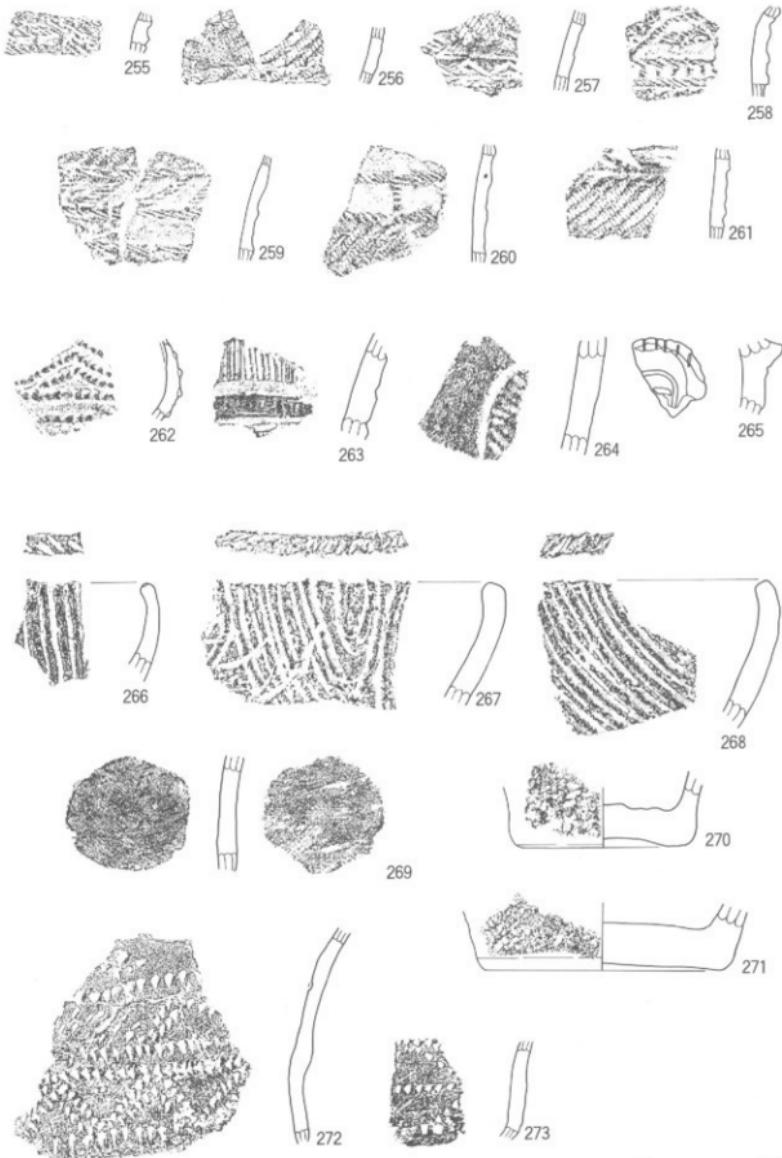
240



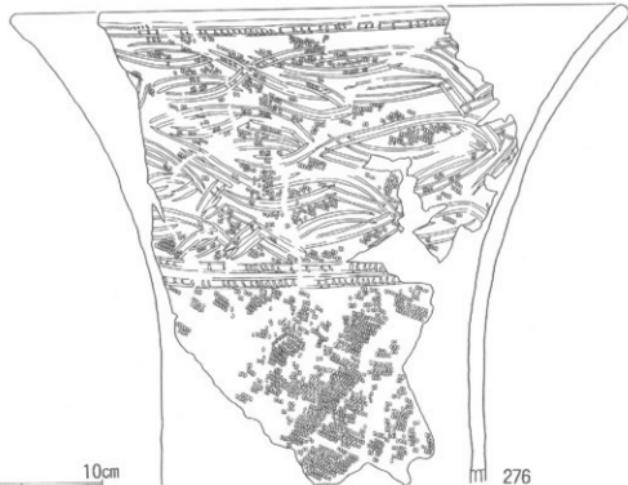
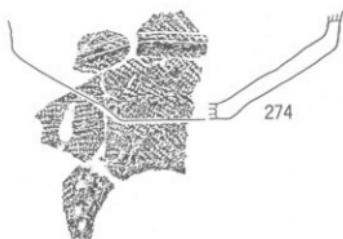
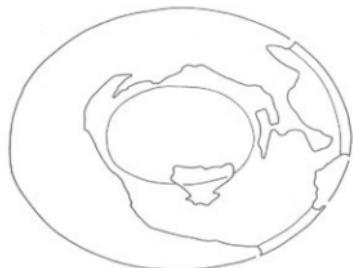
第29図 土器実測図 16



第30図 土器実測図 17

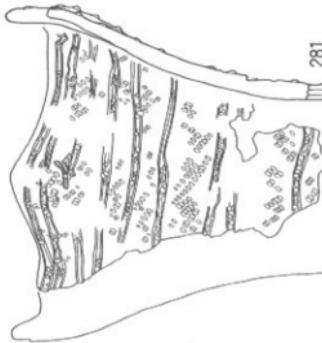


第31図 土器実測図 18

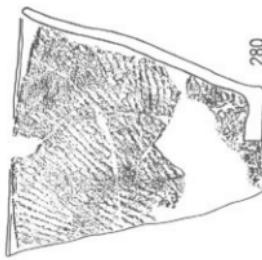


第32図 土器実測図 19

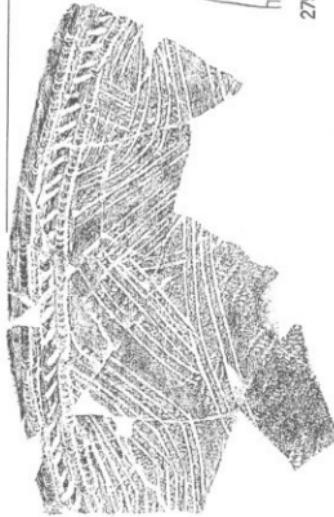
281



280



279



278

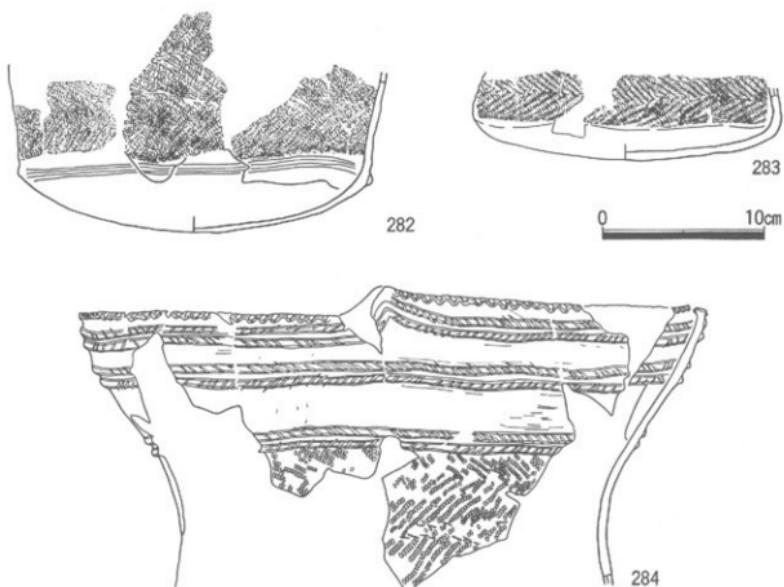


277



20cm

0



第34図 土器実測図 21

である。文様と胎土からこの3点は同一個体の可能性がある。198~206は波状口縁である。L Rの斜行縄文が施されているのは198・199・201・203~206である。200は口唇部付近を内湾気味に仕上げている。口唇部直下には横位の沈線が観察される。施文具の種類は判然としない。203は結節縄文が観察される。207~254は胴部の資料である。207~223はL Rの斜行縄文である。212・213・215・219については筋の単位が粗く判然としない。217・223については羽状縄文の可能性がある。R Lの斜行縄文が施されているのは224~235・237~239・241である。237は結節縄文が観察される。236・240についてはRの無節縄文と考えられる。242~251・253は羽状縄文が施されている。252は撚糸文である。254はR Lの斜行縄文の上に撚糸文を施したものと考えられる。280は口縁部から底部まで残存した資料である。全体の3分の1が残存する。器形は底部から直線的に立ち上がり、胴部中位付近でわずかに内折し、口縁部まではやや外湾気味に立ち上がる。口縁部は丸く仕上げている。器面にはL Rの斜行縄文が一面に施されている。内面はナデ調整がなされている。270・271は底部の資料である。270は被熱のため全体が赤色化し、脆くなっている。271は被熱の影響等は観察されない。焼成は良好で、仕上がりも堅緻である。2点とも底部には木の葉、編み物等の圧痕は観察されない。

第2類(262) 土器胎土中に長石・石英・砂粒等を含む。焼成は良好で、仕上がりも堅緻である。262は器面に結節状浮線文を貼り付けている。第1類と比較して薄手に仕上げられている。

第5群土器 (255~261・282~284)

第4群とは別系統の縄文時代前期後半代の土器を一括した。遺構から出土しているのは1点も無く、

全て基本土層第5層からの出土である。

第1類 (255~261・282~284) 土器胎土中に石英・長石・砂粒等を含む。胎土中には纖維を一切含まない。焼成は良好で仕上がりも堅歯である。第4群の土器と比較して薄手に仕上げられている。

1. 器面に刻目・縄文を施した細い粘土紐（突帯文）を貼り付けている資料を一括した。

255・257~261は胴部である。255・258・260の3点は突帯文による梯子状のモチーフが観察される。突帯文にはヘラ状の工具によるかなり細かい刻目が施されている。260・261については突帯文直下にL Rの斜行縄文が観察される。6点とも被熱の為に橙色化し、遺存状態も良好ではない。282は底部から胴部中位まで残存した資料である。底部は丸底状を呈する。周縁部には突帯を貼り付けている。器形は突帯付近から直線的に立ち上げている。器面には突帯を貼り付けた後に羽状縄文が施されている。底部外面はナデ調整が施されている。内部はナデ調整が施されており、見込みを除き概ね炭が吸着している。284は胴部中位から口縁部まで残存する資料である。器形は残存部下位はやや内傾気味で、残存部中位付近からやや内湾気味に立ち上がる。口唇部は指で強めに押圧して平坦に仕上げた後、棒状の工具で刻目を施している。口縁部には突起が1ヶ所残存している。他の口縁部の残存状況からもう1ヶ所に突起があったものと考えられる。器面には6条の突帯が貼り付けられている。2本を1単位とし、互いに異なる斜方向の刻目を施している。6条目の突帯直下には羽条縄文が観察される。縄文は突帯が貼り付けられる前に施されたものと考えられる。3単位の突帯文の間は擦痕を伴うナデ調整が施されている。内面はナデ調整が施されている。

2. 器面の文様は縄文を施している資料を一括した。

256は胴部である。L Rの斜行縄文が観察される。残存部下位には粘土紐の接合痕が観察される。283は底部付近の資料である。底部はやや下方に膨らむ。器形はわずかに内傾気味に立ち上がる。器面には羽状縄文が施されている。底部外面はナデ調整が施されている。内面はナデ調整が施されている。内面は見込みを除き炭化物が付着している。

第6群土器 (263~265)

縄文時代中期に比定される土器を一括した。全部で3点出土している。遺構から出土しているのは1点もなく、全て基本土層第5層からの出土である。

第1類 (265) 土器胎土中には石英が微量含まれる。焼成は良好で、仕上がりも堅歯である。265は顔面意匠か。器面は丁寧に磨かれている。

第2類 (263・264) 土器胎土中には石英・長石・砂粒等が含まれる。263は縦位に細い沈線を施した後、横位に2条太い沈線を施している。太い沈線の間はナデ調整が施されている。この資料には径5mm程の石英・長石が多く含まれている。264は縄文を沈線で区画し、区画外の縄文を磨り消している。焼成不良のためか器面の遺存状態は不良である。

第7群土器 (266~268・272・273)

時期等が判然としない土器を一括した。全部で5点出土している。

第1類 (266~268) 土器胎土中に石英・長石・砂粒等が含まれている。焼成は良好である。266~268は口縁部である。3点とも内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く仕上げている。口唇部にはわずかに刻目が観察される。器面には半截竹管状の施文具による並行沈線が一面に観察される。内面は横位のミガキ調整が施されている。267・268はその文様と胎土等から同一個体と判断される。

第2類 (272・273) 土器胎土中に石英・長石・砂粒を含む。第1類と比較して薄手に仕上げられている。272と273は器面に刺突文が施されている。272の器形は残存部中位付近からやや外反気味に立ち上がる。中位付近には隆帯を持つ。残存部下位に1条、隆帯付近に2条、上位付近1条ほど刺突文を横位に連続して施している。その横位の刺突文の間には、刺突文を鋸歯条に施している。この刺突文はその痕跡から薄い板状の施文具を使用したものと考えられる。

土製品 (269)

中峯遺跡からは土製品は1点出土している。269は土製円盤である。土器片を再加工したものである。土器胎土中に金雲母・砂粒等を含む。最大径5.2cm、器厚8mmをはかる。土器自体の焼成は良好で、仕上がりも堅緻である。この遺物の周縁部には加工時の磨り跡が観察される。

第2表 土器観察表(1)

図版番号	登録番号	写真図版番号	部位	器厚	色調	胎土	焼成	備考
1	P-227	13	肩部	8.5	橙色	長石・石英・金雲母	良好	
2	P-181	13	肩部	6.5	鈍い赤褐色	長石・石英	良好	
3	P-055	13	肩部	12	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
4	P-166	13	肩部	8	暗褐色	石英・金雲母・黒雲母	良好	
5	P-303	13	肩部	13.5	褐色	長石・石英	良好	
6	P-139	13	肩部	9	明赤褐色	金雲母・長石・石英	良好	
7	P-325	13	口縁部	17.5	淡褐色	石英	良好	波状口縁
8	P-164-6	15	口縁部	9	明褐色	長石・石英・金雲母	良好	
9	P-164-2	15	肩部	12	明赤褐色	長石・石英・金雲母	良好	
10	P-164-3	15	肩部	10.6	明赤褐色	長石・石英・金雲母	良好	
11	P-164-1	15	肩部	11.2	明赤褐色	長石・石英・金雲母	良好	
12	P-004	15	肩部	12	黒褐色	長石・石英・金雲母	良好	
13	P-051-10	15	肩部	10	黒褐色	長石・石英	良好	S F4から出土
14	P-051-7	15	肩部	10.8	暗褐色	長石・石英	良好	
15	P-051-2, 3	15	肩部	12	褐色	長石・石英・金雲母	良好	
16	P-051-8	15	肩部	10	褐色	長石・石英	良好	
17	P-051-4	15	口縁部	10	黒褐色	長石・石英・金雲母	良好	波状口縁
18	P-015	15	口縁部	12.5	黒褐色	石英・金雲母	良好	波状口縁・SB2から出土
19	P-051-9	肩部	11.5	褐色	長石・石英	良好		
20	P-051-6	15	肩部	11.5	褐色	長石・石英・金雲母	良好	
21	P-048	15	口縁部	8	赤褐色	金雲母	良好	
22	P-108	15	肩部	9.5	暗褐色	長石・金雲母	良好	
23	P-322	15	口縁部	12	褐色	長石・石英	良好	波状口縁
24	P-119	17	口縁部	6.5	黑色	石英・金雲母・黒雲母	良好	
25	P-168	17	口縁部	6.5	暗オリーブ褐色	石英・金雲母	良好	波状口縁・SB2から出土
26	P-131	17	口縁部	9	暗褐色	長石・石英・金雲母	良好	
27	P-053-5	16	口縁部	9.5	鈍V・青褐色	長石・石英	良好	
28	P-114	16	口縁部	9	明褐色	長石・金雲母	良好	S B2から出土
29	P-292	16	口縁部	9.5	鈍V・青褐色	長石・石英	良好	
30	P-044	15	口縁部	12	明褐色	長石・石英	良好	
31	P-149	16	口縁部	10	褐色	長石・石英	良好	
32	P-130-1, 2	16	口縁部	11	褐色	長石・石英	良好	
33	P-133	17	口縁部	9	鈍V・青褐色	長石・石英	良好	
34	P-319-8	14	口縁部	17	明褐色	長石・金雲母	良好	
35	P-319-1	14	肩部	13	明青褐色	長石・石英・金雲母	良好	
36	P-319-2	14	肩部	13	褐色	長石・石英・金雲母・黒雲母	良好	
37	P-319-4	14	肩部	13	オリーブ褐色	長石・石英・金雲母	良好	
38	P-319-3, 7	14	肩部	12	暗褐色	長石・石英・金雲母	良好	
39	P-319-6	14	肩部	12	明青褐色	長石・石英・金雲母	良好	
40	P-319-5	14	肩部	11.5	褐色	長石・石英・金雲母	良好	
41	P-248	18	肩部	8.8	鈍V・青褐色	長石	良好	
42	P-137	14	肩部	9.5	鈍V・青色	長石・石英・金雲母	良好	
43	P-250	18	肩部	12.5	鈍V・黄褐色	石英・金雲母	良好	

第2表 土器観察表(2)

図版番号	登録番号	写真図版番号	部位	厚さ	色調	胎土	焼成	備考
44	P-130-3	18	肩部	10	暗褐色	長石・石英	良好	
45	P-286	18	肩部	12.5	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
46	P-053-3		肩部	10	灰黄褐色	長石・石英	良好	
47	P-262	18	肩部	11	鈍い黄褐色	長石	良好	
48	P-053-4		肩部	9	暗灰黄色	長石・石英	良好	
49	P-302		肩部	12.5	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
50	P-235		肩部	8.9	鈍い橙色	長石・石英・金雲母	良好	
51	P-053-2		肩部	10.5	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
52	P-291	18	肩部	11	明赤褐色	長石・石英	良好	
53	P-268	18	肩部	13	褐色	長石・石英・金雲母	良好	
54	P-249	18	肩部	11	褐色	長石・石英	良好	
55	P-065	17	肩部	12	褐色	長石・石英	良好	
56	P-064	17	肩部	9	鈍い黄褐色	長石・石英・金雲母	良好	
57	P-063	17	肩部	11	明黄褐色	長石・石英・金雲母	良好	
58	P-195-3	17	肩部	—	橙色	長石・金雲母	良好	SB3から出土
59	P-195-1	17	肩部	12	橙色	長石・金雲母	良好	SB3から出土
60	P-180		肩部	8.5	橙色	長石・石英	良好	
61	P-324	19	肩部	11	明赤褐色	長石・石英・黑雲母	良好	SB1から出土
62	P-115-1	17	肩部	10	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
63	P-053-1	18	肩部	11	暗灰黄色	長石・石英	良好	
64	P-272	18	肩部	11	黄褐色	長石・石英	良好	
65	P-290	18	肩部	12	褐色	長石・石英・金雲母	良好	
66	P-240		肩部	10	橙色	石英・黑雲母	良好	
67	P-278	18	肩部	11.5	橙色	長石・石英	良好	
68	P-275	18	肩部	11	明黄褐色	長石・石英	良好	
69	P-147	18	肩部	9	暗褐色	長石・金雲母	良好	
70	P-230	18	肩部	8.2	鈍い黄橙色	長石・石英・金雲母	良好	
71	P-252	18	肩部	11	灰黄褐色	長石	良好	
72	P-172	18	肩部	10	暗褐色	長石・石英・黑雲母	良好	
73	P-260	18	肩部	9.5	褐色	長石・石英	良好	
74	P-261	21	口縁部	6.5	暗褐色	長石・黑雲母	良好	
75	P-006	21	口縁部	6.5	暗赤褐色	石英・金雲母	良好	SP1から出土
76	P-266	21	口縁部	7	暗灰黄色	長石	良好	
77	P-264	21	口縁部	6	鈍い橙色	石英・雲母	良好	
78	P-103	21	口縁部	7	黑褐色	長石・石英	良好	
79	P-214	21	口縁部	8	黄灰色	長石・石英	良好	
80	P-184	21	口縁部	6.8	明黄褐色	長石・石英	良好	
81	P-154	20	口縁部	8.5	橙色	長石・石英	良好	
82	P-117	21	口縁部	7	黑褐色	長石・石英	良好	
83	P-182	21	口縁部	9	鈍い橙色	長石・石英	良好	
84	P-087	20	口縁部	6.5	黑褐色	長石・石英	良好	
85	P-105	21	口縁部	6.5	暗褐色	長石・石英	良好	
86	P-156	20	口縁部	8	黑褐色	長石・石英	良好	

第2表 土器觀察表(3)

図版番号	登録番号	寧真國番号	部位	器厚	色調	胎土	焼成	備考
87	P-216	20	口縁部	6	純い山黃褐色	長石・石英	良好	
88	P-194	20	口縁部	8.9	灰褐色	長石・石英	良好	
89	P-151-2	20	口縁部	7.5	褐色	長石・石英	良好	S B3から出土
90	P-269	20	口縁部	6	黒褐色	長石・石英	良好	
91	P-157	20	口縁部	7	褐灰色	長石・石英	良好	
92	P-170-2	20	口縁部	7.5	暗褐色	長石・石英	良好	S B3から出土
93	P-128	20	口縁部	9.5	黒褐色	長石・石英	良好	
94	P-200-3、4	20	口縁部	7	黒褐色	石英・金雲母	良好	
95	P-167	20	口縁部	8.5	黒褐色	長石・石英	良好	
96	P-219	21	口縁部	7.5	純い黄褐色	石英	良好	
97	P-208	20	口縁部	7.5	黒褐色	長石・石英	良好	
98	P-095	20	口縁部	6.5	灰褐色	長石	良好	
99	P-100-3	20	口縁部	7	黒褐色	長石	良好	
100	P-090	20	口縁部	7	黒褐色	長石・石英	良好	
101	P-188	20	口縁部	6	灰黃褐色	長石・石英	良好	
102	P-136	20	口縁部	9	灰黃褐色	長石・石英	良好	
103	P-101	20	口縁部	7.5	褐色	長石・石英	良好	
104	P-186	20	口縁部	8	灰黃褐色	長石・石英	良好	
105	P-098	20	口縁部	10.5	橙色	長石・石英	良好	
106	P-320	20	口縁部	6	黒褐色	長石・石英	良好	
107	P-110	20	口縁部	7	褐色	長石・石英	良好	
108	P-034	21	口縁部	4.5	浅黄色	長石・石英・金雲母	良好	
109	P-159		胴部	5	純い黄褐色	長石・石英	良好	
110	P-323	21	胴部	5.5	黒褐色	石英	良好	
111	P-035	21	胴部	4.5	灰黄色	長石・石英・金雲母・黑雲母	良好	
112	P-036	21	胴部	4.5	浅黄色	長石・石英・金雲母	良好	
113	P-037	21	胴部	4	灰色	長石・石英・金雲母	良好	
114	P-239		胴部	8	暗褐色	長石	良好	
115	P-138	22	胴部	6	純い黄褐色	長石・石英	良好	
116	P-256		胴部	8	灰黃褐色	長石・石英	良好	
117	P-074	22	胴部	7.5	橙色	石英・金雲母	良好	S B3から出土
118	P-253	22	胴部	7.5	黒褐色	長石・石英・金雲母	良好	
119	P-151-1		胴部	8.5	褐色	長石・石英	良好	S B3から出土
120	P-127		胴部	9	純い黄褐色	長石・石英	良好	
121	P-218		胴部	7	黒褐色	長石・石英	良好	
122	P-237	22	胴部	9.5	黒褐色	長石	良好	
123	P-220	22	胴部	7.5	黒褐色	長石・石英	良好	
124	P-236	22	胴部	8.5	黒褐色	長石・石英	良好	S B3から出土
125	P-99-3	22	胴部	7.5	橙色	長石	良好	
125	P-176	22	胴部	7.5	黒褐色	長石・石英	良好	S B2から出土
127	P-086	22	胴部	8	純い黄褐色	長石・石英・金雲母	良好	
128	P-148	22	胴部	7	純い黄褐色	長石・石英	良好	
129	P-221	21	胴部	5	黑色	長石・金雲母	良好	

第2表 土器觀察表(4)

図版番号	登録番号	写真図版番号	部位	器厚	色調	胎土	焼成	備考
130	P-069	21	肩部	5.5	黒褐色	長石・石英	良好	
131	P-132	21	肩部	5	鈍い褐色	長石・石英	良好	
132	P-187	21	肩部	6	黒褐色	長石・石英	良好	
133	P-212	21	肩部	8	黒褐色	長石	良好	
134	P-096		肩部	7.5	黒褐色	長石	良好	
135	P-217	21	肩部	6	鈍い褐色	石英	良好	
136	P-211	21	肩部	5.5	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
137	P-077	21	肩部	7.5	黄褐色	石英・金雲母	良好	
138	P-174	22	肩部	8	黒褐色	長石・石英	良好	
139	P-198	22	肩部	8.5	灰灰色	石英・金雲母	良好	
140	P-163	22	肩部	8	橙色	長石・石英	良好	
141	P-089	22	肩部	6.5	鈍い褐色	長石・石英	良好	
142	P-008-1	21	肩部	6.5	黒色	長石・石英	良好	S P47から出土
143	P-165	22	肩部	8	黒褐色	長石・石英・黒雲母	良好	
144	P-267		肩部	5.5	黒褐色	長石・石英	良好	
145	P-126	22	肩部	10	黒褐色	長石・石英	良好	
146	P-213	22	肩部	7	黒褐色	長石・石英	良好	
147	P-097	22	肩部	7.5	黒褐色	長石・石英	良好	S B2から出土
148	P-299		肩部	7.5	灰黄褐色	長石・石英	良好	
149	P-104	22	肩部	8	鈍い褐色	長石・石英	良好	S B2から出土
150	P-229	22	肩部	6	褐色	石英	良好	
151	P-055	22	肩部	6.5	黒褐色	石英・金雲母・黒雲母	良好	S F7から出土
152	P-158-2	22	肩部	7	橙色	長石・石英	良好	
153	P-102	22	肩部	6.5	黄褐色	長石・石英	良好	
154	P-173	23	口縁部	8	褐色	長石・金雲母	良好	
155	P-031	23	口縁部	10	明赤褐色	長石・金雲母	良好	
156	P-076	23	口縁部	9.5	褐色	長石・金雲母	良好	
157	P-027	23	口縁部	6	鈍い黄褐色	長石・金雲母・黒雲母	良好	
158	P-025	23	口縁部	10.2	鈍い黄褐色	石英・金雲母	良好	
159	P-001	口縁部	10	暗赤褐色	長石・石英・金雲母・黒雲母	良好		
160	P-067	23	口縁部	9.5	黒褐色	長石・金雲母・黒雲母	良好	
161	P-020	23	肩部	9	明黄褐色	長石	良好	
162	P-061	23	肩部	9.5	橙色	石英・黒雲母	良好	
163	P-032	23	肩部	10.5	鈍い黄褐色	長石・金雲母	良好	S B3から出土
164	P-024	23	肩部	9	褐色	長石・石英・金雲母・黒雲母	良好	
165	P-029	23	肩部	8	明赤褐色	長石	良好	
166	P-047	23	肩部	8.5	黒褐色	長石・黒雲母	良好	
167	P-046	23	肩部	9.5	暗褐色	金雲母	良好	
168	P-085	23	肩部	8.5	橙色	長石・金雲母	良好	
169	P-082	23	肩部	8.5	褐色	黒雲母	良好	
170	P-049	23	肩部	8	明赤褐色	長石・黒雲母	良好	
171	P-057	23	肩部	10.5	黒褐色	長石・石英	良好	
172	P-057-1	23	肩部	10	褐色	長石・石英	良好	

第2表 土器觀察表(5)

図版番号	登録番号	写真図版番号	部位	基厚	色調	胎土	焼成	備考
173	P-081	25	肩部	8.5	黒褐色	長石・黒雲母	良好	
174	P-080	25	肩部	9.5	黒褐色	長石・石英・角閃石	良好	
175	P-041	25	肩部	8	暗褐色	長石・金雲母	良好	
176	P-017	25	肩部	16	橙色	長石・黒雲母	良好	
177	P-079	25	肩部	9.5	鈍い黄褐色	石英粒子	良好	
178	P-040	25	肩部	7.5	暗赤褐色	長石・金雲母	良好	
179	P-062	肩部		9.5	暗褐色	長石・金雲母	良好	
180	P-057-3	25	肩部	10.5	鈍い褐色	長石・石英	良好	
181	P-021	25	肩部	10.1	鈍い黄褐色	長石・金雲母・黒雲母	良好	
182	P-050	25	肩部	9.5	鈍い黄褐色	石英・金雲母	良好	
183	P-022	25	肩部	14	褐色	長石・石英・黒雲母	良好	
184	P-321	25	肩部	8.5	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
185	P-023	25	肩部	10	鈍い黄褐色	長石・石英・金雲母・黒雲母	良好	
186	P-223	口縁部		7	鈍い褐色	石英	良好	
187	P-305	26	口縁部	8	暗褐色	石英・金雲母	良好	
188	P-160-4	27	口縁部	6	鈍い黄褐色	長石・石英・金雲母	良好	
189	P-170-2	26	口縁部	7	黒褐色	石英・金雲母	良好	
190	P-145	27	口縁部	13.5	明赤褐色	長石・石英・金雲母	良好	
191	P-290	27	口縁部	8.5	橙色	石英・金雲母	良好	
192	P-222	27	口縁部	7	暗褐色	石英・金雲母	良好	
193	P-233	27	口縁部	8	鈍い褐色	長石・金雲母	良好	
194	P-288	27	口縁部	8.5	明赤褐色	長石・石英・金雲母	良好	
195	P-170-3	26	口縁部	8.5	黒褐色	石英・金雲母	良好	
196	P-247	27	口縁部	8.5	橙色	長石・石英	良好	
197	P-175	26	口縁部	8	黒褐色	石英・金雲母	良好	S B2から出土
198	P-277	26	口縁部	10	明赤褐色	長石	良好	小波状口縁
199	P-191	26	口縁部	8.5	橙色	石英・黒雲母	良好	波状口縁
200	P-201	26	口縁部	8.5	橙色	石英・金雲母・黒雲母	良好	小波状口縁
201	P-160-1	26	口縁部	8.5	黒褐色	長石・石英・金雲母	良好	波状口縁
202	P-140	26	口縁部	9.5	明赤褐色	石英・金雲母・黒雲母	良好	波状口縁
203	P-179	26	口縁部	8	黒褐色	石英	良好	波状口縁
204	P-177-2	26	口縁部	8	暗褐色	長石・金雲母	良好	波状口縁・S B2から出土
205	P-160-6	26	口縁部	8.5	明赤褐色	石英・金雲母	良好	波状口縁
206	P-121	26	口縁部	8	橙色	石英・金雲母	良好	波状口縁
207	P-134	肩部		9	明褐色	石英・金雲母・黒雲母	良好	
208	P-297	30	肩部	8	鈍い赤褐色	石英・金雲母	良好	
209	P-296	30	肩部	7.5	黒褐色	石英・金雲母	良好	S B3から出土
210	P-289	30	肩部	8.2	明赤褐色	石英・金雲母	良好	
211	P-169	30	肩部	8.5	暗褐色	金雲母	良好	
212	P-293	30	肩部	8.5	暗褐色	石英・金雲母	良好	
213	P-178	30	肩部	8	暗褐色	石英・金雲母	良好	
214	P-160-3	30	肩部	8	明褐色	石英・金雲母	良好	
215	P-285	30	肩部	9	灰青褐色	長石・石英・金雲母	良好	

第2表 土器觀察表(6)

図版番号	登録番号	写真図版番号	部位	器厚	色調	胎土	焼成	備考
216	P-295		肩部	9	鈍い褐色	長石・石英・金雲母	良好	
217	P-152	28	肩部	9.5	明赤褐色	長石・金雲母	良好	
218	P-281	30	肩部	8	明赤褐色	長石・金雲母	良好	
219	P-109	30	肩部	8.5	赤褐色	長石・金雲母	良好	
220	P-155-7	30	肩部	8	橙色	長石・金雲母	良好	
221	P-255	30	肩部	10.5	明褐色	長石・石英・金雲母	良好	
222	P-146	30	肩部	10	明赤褐色	長石・金雲母・黑雲母	良好	
223	P-155-6	30	肩部	10.5	鈍い褐色	石英・金雲母	良好	
224	P-196-1		肩部	7	黑色	石英・金雲母	良好	
225	P-155-4		肩部	7	鈍い赤褐色	石英・金雲母	良好	
226	P-155-2		肩部	9.5	明赤褐色	石英・金雲母・黑雲母	良好	
227	P-116	29	肩部	8.5	赤褐色	黑雲母	良好	
228	P-155-1		肩部	8	橙色	石英・金雲母	良好	
229	P-258	29	肩部	9	暗褐色	石英・金雲母	良好	
230	P-007	28	肩部	9.5	黒褐色	長石・金雲母	良好	S B1から出土
231	P-155-3		肩部	10	橙色	石英・金雲母	良好	
232	P-155-5	29	肩部	9	明赤褐色	石英・金雲母	良好	
233	P-129		肩部	7.5	黒褐色	石英・金雲母	良好	
234	P-106	29	肩部	7.5	鈍い・程色	金雲母	良好	
235	P-245	29	肩部	7.5	橙色	長石・金雲母・黑雲母	良好	
236	P-118	29	肩部	6.5	褐色	長石・黑雲母	良好	
237	P-002	28	肩部	10.5	明黄褐色	石英・金雲母	良好	
238	P-113	29	肩部	9	暗褐色	長石・金雲母	良好	
239	P-143	29	肩部	9	鈍い褐色	石英・金雲母	良好	
240	P-150	29	肩部	7	褐褐色	長石・黑雲母	良好	
241	P-183	29	肩部	8.5	暗褐色	石英・金雲母	良好	
242	P-177-1	28	肩部	8.5	黒褐色	長石・金雲母	良好	S B2から出土
243	P-192	28	肩部	10.5	明赤褐色	石英・金雲母	良好	
244	P-210-1		肩部	10	橙色	石英・金雲母	良好	
245	P-282	28	肩部	8.5	鈍い黄褐色	石英・金雲母・黑雲母	良好	
246	P-210-5	28	肩部	10.5	橙色	長石・金雲母	良好	
247	P-210	28	肩部	11.5	明褐色	長石・金雲母	良好	
248	P-202	28	肩部	8.5	明黄褐色	長石・石英・金雲母・黑雲母	良好	
249	P-284	28	肩部	9	明赤褐色	石英・金雲母	良好	
250	P-210-3	28	肩部	11.5	明赤褐色	長石・金雲母	良好	
251	P-144	28	肩部	8.5	褐色	長石・石英・金雲母	良好	
252	P-142	29	肩部	9.5	明褐色	石英・金雲母	良好	
253	P-120	28	肩部	9	褐色	石英・金雲母・黑雲母	良好	S B2から出土
254	P-141	28	肩部	9.5	明赤褐色	石英・金雲母	良好	
255	P-030	31	肩部	6.5	鈍い黄褐色	長石・石英・金雲母	良好	
256	P-228		肩部	5	鈍い黄褐色	長石・金雲母	良好	
257	P-273	31	肩部	5.5	橙色	石英・金雲母	良好	
258	P-083	31	肩部	6	鈍い黄色	長石・金雲母	良好	

第2表 土器觀察表(7)

図版番号	登録番号	写真図版番号	部位	基厚	色調	胎土	焼成	備考
259	P-073	31	腹部	4.8	黄褐色	長石・石英	良好	
260	P-033	31	肩部	6	明黄褐色	長石・石英・黒雲母	良好	
261	P-203	31	肩部	5	橙色	石英・金雲母	良好	
262	P-028	31	肩部	5.5	橙色	石英・黒雲母	良好	
263	P-072	31	肩部	10.5	鈍い黄褐色	石英	良好	
264	P-078	31	肩部	10.5	鈍い黄褐色	石英	やや不良	
265	P-071	31	肩部	11	明赤褐色	石英・黒雲母	良好	
266	P-043	口縁部		8.5	褐色	長石・金雲母・黒雲母	良好	
267	P-018	口縁部		10	褐色	石英・金雲母・黒雲母	良好	
268	P-019	口縁部		10.5	橙色	長石・石英	良好	
270	P-300	底部		14	鈍い黄褐色	長石	良好	
271	P-315	底部		19	橙色	長石・石英・金雲母・黒雲母	良好	
272	P-135、190	31	肩部	8	墨褐色	長石・石英	良好	
273	P-135-3	31	肩部	7.5	墨褐色	長石・石英	良好	
274	P-088	13	底部	10.5	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
275	P-011	11	口縁部～底部	9.5	褐色	石英・金雲母・黒雲母	良好	
276	P-013	10	口縁部～肩部	11	墨褐色	長石・石英・金雲母・黒雲母	良好	
277	P-318	24	口縁部～肩部	10	明褐色	長石・石英・黒雲母	良好	
278	P-016	23	肩部	13	明赤褐色	長石・石英・黒雲母	良好	
279	P-091	12	口縁部～肩部	10.5	暗褐色	石英・黒雲母	良好	
280	P-014	13	はぼ穴形	11	黒褐色	長石・金雲母	良好	
281	P-010	10	口縁部～肩部	11.5	灰黃色	長石・黒雲母	良好	
282	P-084	13	肩部～底部	9	鈍い褐色	石英・金雲母・黒雲母	良好	
283	P-012	13	底部	6.5	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
284	P-317	12	口縁部～肩部	6	暗灰黃色	長石・金雲母	良好	
P-319-9		14	口縁部	10.5	橙色	石英・墨雲母	良好	
P-319-10		14	口縁部	20.5	明黃褐色	石英・黒雲母	良好	
P-301		17	側部	11	鈍い褐色	長石・石英	良好	
P-270		21	口縁部	5	墨褐色	長石・石英	良好	
P-265		21	口縁部	8.5	褐色	長石	良好	
P-242		21	口縁部	7	墨褐色	長石・石英・黒雲母	良好	
P-254		21	口縁部	8.5	鈍い黄褐色	長石	良好	
P-263		21	口縁部	7.5	鈍い褐色	石英	良好	
P-185		21	口縁部	7	鈍い黄褐色	長石・石英	良好	
P-039		25	肩部	5.5	暗褐色	石英・金雲母	良好	
P-042		25	肩部	6	鈍い黄褐色	長石・石英・金雲母	良好	
P-210-4		30	肩部	10.5	明赤褐色	長石・金雲母	良好	

第2節 石 器

中峯遺跡からは総計248点の石器が出土している。その大半が包含層からの出土で、遺構からの出土は僅かである。よって本節では各石器を出土遺構ごとではなく、種類別に分類したうえで、個々の計測値・石材・観察所見等を述べてみたい。報告書掲載分の石器については第3表に計測値を掲載した。石材鑑定については森嶋富士夫氏に、また図示した黒曜石製の石器については、国立沼津工業高等専門学校の望月明彦氏に蛍光X線分析による産地同定を依頼した。その内容については第V章で触れる。

打製石斧（1～4）

本遺跡からは4点出土している。その内短冊型に分類されるのが2点、分銅形石斧に分類されるのが1点、破片資料のため型式が判然としないのが1点である。1は95年11月の試掘調査時に出土した資料である。平面形態は両側縁部が内湾気味で、基部中位付近で最大幅を有する。両側縁からは剥離調整が施されている。刃縁付近には長期使用による摩耗が観察される。右側縁部中位よりやや基端部寄りの位置に細かな敲打調整が施されている。石材は砂質頁岩を使用している。2はB-3とB-4グリットの境界付近、基本土層10層直上から出土している。平面形態は1と同様側縁部が僅かであるが内湾気味である。基部中位付近で最大幅を有する。両側縁部は剥離調整が施され、基端部には敲打による調整が観察される。器厚は1と比較して厚めで、最大幅は基部中位からやや刃部寄り付近ではある。石材は石英安山岩を使用している。1と2は短冊形石斧に分類される。両資料とも装着痕は観察されない。

3は分銅形石斧である。C-3グリットの調査区北壁付近から出土した。層位は不明である。片方の正面には礫面が、もう片側の正面には主要剥離面が明瞭に観察される。基部中位には両側縁より敲打を加えて抉りを作っている。抉り付近に柄が装着されていたものと考えられるが、装着痕は観察されない。刃部には使用痕は観察されない。石材は角閃石ヒン岩を使用している。

4は打製石斧の破片である。その形状から1・2と同様、短冊形石斧の基部中位付近と判断される。側縁には細部調整がはいっている。石英安山岩を使用している。

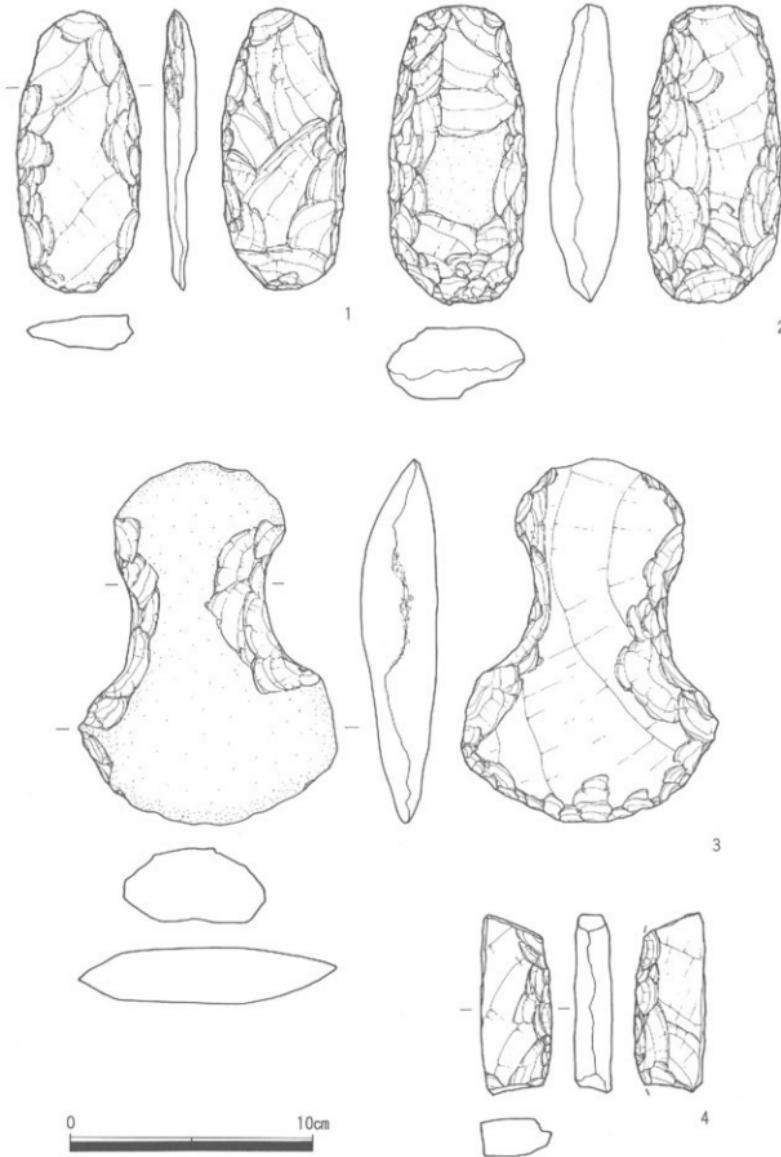
打製石斧の所属時期については、遺構外からの出土であり判然としない。しかし他地域の石斧の趨勢から考えても諸磯期以降であろう。分銅形石斧については初現期が加曾利E II期であり、第1節でも触れているように中峯遺跡においても中期の土器が僅かであるが出土している。分銅形石斧の所属時期は中期と推定される。

打製石鎌（5～10）

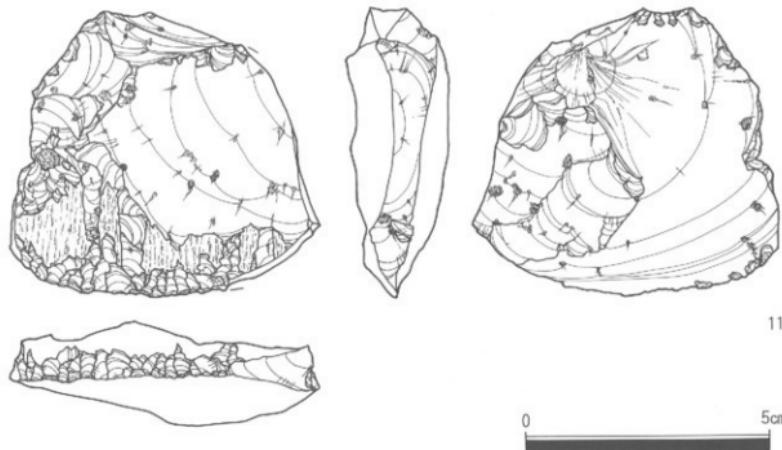
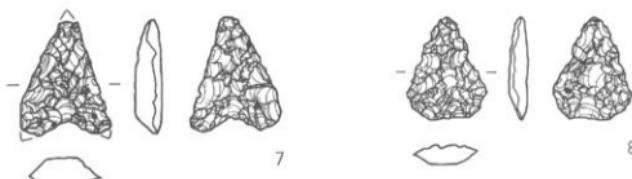
本遺跡からは打製石鎌は未製品も含めて6点出土している。全て黒曜石製である。5・6・7は凹基無茎鎌である。5は鎌身幅が鎌身長が短く、両側縁は内湾している。6は5と比べ基部の抉りは浅く、両側縁は外湾している。7は先端部と逆刺の一部が欠損している。5・6に比べ鎌身厚は厚い。片方の側縁は基部中位付近で内湾するが、もう片方の側縁は直線的に仕上げられている。8は両側縁の細部調整も粗く、基部には抉りを入れていないことから、未製品と判断される。SB3からの出土である。9・10は打製石鎌の残欠である。9はSB3からの出土である。10は他の石鎌と比べて逆刺の長さが長い。

打製刃器（11）

打製刃器は11の1点だけである。刃縁は細部調整により作り出されている。片側の正面には主要剥離面が観察される。側縁・刃部の一部が欠損している。石材は黒曜石を使用している。本遺跡において石鎌以外の石器で唯一の黒曜石製の利器である。



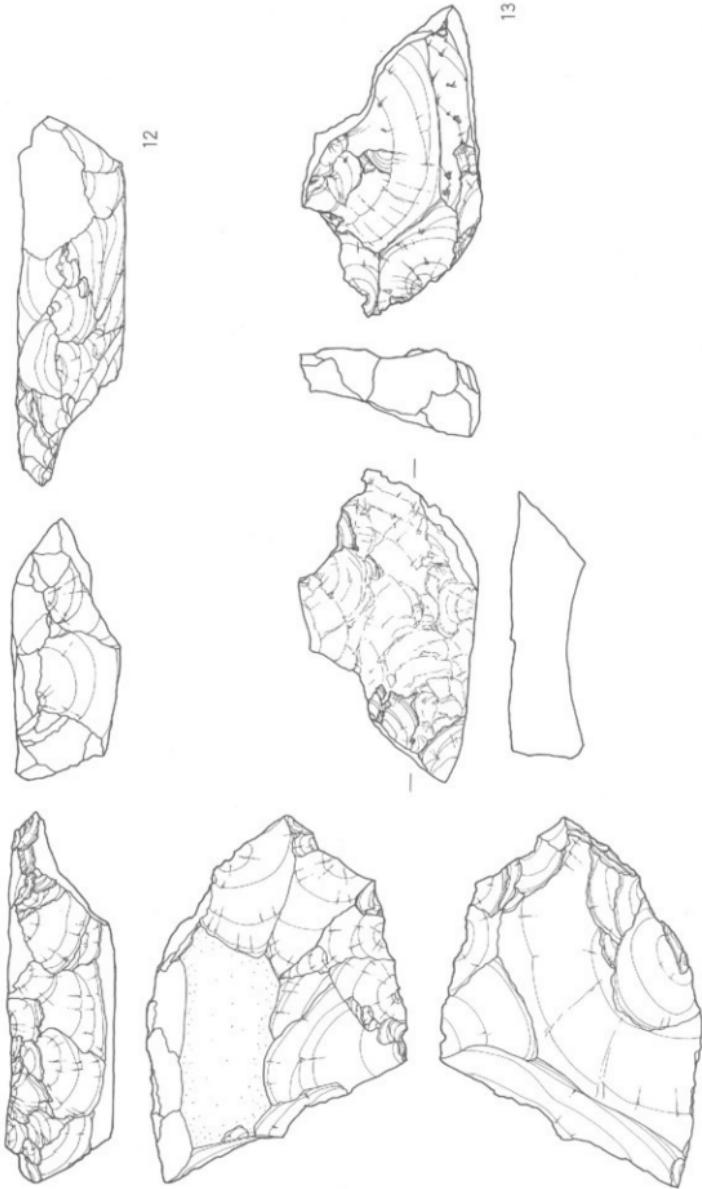
第35図 石器実測図 1

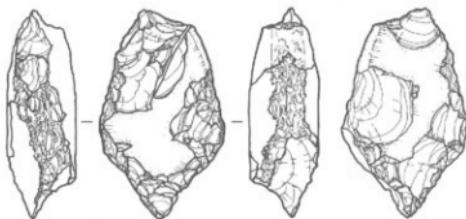


第36図 石器実測図 2

10cm
0

第37圖 石器實測圖 3

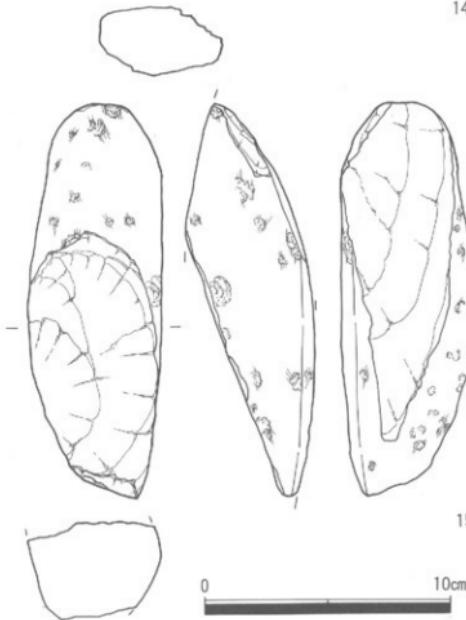




14

石核・剥片 (12・13)

本遺跡から石核・剥片は合計210点出土している。本報告で図示できたのは、石核・剥片各1点ずつである。石核は12の1点のみの出土である。B—3グリット北西隅付近からの出土である。石材は流紋岩である。13は剥片である。SB 2からの出土である。石材は黒耀石である。



15

磨製石斧 (14・15)

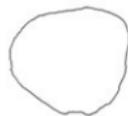
本遺跡からは3点出土している。そのうち1点は細片で図示が困難であるため、14・15の2点を図示した。14は各面には研磨面が残置しているが、かなり調整が加えられている。特に下端部は細部調整が加えられている。使用

第38図 石器実測図 4

による折損後、再加工中に何らかの原因で廃棄されたものと考えられる。石材は珪質凝灰岩を使用している。15は刃部と基端部を欠損した資料である。器面には丁寧な研磨が加えられ、さらに研磨面下には敲打痕が明瞭に観察される。残存状況から使用中に折損したものと考えられる。石材は緑色片岩を使用している。14は横断面形が隅丸長方形を呈し、また両側縁部が基端部から刃部方向へ広がるのが観察されるので定角式磨製石斧として分類される。また15は乳棒状石斧と考えられる。今回図示できなかった磨製石斧の細片は、玄武岩を石材として使用している。

敲石・磨石 (16~30)

本遺跡からは15点出土している。敲石・磨石共に機能が異なる石器であるが、両方の機能を有していた資料が多く、本報告では一括して記述してみたい。



16



17



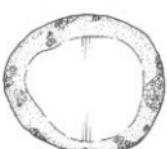
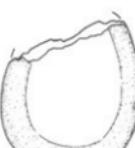
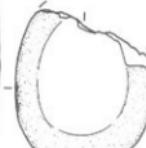
18



19

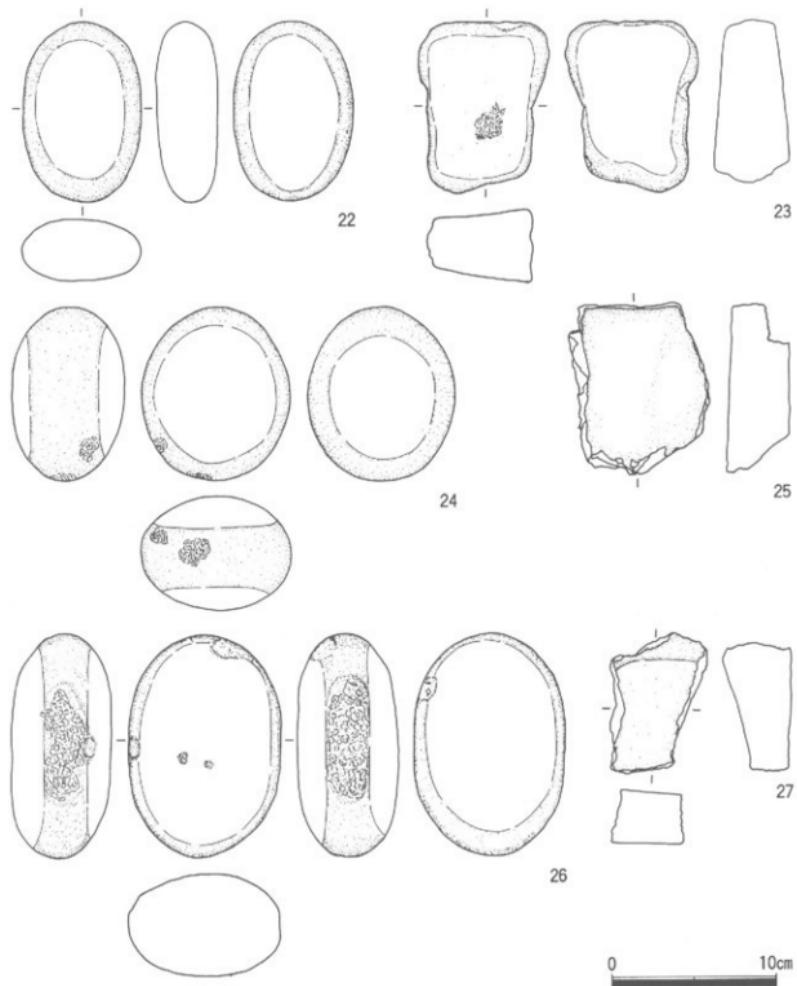


21



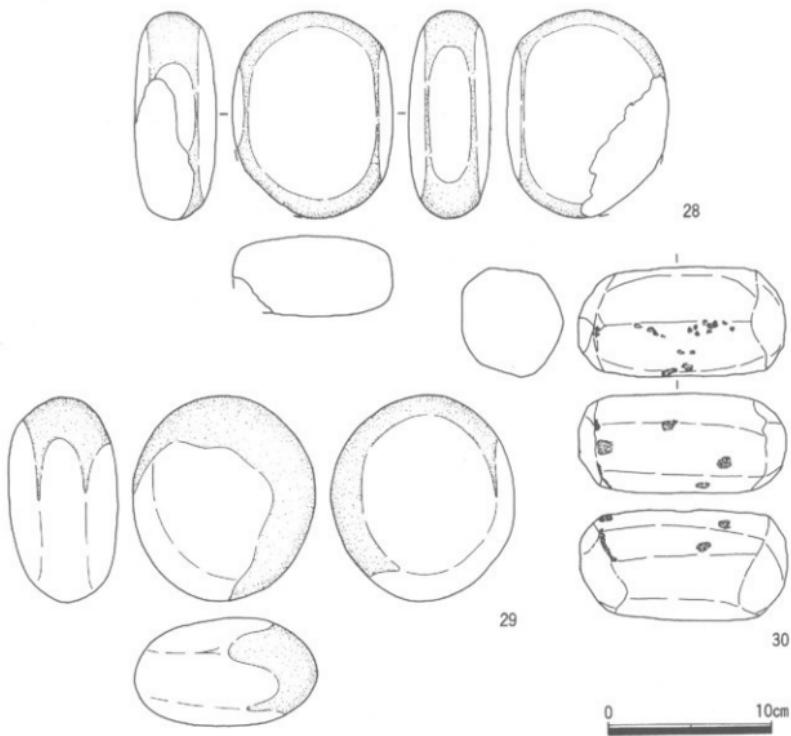
第39図 石器実測図 5

0 10cm



第40図 石器実測図 6

敲打・磨りの両方の機能を有していたものと観察されたのが、16・17・18・20・21・24・26の以上7点である。敲打のみの機能を有していたのが19の1点のみである。磨りの機能のみを有していたのが、22・23・25・27・28・29・30の7点である。23・25・27の3点を除けば、全て平面形が梢円形を呈したいわゆる円碟である。遺構から出土しているのは25の1点のみで、残りの石器は遺構外からの出土である。調査区西半部からの出土が多い。完形資料は16・19・20・22・23・24・26・29・30の9点である。重量値では～500gが3点、～1000gが4点、～1500gが2点を数える。ただし500g付近をはかるのが4点



第41図 石器実測図 7

で、一部欠損資料の21についても約508gをはかる。16・19については正面中央部に敲打痕が集中しているのが観察され、石鎚製作時に使用された可能性も否定できない。敲石・磨石が使用している石材は全て安山岩系の石材である。

石皿・台石 (31~62)

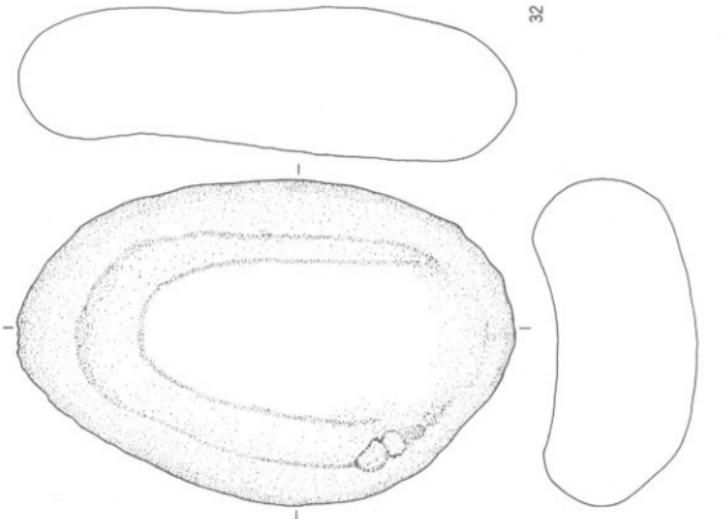
本遺跡からは石皿4点、台石5点出土している。機能としては両者とも食物等を磨り潰すための台であり本報告では一括した。図示できたものは石皿4点、台石1点である。

31はB-3グリット北西隅付近から凹面を上にした状態で、32はA-2グリットS.F.8から出土している。両者とも完形品である。32は土坑内に立った状態で出土しており、他に磨石25が伴出している。31は玄武岩質溶岩、32は輝石安山岩を石材として利用している。33も完形品である。両正面が磨面として利用されている。石材は流紋岩質軽石を使用している。34は石皿の破片である。その残存状況から全体の3分の2が欠損したものと考えられる。流紋岩質軽石を石材として使用している33の石皿は、その石材からして他の石皿と明らかに機能的な差異があったと考えられる。台石である35はA-2グリットS.B.3からの出土である。両正面が磨面として利用されている。石材は輝石安山岩を使用している。

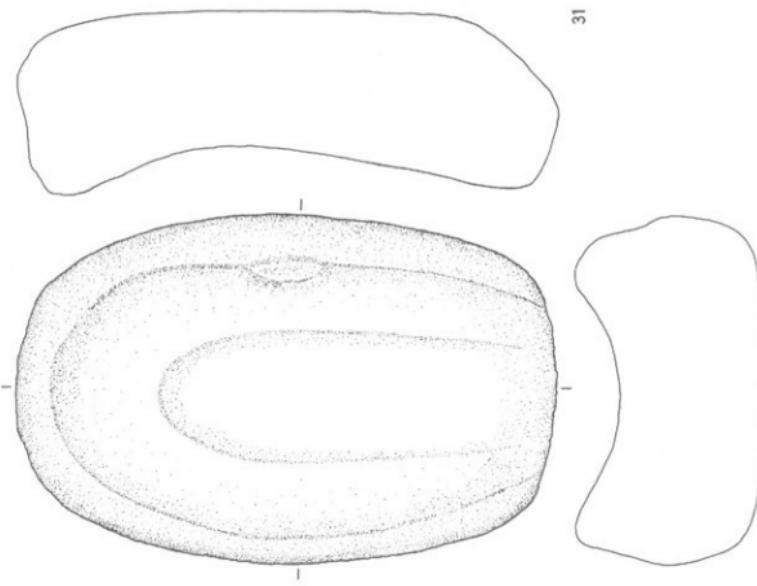
第42圖 石器實測圖 8

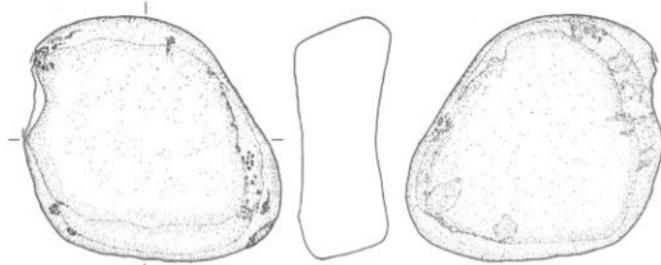
20cm

32

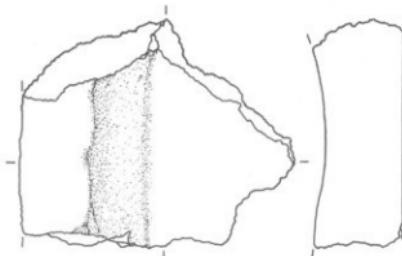


31





33



34

0 20cm



35

第43図 石器実測図 9

第3表 石器計測値表

番号	登録番号	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
1	S-33	打製石斧	11.6	5.1	1.3	88.25	砂質頁岩	短冊形
2	S-5	打製石斧	12.35	5.7	2.9	230.3	石英安山岩	短冊形
3	S-15-2	打製石斧	15.1	11.7	3.15	483	角閃石ヒン岩	分銅形
4	S-3-4	打製石斧	7.4	3	1.55	52.5	石英安山岩	短冊形?
5	S-6-1	打製石鎌	1.7	1.6	0.35	0.67	黒耀石	
6	S-10-14	打製石鎌	1.8	1.7	0.4	0.65	黒耀石	
7	S-22-1	打製石鎌	2.3	1.9	0.55	1.75	黒耀石	一部欠損
8	S-38	打製石鎌	2.1	1.65	0.4	1.19	黒耀石	未製品・S B3から出土
9	S-39	打製石鎌	1.9	1.35	0.45	0.8	黒耀石	残欠・S B3から出土
10	S-37	打製石鎌	1.7	1.4	0.4	0.53	黒耀石	残欠
11	S-26-1	打製刃器	5.85	6.3	2.1	61.78	黒耀石	一部欠損
12	S-8-7	石核	3.45	11.4	8.1	285.5	流紋岩	
13	S-32	剥片	5.55	9.7	2.7	108.79	黒耀石	S B2から出土
14	S-13-4	磨製石斧	8.6	5.1	2.8	155.8	珪質凝灰岩	
15	S-31-1	磨製石斧	16.1	5.4	5.2	508.4	緑色片岩	一部欠損
16	S-13-5	敲石兼磨石	11.45	7.3	7.3	702.22	安山岩質熔岩	
17	S-9-7	敲石兼磨石	7.55	7	4.9	382.2	玄武岩	一部欠損
18	S-16-1	敲石兼磨石	8.9	7.95	5	504.7	石英安山岩	一部欠損
19	S-17-5	敲石	9.7	8.05	4.8	452.68	石英安山岩	
20	S-12-19	敲石兼磨石	8.55	9.8	5	489.97	輝石安山岩	
21	S-12-18	敲石兼磨石	9.5	8.5	4.25	508.85	輝石安山岩	一部欠損
22	S-12-17	磨石	11	6.8	3.7	470.29	石英安山岩	
23	S-8-10	磨石	10.5	8	4.8	524.23	石英安山岩	
24	S-22-18	敲石兼磨石	11	9	7	947.58	石英安山岩	
25	S-34-2	磨石	9.35	8.55	3.9	449.41	輝石安山岩	一部欠損・S F8から出土
26	S-19-1	敲石兼磨石	13.6	9.3	6.1	1235.16	輝石安山岩	
27	S-9-12	磨石	8.6	6.85	4.2	246.24	輝石安山岩	一部欠損
28	S-7-2	磨石	12.7	9.8	5	991.28	輝石安山岩	一部欠損
29	S-11	磨石	12.55	11.2	6.7	1335.83	輝石安山岩	
30	S-16-2	磨石	6.7	12.6	6.1	824.1	輝石安山岩	
31	S-35	石皿	44.3	28.85	15.3	29500	玄武岩質熔岩	
32	S-34-1	石皿	40.9	26.9	14	18500	輝石安山岩	S F8から出土
33	S-15-3	石皿	20.25	21	10.2	3388.4	流紋岩質輕石	
34	S-13-2	石皿	18.8	22.5	10.1	3781.22	玄武岩質熔岩	一部欠損
35	S-36	台石	40.5	36.4	12.5	23500	輝石安山岩	一部欠損・S B3から出土

第V章 小 結

第1節 遺跡の位置付け

前章まで遺構・遺物の内容について説明を行ってきた。まず土器等の位置付けを先ず行ってから、中峯遺跡の集落の集落について述べるのが筋ではある。しかしながら本遺跡から出土した縄文時代の土器群は数量的には少ないとはい、県内でも出土例の限られている資料が散見され、具体的に触れる必要がある。このような事から本章では紙面的制限等も勘案して、遺物について論究するのを次節にまわし、遺跡の位置付けを先に述べてみたい。

今回の調査では堅穴住居跡が3基、土坑が9基、柱穴が48基が検出された。その中でSB2が全容が観察される。SB2は谷状地形の東側斜面に位置し、主軸方向を谷方向とほぼ直交させている。本遺構がどの層位から掘り込まれたかは推測の域をでないが、SB1と同一層である第7層である可能性は高いと言えよう。その土層が堆積した時点に置いても谷状地形を呈していたのは、土層図から見ても明白である。

次にSB1の周辺の地形を見てみたい。SB1が位置するのは谷状地形の底部から西側斜面にかけて位置している。ただし谷尻に近いこともあり、主軸方向をほぼ谷状地形と並行させているものと考えられる。以上の例からこの集落は谷状地形を基盤に營まれていたものと言えよう。ただし両例とも傾斜地に設営された住居跡であり、当然ながら貼床がなされているはずであるが、その痕跡も判然としなかつた。この2住居については短期間の居住であろう。SB3については数回の建て直しが判明しており、周辺から出土している第3群土器の第2類に該当する資料からも比較的長期間、生活が営まれていたと考えられる。この集落の東側には志津摩川が流れおり、この流れに沿って歩けば約1km程度で浜にたどり着く。志津摩川の河口付近は現在も小さなながら砂浜が形成されている。浜から南へ東の方向にかけては、伊豆諸島が位置する。黒耀石の産地である神津島は浜辺から南へ約61kmの距離にある。神津島において採集された黒耀石は船で海を越え、浜にたどり着いた後は志津摩川沿いに運ばれ、中峯遺跡の集落へ搬入されたのであろう。

第2節 出土遺物について

1 土 器

中峯遺跡からは縄文時代前期前半代の土器を中心に出土していることは再三述べているが、ではそれらが、いかなる形式の土器に分類されるのかは記述していない。よって本節では個々のタイプがどの形式に該当するのか若干検討してみたい。

第1群土器の第1類は野島式に、第2類は鶴ヶ島台式に該当する。第2群土器の第1類は花積下層式と考えられる。第2群土器の第2類は羽状縄文系土器様式の範疇に入るものと考えられる。第2類-1の一部は有尾式と考えられる。第2類-1の一部、及び-2は関山式・黒浜式等が該当するものと考えられる。第3群土器の第1類は清水ノ上Ⅱ式、もしくはそれに後続する形式と考えられる。第2類は前述の清水ノ上Ⅱ式に並行する、もしくは後続する形式と考えられる。昭和13年に調査された伊東市上の坊遺跡の報告では第1類土器、昭和41年に岡本勇氏により提唱された「上の坊式」に該当する。第4群第1類は諸磧b式に該当する。第1類-3の一部は第2群土器第2類-1の有尾式が含まれる可能性がある。第4群土器の第2類は十三善提式に該当する。第5群土器は北白川下層Ⅱc式に該当する。第6群土器の第1類は勝坂式に該当する。第2類は加曾利E式に該当する。第7群土器の第1類・第2類に

ついては形式が判然としなかった。

第2群土器の第2類-1は有尾式に区分したが、この土器群は遺物の章で既に前述しているように、土器胎土中に纖維があまり見られない・石英や砂粒が多く混入する等に特徴がある。第2類-2に分類した纖維を多く含み、縄文を器面に施すタイプと明らかに異なる。また有尾式の内面調整はナデ調整が一般であるが、後者は丁寧なヘラ調整が観察される。第2群土器の第2類-1に分類した土器群に使用されている半截竹管状の施文具は、形式的に後続すると考えられている第4群土器の第1類の諸磯b式土器のそれと比較して、それ自体の幅が諸磯b式より狭い。第2群土器の第2類-1、特に12~20に代表される資料に観察される文様は器面に深く押し引き、もしくは刺突されている。おそらく竹管は2分の1程度に半截されたものであろう。器面に対し施文具を垂直にして刺突している。諸磯b式はその文様から、やや浅めに押し引き・刺突されたものと判断される。竹管も太めで、全体の3分の1程度に半截されたものを使用されていると考えられる。器面に対し施文具を斜方向にして刺突している。12~20と同一タイプに分類した21については、胎土中に纖維が混入しているが、使用された半截竹管状の施文具の幅は、明らかに諸磯式に近い。纖維・施文具の点から21については諸磯a式に分類が可能であろう。

有尾式についての研究は、最近関東・信州地方を中心に出土例が増加したこともあり、進展の兆しが窺える。有尾式は長野県飯山市の有尾遺跡出土遺物を基に設定された縄文時代前期中葉の土器群である。器面には櫛状工具を用いた列点状刺突文を文様の基調とし、金井正三氏の1982年の論考では爪形文等の半截竹管状の施文具を用いた文様を施された土器群に対しては、有尾式の範疇から除外したほうが良いとする見解が出されていた。しかしながら出土例が増加するにつれ、中峯遺跡出土資料も有尾式の範疇で捉えることが可能になってきた。県内で出土した有尾式土器として真っ先にあげられるのは、再三にわたり本報告内で触れられてきた伊東市上の坊遺跡出土資料があげられよう。上の坊の報告では有尾式土器の資料を「…所謂蓮田式土器を第十類とした。関山式及び黒瀬式の一部が本類に入る。」としている。上の坊報告の復原図6の資料は、底部から内済気味に立ち上がり、胸部で一度大きく括れる。括れ部から口縁に向かって直線的に立ち上がる。括れ部より上位は菱形文、下位にはループ文が施されている。口唇部直下には縦位に沈線が施されている。波状口縁の各波頂部には縦位の隆帯が付加されている。菱形文は半截竹管状の施文具を用いた並行沈線文で構成されている。口縁部の起伏に対応・もしくは反対応する斜方向の並行沈線は各波頂部・波底部の下位の付近で一旦工具を器面から離してから、異なる斜方向の並行沈線を施している。こうして得られた連続する菱形文は各辺が直線的に観察される。菱形文は時間を経るにつれ波状化する傾向が指摘されており、最近の研究では上の坊出土資料を有尾式土器でも比較的古段階に位置付けている。これに対して18に代表される中峯遺跡出土の有尾式土器はどのように位置付けられるであろうか。18の渦巻文の上位にある小菱形文や、15の菱形文下位付近と思われる施文から勘案しても、菱形文の波状化の傾向は看取できない。よって上の坊出土資料に先行するという可能性はなく、むしろ同時期か、もしくはやや後出するものと言えよう。

第2群土器第2類-2は羽状縄文系土器の範疇に入る。第IV章第1節においては34~40を同一個体として考え、追加成形施文法の痕跡が観察されたとした。これは成形と施文を繰り返す製作技法であり、黒坂慎二氏によれば縄文時代前期においては羽状縄文系土器に見受けられる大きな特徴としている。35~37は頸部の資料であるが、特に37は成形時の粘土帶の上端部が残存している。31に見られる口唇部直下に見られる沈線文や、32の裏面に見られる丁寧なミガキ調整、61のループ文等からは関山式の性格が色濃いと言える。出土点数が少なく判然としないが、前後する段階に特有のコンパス文が観察される破片が1点もなく、紐縄文と呼べる資料が1点のみであることが特徴的である。

第3群土器は清水ノ上Ⅱ式並行、もしくは後続する形式と考えられる。この土器群の大きな特徴は口縁部・胸部に施される刺突文である。清水ノ上式土器はI式・Ⅱ式に分類され、愛知県南知多町清水ノ

上貝塚を標式遺跡とする。1970・1987年に2度調査が行われている。最近に山下勝年氏により清水ノ上I・II式について論考が再度発表されている。I式は口縁部に縁帶部が設けられ、口唇部・縁帶部下端に刺突文を、他の縁帶部の領域には細線文を充填するタイプである。II式になると縁帶部幅が縮小し、細線文の代わりに刺突文を充填すると説明する。中峯遺跡出土の第3群土器は文様構成の点においては清水ノ上II式に連続性があろう。ただし口縁部には縁帶部と呼べる痕跡すら確認できる資料は無い。第3群土器の第1類は施文具をアナグラ属の貝類を用い、また第2類に比べて器厚も薄く仕上げられ、しかも焼成はすこぶる良好であり第2類とは明らかに異なる。器面上に細線文は観察されず、縁帶部も存在しない。このようなタイプの土器群に対して山下氏は清水ノ上II式に後続する形式として清水式の存在を示唆している。愛知県西尾市清水遺跡の調査結果を報告した酒井俊彦氏が縁帶部が観察されない資料に対して、清水ノ上II式に後続する可能性を指摘している。清水式とはこの報告を受けて山下氏が推唱したものである。中峯遺跡出土第3群土器第1類もその形式に該当しうる。清水ノ上I・II式土器は山下氏により設定されて以来、20年以上経過している。近年の開発行為によりその土器の出土例は確実に増加してはいるものの、分析に耐えられるほど出土点数は無いと言えよう。多くの土器がそうであるように、おそらく清水ノ上I・II式ともに複数の系統が消長を経たものと想像されるが、氏の論考からは少なくとも大まかに2つの系統の存在が看取されるものの、その系統性については明瞭には触れられていない。現時点ではI・II式の大きな区分は可能でも、系統性や地域色等について検討されるほど出土例が少ない現状においては、第3群土器についてより積極的な分析は不可能であろう。ただし大まかな施文のについての流れについてはある程度推測はできよう。第3群土器第2類のようなタイプはあまり波状口縁は見られず、施文部位については口縁部から胴部上位付近、及び胴部中位付近の概ね2つの箇所に横位の連続刺突文を施している。後者の施文部位は清水ノ上I・II式と共に通性を持つ。前述のようにI式からII式にかけて縁帶部と呼ばれる文様帶の領域が縮小し、それに伴い文様施文領域の縮小という制約を受けつつも、継続する清水式の段階に至って縁帶部という制約から解放されたといえる。予察ではあるがこのタイプは今まで口縁部付近に集約されてきた文様が、胴部中位付近まで下しるものと言える。

静岡県内で中峯遺跡の第3群土器の第2類に該当する土器群が出土しているのは、伊東市上の坊遺跡・東大室クズレ遺跡・東伊豆町宮後遺跡・沼津市清水柳北遺跡があげられよう。数量的に多いのが後者の2遺跡であろう。また御藏島ゾウ遺跡においても出土例がある。また隣県神奈川県でも数例の出土例が確認されている。

中峯遺跡第4群土器第1類は諸磲b式土器に分類される。復原された資料の内、276～279・280・281は基本土層第5層からの出土である。出土位置等が判然としない状態であるが、おおむね一括遺物として位置付けられ、同時期の使用である可能性があることをまず指摘しておく。275～279の文様は半截竹管状の施文具を使用したものである。これらは口縁部から胴部中位まで横位に展開する文様帶を持つことで共通性がある。これらは資料には諸磲a式に特徴的な縱位区画線が観察されない。東京多摩地域においては文様帶は時期が経るにつれ、内部に横位の波線・爪形文等で区画され、文様帶の多段化する傾向が看取されている。この傾向を275～279に適用した場合、時期的には諸磲b式古段階に位置付けられる。特に275については爪形文を施文する際に使用している半截竹管状の施文具の幅が、他の資料と比較してかなり狭く、275に限っては諸磲a式に近い性格を留めていることが明瞭である。また破片の状態からしてもやや磨滅の度合いが274～279に比べて進んでいる印象を受けることからも、275については時期的に先行するものであろう。一方で281は浮線文系統の土器であり、他の土器との位置付けが異なる。浮線文土器については鈴木敏昭氏により詳細な分析がなされている。281は鈴木氏の分類案によればI群土器B類に該当し、諸磲b2(古)式に位置付けられる。谷口康浩氏の分類案では諸磲第5様式にあたる。これ

は一般的に諸磯 b 式中段階の古相と理解される。前述の276～279までの資料が281よりもやや古い性格を持ち、281がやや時期的に後出する点から、両者の時期的位置付けに齟齬が生じてしまうが、275については諸磯 b 式古段階、276～279については諸磯 b 式古段階から中段階への過渡期の資料として位置付けられよう。

伊豆半島東岸部における諸磯 b 式の資料で、全容がある程度把握できる資料は伊東市三の沢遺跡・東大室クズレ遺跡から出土している。三の原遺跡72図の1・73図の1の浮線文土器の2例は鈴木分類でいうII群・III群土器B類に該当し、時期も中峯281とほぼ同時期かやや後続するタイプである。東大室クズレ遺跡87図5の資料はキャリバー状の口縁がさらに発達し、大きく口縁部自体が外方へ反れる形状を呈する。鈴木分類でV群土器に該当する。谷口編年では諸磯第6様式に分類される。明らかに中峯・三の沢例に後続する資料である。中峯遺跡では278が東大室クズレの資料と同時期の所産と考えらる。以上の点から伊豆半島東岸部において中峯遺跡は諸磯 b 期の比較的早い段階で営まれたと言える。

第5群土器第1類は北白川下層IIc式に該当する。中でも284のように器形がはっきり捉えられるまで復原できた例は、管見に触れる範囲内においては長泉町平塙遺跡出土例があげられるのみである。特に伊豆東岸部での出土は非常に重要と言えよう。284は網谷克彦氏による分類案では深鉢Bに該当する。この土器に特徴的な突帯文が出現するのは前段階のIIb式期である。諸磯 b 式で見られる浮線文土器が北白川下層式の影響を受けて成立した事を勘案すれば、284と浮線文土器281の供伴関係は非常に重要と言えよう。

2 石 器

中峯遺跡で出土している石器の石材で、最も多く利用されているのは黒耀石である。产地同定の結果は図示できた資料8点の内、10は柏崎付近産出のもので、それ以外は神津島産出の黒耀石であることが判明した。残りの黒耀石の剥片については分析できなかったものの、おおむね神津島産として考えることができる。

黒耀石に次いで多く使用されているのは安山岩系の石材である。第1章で触れたように周辺地域の地質が天城山の初期噴出物で構成されている点からも理解できる。これらは遺跡の東側を南流する志津摩川の河川礫を利用したものと考えられる。石質は比較的硬質でかつ粘りがあるという点から、蔽石・磨石の他に石斧としての利用も可能であったと言える。

中峯遺跡で出土した石器がほぼ全て在地の石材でまかなわれている中で、15の乳棒状磨製石斧のみが県外産の石材を使用している。15に使用されている緑色片岩はその含有物から、長野・群馬県付近産出と判断された。石質としては硬質で粘りがあり、伐採斧としては最適の石材と言えよう。自然縁のまま伊豆に搬入されたとは考えにくいくことから、製品として既に加工されたものが中峮遺跡へ搬入・使用されたものと考えられる。土器の項で既に触れているように、第2群土器第2類-1の有尾式土器は信州・北関東地方に置いて濃密な分布を示している。分布地と石材の产地と一致している。また乳棒状磨製石斧が有尾期並行の黒浜期に磨製石斧の主流を占めることが判明しており、中峮遺跡からは縄文時代前期代の土器が主流である点からも、15の石斧は縄文時代前期中葉の所産として捉えられる。

（参考文献（五十音順）

（あ）

網谷 克彦 1989年「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』1

足立鍼太郎・堀田美櫻男 1927年「南豆の遺跡遺物について」『静岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』3
静岡縣

- 伊東市 1958年『伊東市史』
- 岩橋陽一他 1992年「諸磯b式土器の展開とその様相—多摩丘陵からの視点—」『研究論集』 XI 東京都埋蔵文化財センター
- 岡本 勇 1966年「尖底土器の終焉」『物質文化』 8
- 小野 真一・秋本真澄他 1992年『東大室クズレ遺跡』 加藤学園考古学研究所(か)
- 片平 剛・田中久美子 1996年『宮後遺跡第4次発掘調査報告書』東伊豆町教育委員会
- 金井 正三 1982年「縄文前期有尾式土器の再検討」『信濃』 34—4
- 川邊 寿栄・佐藤 民雄・江藤千萬樹 1939年「伊豆伊東町上の坊石器時代遺跡調査報告—伊豆半島前期縄紋式文化の研究 第三報—」『考古学』 10 — 8
- (さ)
- 酒井俊彦他 1991年『清水遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木 俊昭 1994年「土器群の変容—例ええば、諸磯b式浮線文土器の場合—」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 縄文セミナーの会 1997年『前期中葉の諸問題』
- 関野哲夫他 1989年『清水柳北遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- 外岡龍二・栗野克巳 1979年『河津町見高段間遺跡—第三次調査概報—』河津町教育委員会(た)
- 竹石健二他 1988年『宮後遺跡(第3次)発掘調査報告書』東伊豆町教育委員会
- 竹石健二他 1995年『鮎遺跡—縄文時代早期の石器製作址—』東伊豆町教育委員会
- 谷口 康浩 1989年「諸磯式土器様式」『縄文土器大観』 1
- (な)
- 中谷治宇二郎 1927年「南伊豆に於ける考古學的資料」『人類學雑誌』 42—2
- (は)
- 東伊豆町文化財保護審議委員会 1984年『東伊豆町の文化財』東伊豆町教育委員会(や)
- 山浦 清他 1991年『三の原遺跡』立教学院三の原遺跡調査団
- 山下勝年他 1976年『清水ノ上貝塚』南知多町教育委員会
- 山下 勝年 1996年「清水ノ上Ⅰ式・同Ⅱ式土器について—清水ノ上貝塚第2次調査出土土器を中心として—」『知多古文化研究』 10

〈附 編1〉

中峯遺跡周辺の地質

国立沼津工業高等専門学校 高 橋 豊

1 はじめに

東伊豆町中峯遺跡は、稲取岬の北西約2kmの標高160~170mの尾根に在り、比較的単調な東伊豆の海岸線に大きな変化を与える稲取岬を見下ろす位置にある。遺跡からは、横を流れる志津摩川を下れば、直線1kmで砂浜の見られる海岸に出られる。遺跡は海蝕崖を避け砂浜に出られる高台に在る。

中峯遺跡は、真北にあたり近距離にある浅間山から流出した浅間山溶岩(As)を基盤にこの谷間を埋めた稲取泥流の上に在る。

繩文前期の土器が点在する中峯遺跡の遺物・住居跡等からなる遺跡本体は、稲取泥流を被う東伊豆單成火山群の一つでこの遺跡の真西に位置する河津町上佐野の寄生火山鉢ノ山火口から放出されたスコリヤ質で縞状に堆積する黄色風化スコリヤ層火山灰層の上部に発達する黒褐色土層中に狹在し、広城テフラである鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)-6300年、B.P.天城火山カワゴ平軽石(KgP)-2900年、B.P.、神津島天上山火山(T-838)、または新島の向山火山の白色火山灰に被われる。

2 遺跡周辺の地形・地質

(1) 遺跡周辺の地形

この地域は伊豆半島東海岸の中央部にあたる。地域の地質は天城火山の噴出物と、その基盤をなす新第三系からなりたっている。地形もこの2つの要素に支配されている。遺跡周辺を被う天城火山噴出物は天城火山の南東部に緩斜面を形成する。この緩斜面を北側で下刻する白田川や南側で下刻する河津川の流域を含め新第三紀の地層が露出する谷沿いの地域は、岩質による硬軟の差が反映して、小起伏の多い山地となっており、天城火山の噴出物が被う南東緩斜面とは対象的である。

白田川の300m~500mの谷壁に見られる天城火山溶岩の厚さは100m~200mにすぎない。

天城火山の南東部緩斜面が海岸線に達する地域では、高さ60m、浅間山南東方では300mに達する海蝕崖が発達している。稲取岬は天城火山浅間山溶岩が主部とは逆に北西に傾斜している部分である。稲取の北1kmの黒根崎は、浅間山溶岩の海蝕崖形成後に玄武岩溶岩が海中に流出して作られたものである。

(2) 遺跡周辺の地質

遺跡周辺には新第三紀(中新世~鮮新世)の火山噴出物を主とする累層と、第四紀の天城火山噴出物とが分布する。新第三系は、白田川の谷壁に見られる白田川火山岩類、南西部の見高から南の海岸や河津川沿いに発達する白浜層群、白田南方の海岸に露出する白田石英安山岩からなる。

主体をなす白浜層群は伊豆半島南部に広く分布し、火成岩を主に海底堆積物が累積したもので、含まれる貝化石から、中新世後期~鮮新世前期のものとされる。稲取周辺地域の地質の基盤をなす白浜層群は、全体としては平坦な構造をみせている。

基盤の白浜層群は、第1表、第2図のように、第四紀(更新世~現世)の天城火山起源の本体溶岩・泥流並びに寄生火山噴出物等に覆われる。天城火山噴出物は主として輝石安山岩の溶岩流からなり、泥流を伴う。噴出時期は更新世の中期頃に始まったと考えられている。天城火山噴出物の周辺には更新世から現世にかけて噴出したと考えられる玄武岩の小規模な溶岩流とスコリヤ丘が所々に分布する。河津町上佐野の鉢ノ山はその例である。

遺跡周辺の地質断面では第1図のように、基底に新第三系の白浜層群の見高砂岩 - sm、見高石英安山岩 - Dm がくる。これを覆って天城火山起源の浅間山溶岩 - As が天城火山南東部の緩斜面を形成し、その谷を埋めて稲取泥流 - Mi が流れ下る。

遺跡周辺の踏査では、稲取泥流 - Mi を最下部に、その上部を玄武岩質スコリヤ噴出物が幾重にも累積し成層する寄生火山鉢ノ山火口の噴出物が覆う。地表にはこれらを覆い黒色帯が発達する。

遺跡断面では、第2図の地質柱状図のように、地表は数10cmの黒色帯に覆われ、谷地形の発達した調査地点では黒色帯の厚さが3mにも達する。繩文前期の住居址・遺物はこの黒色帯の下部の褐色ローム層を33cm掘り下げて構築されている。

繩文前期の住居址・遺物は、広域テフラである鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) - 6300年, B.P.、天城火山カワゴ平軽石 (KgP) - 2900年, B.P.、神津島天上山火山 (T-838)、または新島の向山火山 (Mb-886) の火山ガラスを主体とする白色火山灰に被われる。

(3) 東伊豆單成火山群

伊豆半島は第三紀鮮新世のある時期に陸化し、第四紀には多くの成層火山が成長した。火山は二列に南北に連なる。東の列には南から、天城、宇佐美、多賀、湯河原の成層火山が、西の列には南から、棚場、達磨、井田の火山がみられ、両列の中間に古い成層火山天子火山がある。

伊豆半島で最も新しい火山活動は、上記の火山活動の停止後、今から数万年前から始まった。伊東の大室山火山群と天城山火山及びその周辺を取り巻く天城側火山群によって代表される。この2つの火山群は、伊東の大室山、天城の鉢窪山や河津上佐野の鉢ノ山にみられるように、噴火の様式やマグマの性質などに差が認められないで、まとめて「東伊豆單成火山群」と呼ばれる。

「東伊豆單成火山群」には70以上の単成火山がみられ、350kmに密集する。さらに、東伊豆沖の海底火山を含めると1000kmもの広い地域に広がっている。単成火山とはただ1回の噴火輪廻によって生まれた火山であり、大室山に代表される。何回も噴火を繰り返して大きな山体をつくる成層火山とは異なり単成火山は小さい。

東伊豆單成火山群は、伊東の大室山に代表されるような比較的大量の流動性の大きい玄武岩質マグマの噴出で知られるものが大部分をしめ、天城火山のカワゴ平火口から噴出した軽石や、矢筈山・岩ノ山に代表されるような比較的小量の粘りのある石英安山岩質マグマの活動で特徴づけられる。

SiO_2 65%以上の酸性（軽石質）の噴出物を放出した火口は4つあり、この種の噴出物の90%はカワゴ平から噴出されている。カワゴ平の噴火は、降下軽石 - 火碎流 - 溶岩流の順をおい、日本の火山の中心噴火の典型を示している。一方 SiO_2 60%以下の塩基性（玄武岩質）の噴出物を放出した火口は63あり、圧倒的に多い。そのうち溶岩流を流した火口は40、スコリヤを噴出させ火碎丘をつくるのは45あり、溶岩流総量の約50%が大室山から流出している。噴出物の性質が不明な火口9を含め合計76の噴出口からは総量2.5km³の噴出物が放出されたことが知られている（1977.荒巻、葉室）。

これらの火口からの噴出物の中、鉢ノ山の玄武岩質スコリヤやカワゴ平火口から噴出したカワゴ平軽石 (KgP) は東伊豆町の中峯遺跡を被う。

第1表

現 世	沖積層		
	第 四 紀	更 新 世	天 城 火 山
			寄生火山 玄武岩 白田川泥流 稲取泥流 奥城東溶岩 熱川溶岩 浅間山溶岩 北川溶岩 本体



第1図 那取由岐遺跡付近の地質図・地図断面図

(4) 東伊豆單成火山群の火山活動とその活動様式

東伊豆單成火山群は76個の單成火山からなり、活動期間は40000年と考えられている。噴火の頻度は40000年/76個で約500年に1回の割合となる。約3000年前のカワゴ平からの噴火以後4回の噴火が起こっていることから、この割合は最近數千年間もほぼ持続されていると考えられている。

噴火は全て単一の輪廻で終了したと考えられている。1輪廻の噴火の長さは、記録に残る範囲では、大室山とほぼ同じ規模のもので約10年を要したものがあり、鉢ノ山よりやや小規模なスコリア丘が2日間で形成した場合もあり、かなりの幅があると考えられている。

最近の東伊豆單成火山地域の火山活動はつぎのとおりである。

6000～4000年前 小室山火山の活動（安山岩質）	総噴出量 = 0.28km ³
3500年前 大室山（東伊豆單成火山群最大の噴出）（安山岩質）	総噴出量 = 0.93km ³
3000年前 カワゴ平（石英安山岩～流紋岩質） ブリニー式噴火、爆裂火口の形成	
降下軽石、火碎流の発生	総噴出量 = 0.26km ³
2000～2500年前 岩ノ山－岩ノ塙－孔ノ山－矢筈山－（伊雄山）の火山列の活動 （安山岩質、流紋岩質）（溶岩円頂丘、スコリヤ丘、マール）個々の噴出量 = 0.10km ³	総噴出量 = 0.15km ³

(5) 遺跡を被う火山灰層の特徴

東伊豆單成火山群の76個の單成火山については、葉室（1978）の調査がある。

中峯遺跡の真西の地点には、東伊豆單成火山群の一つの、河津町上佐野の寄生火山鉢ノ山噴石丘や河津町七廻の大池・小池火口が在る。

東伊豆町中峯遺跡の基盤には、稻取泥流を覆い、これらの寄生火山のうち鉢ノ山噴石丘から放出されたと考えられる玄武岩質スコリヤが堆積する。

縄文前期の土器等が点在する中峯遺跡の遺物・住居跡等からなる遺跡本体は、鉢ノ山スコリヤ層の上部の褐色ローム層を切り込んでいる。

遺跡を覆う黒褐色土層中には広域テフラが挟在する。遺跡は鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）- 6300年、B.P., 天城火山カワゴ平軽石（KgP）- 2900年、B.P., 神津島天上山火山（T-838）、または新島の向山火山（Mb 886）の白色火山灰に被われる。

以下、遺跡断面に見られる主要火山灰層の特徴について述べる。

ア 鉢ノ山スコリヤ

東伊豆單成火山群の中で最大のスコリヤ丘である大室山と前後した活動によって噴出したと考えられる玄武岩類の活動は、天城火山本体を取り巻き山麓に存在する寄生火山、北麓の丸野山、西麓の鉢窪山、南麓の鉢ノ山などの、玄武岩質スコリヤ円頂丘を形成した。比高は約200m程度で、山頂には径150m程の火口が見られる。円頂丘は主としてスコリヤからなるが、一部に薄い玄武岩溶岩を伴う。寄生火山鉢ノ山から噴出したスコリヤは真東に位置する東伊豆町中峯遺跡を覆っていると考える。

寄生火山鉢ノ山の玄武岩は、斑晶には斜長石の他にかんらん石、普通輝石、一部にシソ輝石を伴っている。第2、3区の中峯遺跡の地質断面にみる重鉱物組成の推移をみると、試料番号30、地表から150cmの層準以深から、かんらん石、普通輝石、シソ輝石の鉱物組み合わせが顕著になることから、中峯遺跡の地質断面にみる中位の褐色ロームの層準をはじめ、下位の暗褐色腐植質土層が発達する層準の時期にも、寄生火山鉢ノ山から噴出したスコリヤの降灰がなお続いていると考える。本格的な鉢ノ山の玄武岩

の活動は縄文前期の住居址が切り込む褐色ローム層の下位にくる黄色風化スコリヤ層から始まる厚いスコリア層がその様子を物語っている。

黄色風化スコリヤ層以下のスコリア層が寄生火山鉢ノ山の噴出であることは、遺跡周辺の地質踏査の結果、下記の4地点の火山灰層序に鉢ノ山東麓と同じパターンが認められることから確認された。

稻取中峯遺跡付近には、第1図の地質図のBs部分、稻取新田のスコリヤ噴石丘、河津町七廻の大池の火口等の活動が見られるが、直線上にのる4露頭、第1図の西に接する鉢ノ山東麓の崖、第1図の西端七廻地区にみる大池火口壁、見高入谷の崖、中峯遺跡入口の露頭の地質調査結果では、4地点には共通して、特徴ある玄武岩の活動が認められる。第2図の地質柱状図にみられる層序、黒褐色腐植質土層、褐色ローム層、その下位にくる谷地形部分での黒褐色腐植質土層を挟んで下位に、成層する赤褐色スコリアが粘土鉱物アロハーンの淡黄色の膜で包まれ互いに固く結合した厚さ50~120cmの黄色風化スコリヤ層が見られるることは注目される。この黄色風化スコリヤ層は、鉢ノ山の東側の露頭にみる鉢ノ山噴石丘を覆う玄武岩の活動を象徴し、表層300cmのスコリア層の最上部を占める。このスコリヤ層の層厚は大池火口壁では250cm、見高入谷では150cm、中峯遺跡入口の露頭では50cmあり、同じパターンで層相の変化が見られることから、これら連続したスコリア層は鉢ノ山噴石丘起源のものと考える。

中峯遺跡入口の露頭では、地表から55cmまでは黒褐色腐植質土層、その下に47cmの褐色ロームをへて直下に黄色風化スコリヤ層が現れる。下位は褐色の風化帶を挟んで大きな礫を包含する稻取泥流に変わる。鉢ノ山の活動は、カワゴ平軽石の活動(2900年B.P.)が始まる直前までその活動が微かに続いたものと考える。

これらのこととは、中峯遺跡で縄文前期の遺跡が展開したのは、鉢ノ山スコリアが縄上に集積し黄色風化スコリア層を形成した直後の時期であったことを示唆している。

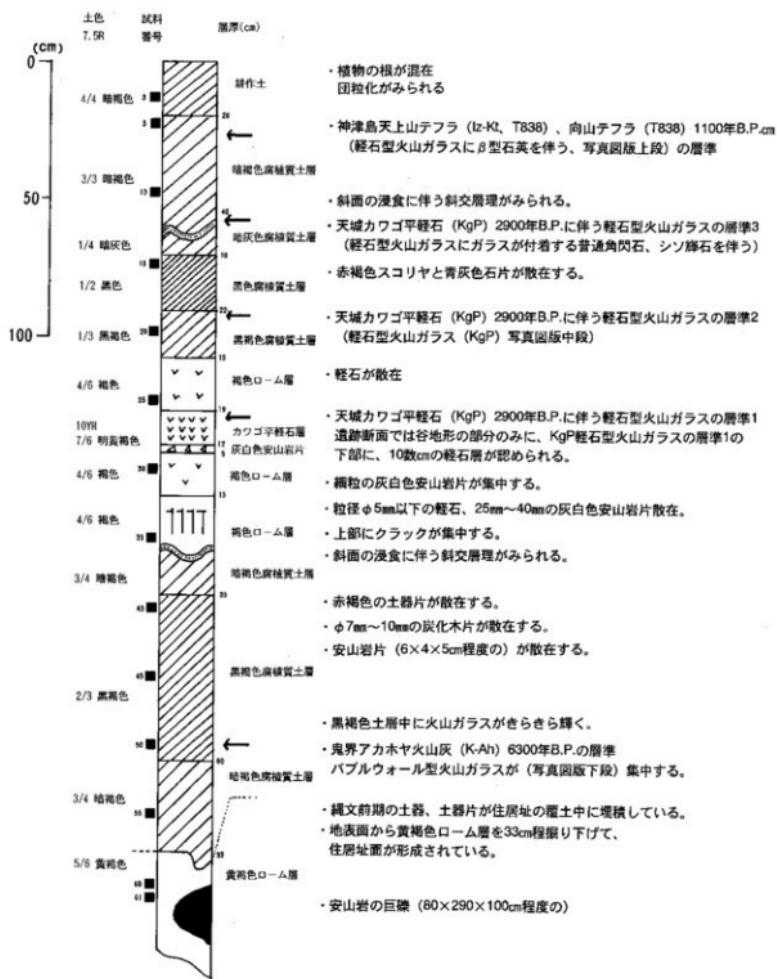
鉢ノ山スコリアの活動の時期は東伊豆单成火山群の中の大室山の活動時期と前後すると思われる。大池火口や稻取新田のスコリア丘の活動はこれより以前とおもわれ、中峯遺跡にはその影響が見られない。

イ 鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)

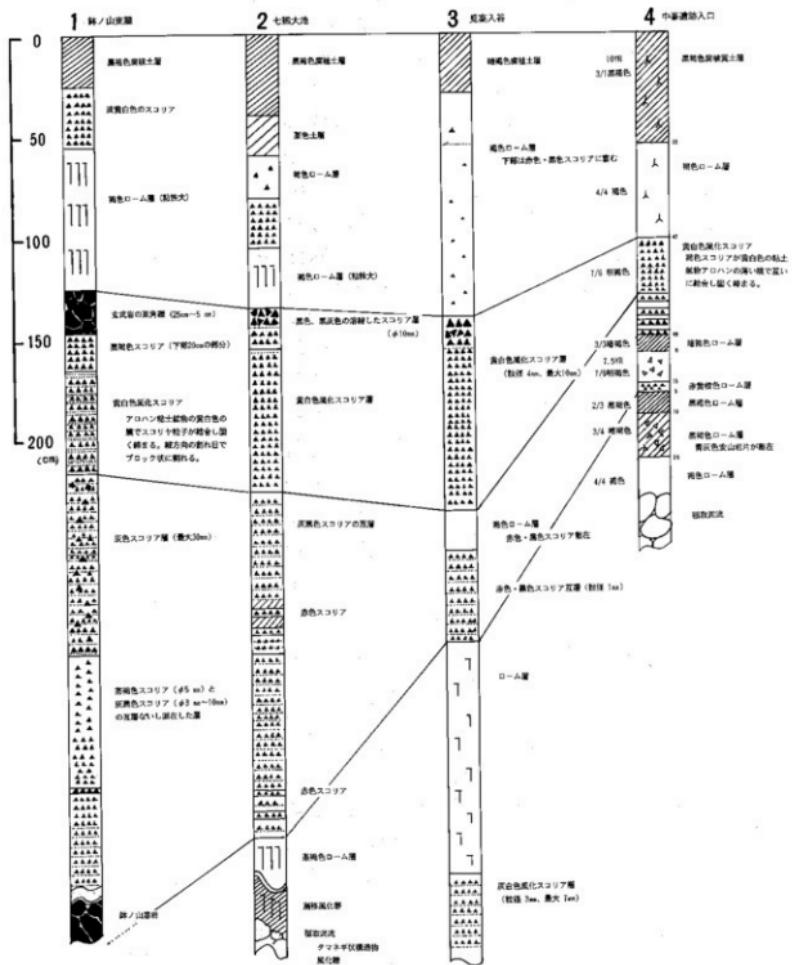
稻取中峯遺跡では、第4図に示すように鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)は地表から2m50cmの最下部の層準に見られ、地表から2m75cmの層準から出土する縄文時代前期の住居址、前期前半の有尾式、清水ノ上式平行期の土器や前期後半の諸磯式土器を覆う。

鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)は、中峯遺跡断面では、地表から2~3mの深度に分散し、地表から2m50cmの層準に分布の頂点がくる。肉眼でも火山ガラス片がキラキラと輝くのが観察できた。この火山ガラス片は顕微鏡下では、薄い平板状のものが多く、ときにY字状のバブルウォール型の特徴を持っている(写真図版下段)。やや彎曲した透明なガラスである場合が多いが、穂の部分の厚みが増すところでは透明からやや褐色味を帯びるなど、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の特色をみせる。エネルギー分散型マイクロアナライザーによる質量分析(EDS)による分析結果は表1の通りであり、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)と同定できた。

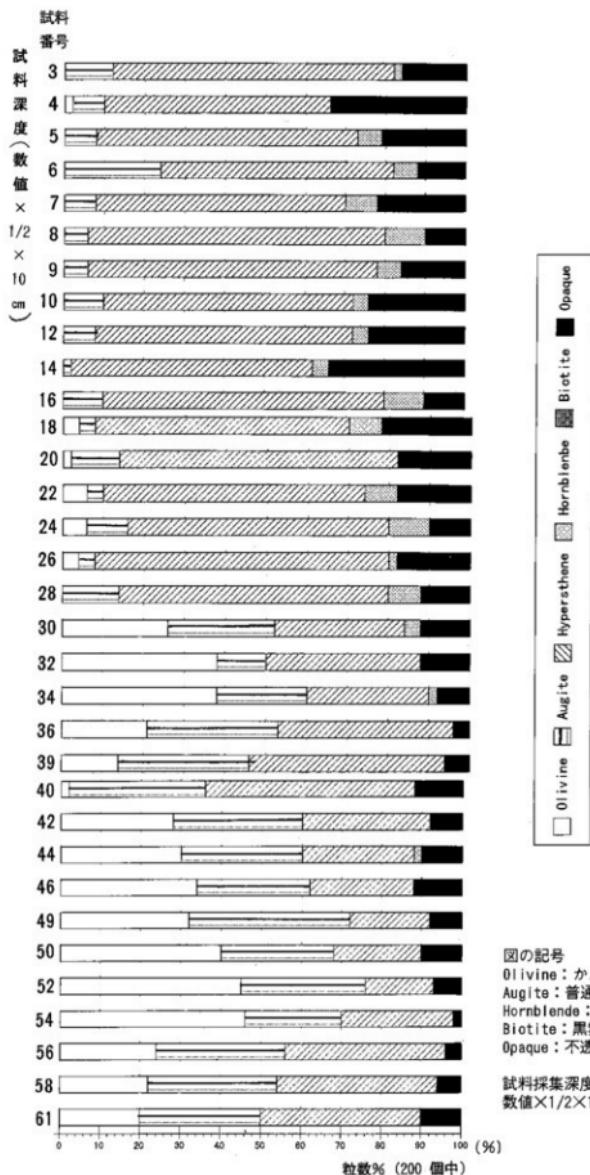
鬼界アカホヤ(K-Ah)は南九州の鬼界カルデラから噴出し、中部日本以西を分布範囲とする重要な広域テフラである。堆積年代C14年代についてでは6000~6500年B.P.と幅がある。しかし伊豆大島の竜の口遺跡において、K-Ah火山灰を混える地層中から縄文早期最終末期の天神山式土器が出土し、同火山灰層中の炭化物のC14年代が 6330 ± 85 y.B.P.を示した。このことからK-Ah火山灰の堆積年代を6300y.B.P.と考えることは妥当と考えられる。



第2図 稲取中峯遺跡の地質柱状断面図 (SB1・谷地形底部付近)



第3図 稲取中峯遺跡入口と周辺地域の表層地質柱状図



図の記号

Olivine: かんらん石

Augite: 普通輝石

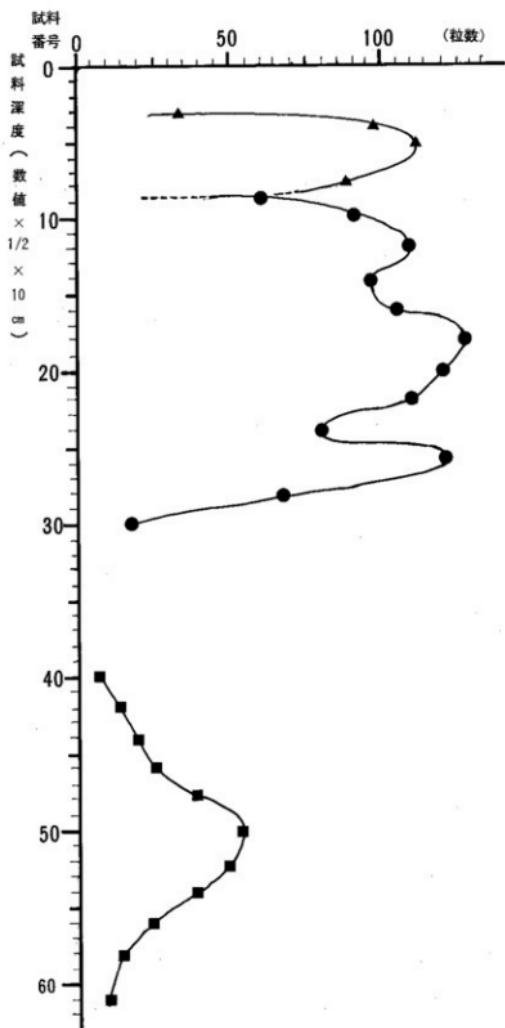
Hornblende: 角閃石

Biotite: 黒雲母

Opaque: 不透明鉄鉱物

試料採取深度は地表より
数値×1/2×10cmで表す

第4図 稲取中峯遺跡の地質断面にみる重鉱物組成(粒数%)



試料深度は、地表より數値×10 cmで表示。

出現率は、重鉱物200個を同定中に出現した各種ガラスの個体数で表示。

第5図 福取中峯遺跡の地質断面にみる火山ガラスの消長（粒数）

ウ カワゴ平軽石層

遺跡土層断面では、最も連続性の良い顕著な指標テフラである。カワゴ平軽石（KgP）試料の層準、地表から深さ約2m、それはまた、アカホヤ火山灰（K-Ah）層の約3m上位にあたる。カワゴ平軽石層の厚い中伊豆地方では、3～5枚の降下ユニットからなり、軽石の他に長石の白い斑晶を含む灰色～黒色の黒耀石などの石質岩片がたくさん見られるが、この露頭では黄白色の発泡した細粒軽石がやや成層してみられる。このカワゴ平軽石層に含まれる火山ガラスは（写真図版中段）透明で纖維状とスポンジ状の軽石型である。カワゴ平軽石層にはガラス片が付着する斑晶のシソ輝石、普通角閃石が見られ、識別をより可能なものにしている。

カワゴ平軽石層は角閃石シソ輝石流紋岩からなる。

東伊豆单成火山群の中で最大規模の火口「カワゴ平」は直径1kmの円形の火口で、天城火山の万三郎岳の北側の斜面標高1100mの所に、北に向かって開口する。そこから北に向かって幅1～1.5kmで長さ4.4kmの長さの溶岩流が見られる。

まず何回かの爆発的噴火による軽石が噴出し、北東、北西、西の3つの分布軸をもつ降下軽石として周辺地域を厚く覆った。この降下軽石は天城山のカワゴ平火口から噴出したもので、「カワゴ平軽石」KgPと呼ばれ、伊豆半島中北部に広く分布する。愛鷹山南麓、箱根西麓斜面、富士山麓でも認められ、静岡市の登呂遺跡、浜松市伊場遺跡では弥生式土器の包含層の下位に見いだされる。カワゴ平軽石（KgP）中伊豆地方からほぼ西方向の分布主軸をもつ特異なテフラとして知られ、遠く琵琶湖の湖底堆積物からも見いだされている。

カワゴ平火口からは大量の軽石が噴出し、火碎流となって北斜面を下った。この火碎流の下部には黒耀岩が認められる。火碎流堆積物の厚さは3～4mであり、緻密なガラス質石英安山岩からなる。

この火碎流に引き続いて、軽石質火碎流が流れ下り、中伊豆の筏場から大見川の谷を埋めた。筏場付近では30mの崖をなし、神代杉に代表される炭化木を含むものが認められる。この炭化木の放射性炭素年代として、2つの値が知られている。

2830±120年 B.P.

Gak - 523

3250±70年 B.P.

TK - 191

この測定値間には約400年の差がみられる。考古学遺物との関係からの検討では、カワゴ平軽石（KgP）の上位からは、御殿場市関屋塚遺跡では縄文晚期の大洞A式土器が出土する。カワゴ平軽石（KgP）の下位からは、中伊豆町白岩遺跡で縄文後期初頭の称名寺式土器が、修善寺町大塚遺跡では縄文後期の加曾利B式と堀之内式土器が出土している。これらの縄文土器の形式について知られている多数のC14年代測定値からみると、カワゴ平軽石（KgP）の噴出年代は約2900年B.P.と推定することもできる。いずれにしても東伊豆单成火山群の半数以上が30000年より新しい時代の活動と考えられる中で、カワゴ平噴出物の活動は3000年前か、それ以後と考えられている。

稲取の中峯遺跡の谷地形をなす遺跡断面には、厚さ25cmの軽石層（KgP）としてその姿を見せる。

カワゴ平軽石（KgP）に含まれる纖維状とスポンジ状の軽石型火山ガラス（写真図版中段）の分布には3つのピークが見られ、カワゴ平軽石の噴火には3つの時期があるようと思われる。

ガラスのEDS質量分析の結果は第2表通りで、カワゴ平軽石（KgP）に対比される。

第2表 中峯遺跡で認められた火山ガラスの化学組成 (WT. %)

火山ガラスの呼称	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO	Total
神津島天上山テフラ (T838)	3.69	0.04	12.31	74.12	3.68	0.31	0.06	0.61	94.82
天城カワゴ平軽石 (KgP)	3.58	0.28	12.23	74.68	2.69	1.59	0.24	1.11	96.4
鬼界アカホヤ (K-Ah)	3.23	0.14	11.91	75.51	3.2	1.05	0.11	1.21	96.36

エ 天上山テフラ（T 838）・向山テフラ（Mb 886）層

白色細粒火山灰で、このテフラは β 石英と火山ガラスを主体とし、火山ガラスは纖維状とスポンジ状の軽石型の特徴をみせる。伊豆大島の新期大島層群のN₃部層中の流紋岩質火山灰層として知られ大島温泉ホテル付近の露頭では1100年前の火山灰として知られる。この伊豆大島の黒い玄武岩質のテフラ中に挟まれるこの特異な白色テフラ層は、神津島の天上山火山または新島の向山火山の噴出物と考えられている。

天上山火山については、続日本後記に承和5年（838年）、向山火山については、扶桑略記などに仁和2年（西暦886年）の噴火の記載が見られる。これらの火山噴出物についてのC14年代測定値も、歴史上の記載と合致する値をみせている。しかし、天上山火山と向山火山の噴出年代の差は50年しかなく、噴出物の特性が類似していることから、給源火山から離れた地点で両者を識別することは困難である。

天上山火山と向山火山の噴出物には下記の特徴が認められる。

天上山火山と向山火山の噴出様式は、いずれも水蒸気式ブリニアーン噴火によるもので、1-ベースサージと火碎流、2-火碎丘と降下テフラ、3-溶岩円頂丘の順に噴出したと考えられている（一色1982）。神津島と新島の間にある式根島では、天上山テフラ層の直上に向山テフラ層が重なり、両者の間には暗褐色の薄い埋没土層が見られる。天上山テフラ層は天上山山頂で見られるのと同様に白色火山灰で粒径が揃い降下火山灰としての性格をもっている。一方、向山テフラ層は軽石とガラス質火山砂からなり、特異な斜交層理がみられることからベースサージ、リング状の環、つまり上昇する噴煙の基部から地表に沿って横方向へ高速で広がる火碎流の一種と考えられる性格を見せている。

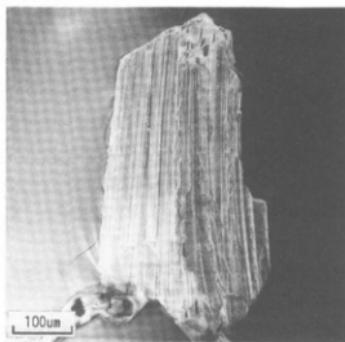
天上山テフラと向山テフラは、伊東市大室山付近では、火山噴出物の表層の50cm～100cmの黒色土層中に挟まる。一碧湖の湖底堆積物には、地表から60cmの泥炭質堆積物中に挟まる。伊豆地域にみる天上山テフラと向山テフラは、一枚の白色細粒火山灰層としてよりも散乱帶として認められる場合が多い。

福取の中峯遺跡では第4図のように、地表下50cm～60cmに散乱帶のピークが来ている。

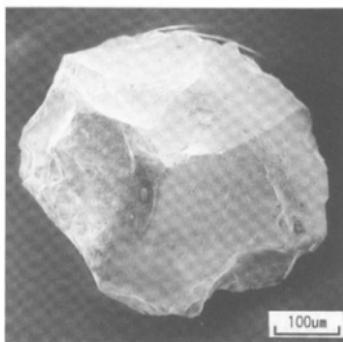
ガラスのEDS質量分析の結果は第3表の通りで、天上山テフラに対比される。

〈参考文献〉

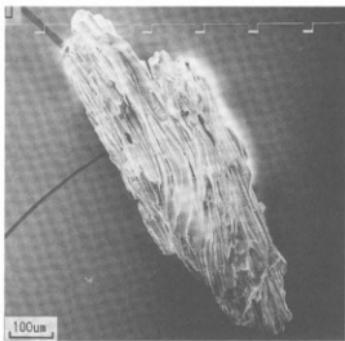
沢村孝之介、1995、5万分の1地質図幅、同説明書 修善寺



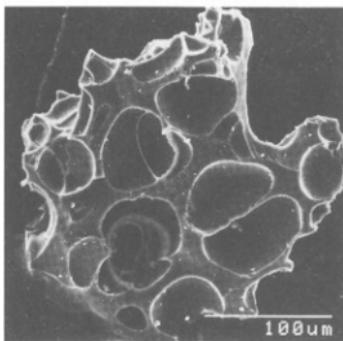
神津島天上山テフラ (Iz-Kt)



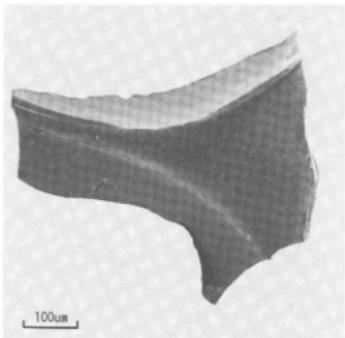
左・軽石型テフラ 右・ β 石英



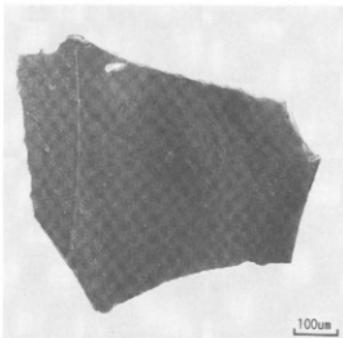
カワゴ平軽石 (KgP) 左・軽石型テフラ



右・発砲した軽石型テフラ



鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 左・右共にバブルウォール型火山ガラス



図版 1 火山灰顯微鏡写真

中峯遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中峯遺跡が位置する伊豆半島の地質は二重構造になっており、新第三系の上位に第四系が分布する。新第三系は、湯ヶ島層群・白浜層群と呼ばれる海底火山堆積物から構成され、伊豆半島の南部や北部に分布し、中央部では狩野川沿いに見られる（盛谷、1988など）。第四系は、富士火山帯南帯の火山による安山岩質マグマの噴出物から主に構成され、箱根火山周辺から伊豆半島北半部に広く分布する（石田、1988など）。

本遺跡は、伊豆半島南東部、第四系火山噴出物に覆われる地域にあたり、その背後に伊豆半島の火山の中でも最も大きい天城火山がひかえている。発掘調査の結果、谷底から尾根斜面部にかけて、縄文時代前期の住居跡や土坑等が検出されている。今回、谷部に構築された住居の埋積過程や谷部の堆積環境を検討するために珪藻分析を、遺跡周辺の古植生について検討するために植物珪酸体分析および種実遺体同定を実施した。

1 試 料

I NM 2 区北壁の層序は、最下部に明褐色ロームが認められ、その上位が①層～⑨層に分層されている。⑦層・⑤層で赤色コリヤや炭化物が認められ、③層下部で灰白色軽石が散在する。また、②層で伊豆天城山カワゴ平火口から噴出したとされる天城カワゴ平軽石（Kg：町田ほか、1984）を挟む。Kgは、約2800～2900年前に噴出したとされている（町田・新井、1992）。当社技術の現地調査所見によると、⑦層が縄文時代前期の住居構築前の表土、⑧層が S B 3 の覆土、⑥層が S B 1 の覆土である。また、調査区内は谷にはば直交して設定されており、中央部の谷底に S B 1 が立地している。

試料は、谷底の S B 1 付近から計43点（試料番号1～43）、S B 3 覆土（試料番号44）およびその付近の地山（試料番号45）、S B 1 付近で Kg を対象に3点（試料番号46～48）、それぞれ採取した。この他、縄文時代前期以降の炉跡の可能性がある S X - 01 から土壤試料を1点採取した。

分析は、試料番号39・36・34・30・28・20について珪藻分析を、試料番号39・36・28・20・18・8・6・2について植物珪酸体分析を実施した。また、S X - 01 から採取した土壤試料について植物珪酸体分析・種実遺体同定を行った。図1に、遺構平面図および試料採取地点を、図2に分析を行った S B 1 付近の模式柱状図および分析層位を示す。

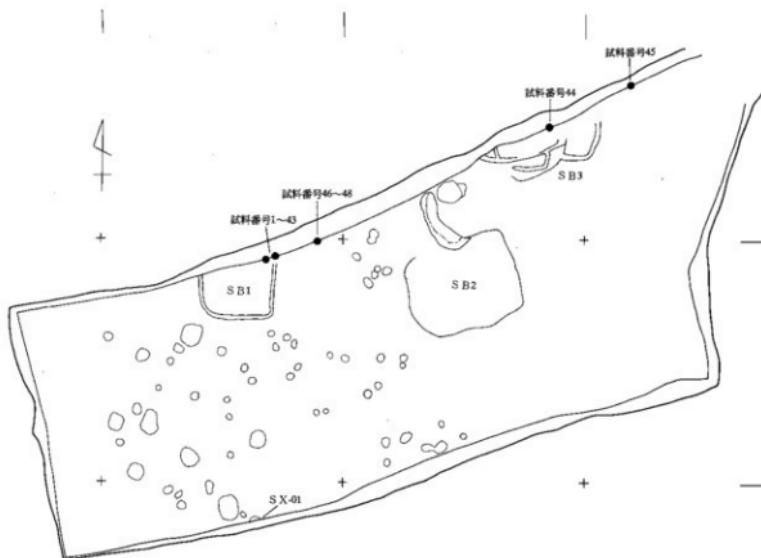
2 分析方法

(1) 硅藻分析

試料を湿重で約7 g 秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。

(2) 植物珪酸体分析

湿重5 g 前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250 kHz, 1分間)、沈定



第1図 中峯遺跡の遺構平面図および試料採取地点

法、重液分離法（ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理して、植物珪酸体を分離・集めする。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、出現個体数の一覧表に表示する。また、生育していたイネ科植物について検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率の算出は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体のそれぞれの総数を基數として用いた。

（3）種実遺体同定

0.5mmの籠を使って、試料についた泥を洗浄して、種実遺体を検出す。

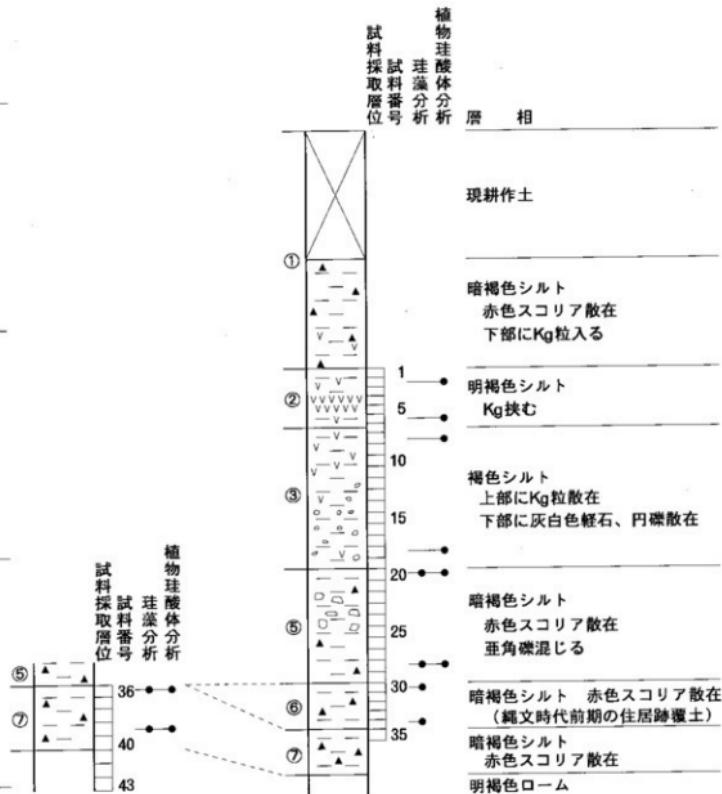
3 結 果

（1）珪藻化石

珪藻化石は、6試料とも無化石である。

（2）植物珪酸体

結果を表1・図3に示す。植物珪酸体は、保存状態が悪いものの、各試料から検出される。SB1付近から採取した試料では、タケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。これらの種類は、層位ごとに増減を繰り返す。この他、キビ族・ヨシ族・イチゴツナギ亞科などが検出され、試料番号8・2でイネ属が僅かながら検出される。また、試料番号8～2では、イネ科起源の植物珪酸体の他に不規



第2図 SB1付近の模式柱状図および分析層位

則な紡錘形を呈する樹木珪酸体IV型（近藤・ピアスン, 1981）が多産する。一方、SX-01覆土では、ウシクサ族（ススキ属）が多産し、タケ亞科などを伴う。

(3) 種実遺体

SX-01覆土中に種実遺体は認められない。

4 考 察

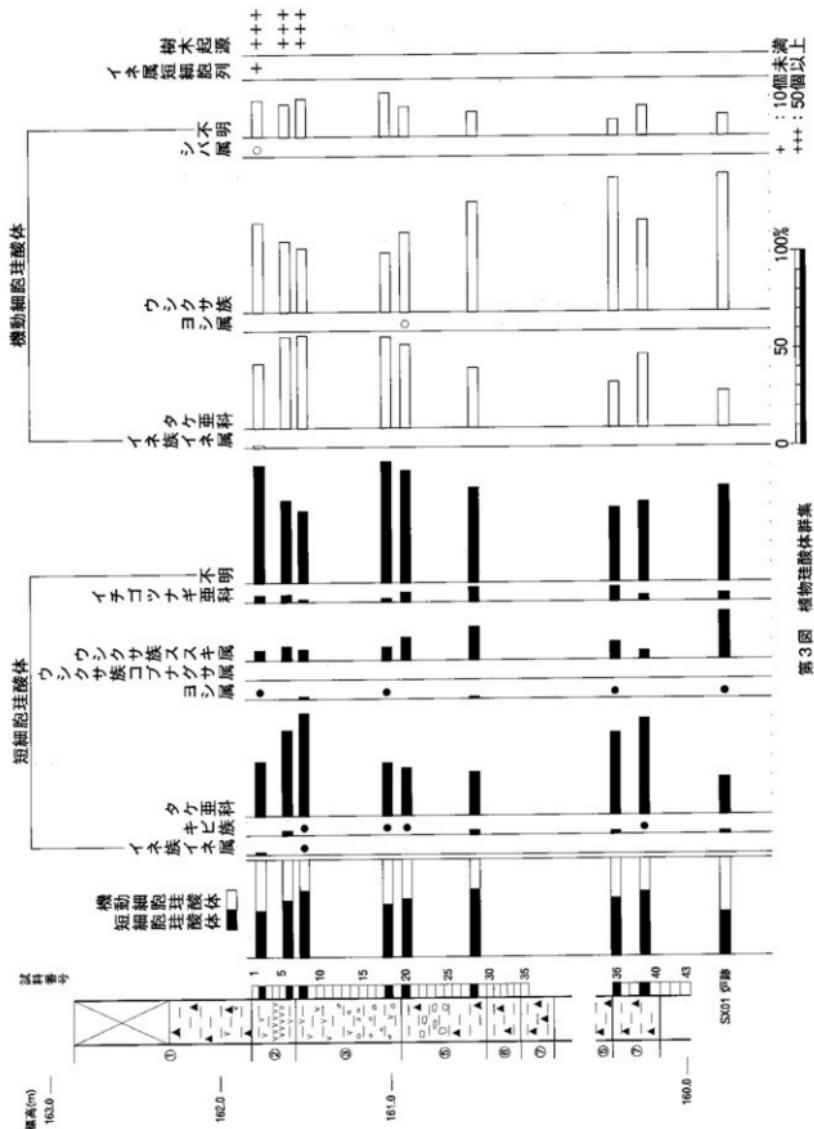
⑦層・⑤層および住居跡覆土では、珪藻化石が検出されない。この理由として、珪藻の生育環境として不適当なほど乾燥していた、あるいは堆積速度が速いために堆積物中に珪藻化石がほとんど取り込まれなかつたなどのことが考えられる。今回の場合は、調査地点が小谷の谷底から尾根斜面部に立地するという地形的な条件を考えると、両者のことが複合で生じていた可能性がある。すなわち、縄文時代前期頃、集落の周辺はかなり乾いた状態であり、崩落や風などによって周辺から土壤が運ばれて埋積したと想像される。

⑦層・⑤層で検出される植物珪酸体はタケ亜科以外に、ススキ属などのウシクサ族およびイチゴツナギ亜科が相対的に多く検出される。これより、縄文時代前期頃、タケ・ササ類、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが生育していたと推定される。特に縄文時代前期の集落付近には、ススキ属やイチゴツナギ亜科が生育しており、比較的開けた草地のような状態であったと思われる。しかし、これらの種類は、③層になると出現率が低下しており減少した可能性がある。このように、黒ボク土層でススキ属やイチゴツナギ亜科が多く検出される。松井（1988）によると、台地上の火山灰土壤の表層にみられる黒ボク土の形成過程に関して、ササ類やススキ属などのウシクサ族が大きな影響を持っているとしている。ここでも、⑦層・⑤層でススキ属やイチゴツナギ亜科が多く検出されていることをみると、本地域の黒ボク土層の形成にもこれらのイネ科植物が関与している可能性がある。なお、SX-01覆土中の植物珪酸体はススキ属が多産し、上位の⑤層と類似した組成を示す。特徴的な植物珪酸体を含む組織片が観察されないこと、および前述した本住居跡の埋積過程を考慮すると、ここで得られた植物珪酸体群集は周辺からの流れ込みによると思われる。ただし、集落付近にススキ属などのイネ科が生育していたと考えられることから、当時、これらの種類を燃料として利用していた可能性がある。

また、③層上部～②層で多産する樹木珪酸体IV型は、近藤・ピアソン（1981）によると、シイノキ属・ツツジ科・モクレン科などの葉部に形成するとされている。したがって、調査地点の付近にはこれらの種類の何れかが生育していたと考えられる。伊豆半島およびその周辺で実施された植生史調査をみると、後氷期を通じてスギが優勢であるが、この他にシイ・カシ類などの照葉樹が存在していたことが明らかにされている（辻、1977；東郷・橋屋、1984；叶内ほか、1989；松下、1990）。また、八丈島や大島でも植物珪酸体・材の産状から照葉樹が存在していたことが推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993・1994）。シイノキ属・ツツジ科・モクレン科の中の多くが暖温帯を中心に分布することを考慮すると、ここでの樹木珪酸体の多産も遺跡周辺に暖温帯林が成立していたことを反映している可能性がある。

第1表 2区北壁とSX01の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	2区北壁							SX-01 炉跡
		2	6	8	18	20	28	36	39
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属	3	—	2	—	—	—	—	—	—
キビ属	—	5	2	1	1	6	4	2	3
タケ亜科	57	92	120	55	52	55	98	106	40
ヨシ属	2	—	3	1	—	3	1	—	2
ウシクサ族ススキ属	11	15	13	14	25	42	21	10	51
イチゴツナギ亜科	7	8	3	4	11	19	18	7	9
不明キビ型	81	45	57	64	72	75	61	57	62
不明ヒゲシバ型	16	22	13	26	35	34	22	20	27
不明タンチケ型	27	22	14	36	15	12	6	12	14
イネ科葉身強健細胞珪酸体									
イネ族イネ属	3	—	—	—	—	—	—	—	—
タケ亜科	75	70	51	79	61	34	37	41	47
ヨシ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—
ウシクサ族	103	54	35	51	58	62	108	51	178
シバ属	2	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	42	25	21	38	22	14	13	17	28
合計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	204	209	227	201	212	246	231	214	208
イネ科葉身強健細胞珪酸体	225	149	107	168	142	110	158	109	253
總計	429	358	334	369	354	356	389	323	461
組織片									
イネ属短細胞列	1	—	—	—	—	—	—	—	—
その他									
樹木起源	131	223	478	—	—	—	—	—	—



第3回 植物硅酸体群集

なお、試料番号8・2では栽培植物のイネ属が僅かながら認められた。この検出されたイネ属は出現率が低率で、しかもKgが散在している。また、耕作の状態によっては、微化石が1m下方へ移動することもある（パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表）。これらのことを考えると、ここで検出されたイネ属は後代の影響によって落ち込んできたと考えられる。

以上、植物珪酸体の産状から古植生を検討したが、周辺にどのような樹木が生育していたのか明らかにするためには、住居構築材や燃料材の樹種同定も有効である。このような資料を蓄積することで、本遺跡で生活していた人々と周辺環境がどのように関わりを持っていたのか検討することが可能になるとと思われる。

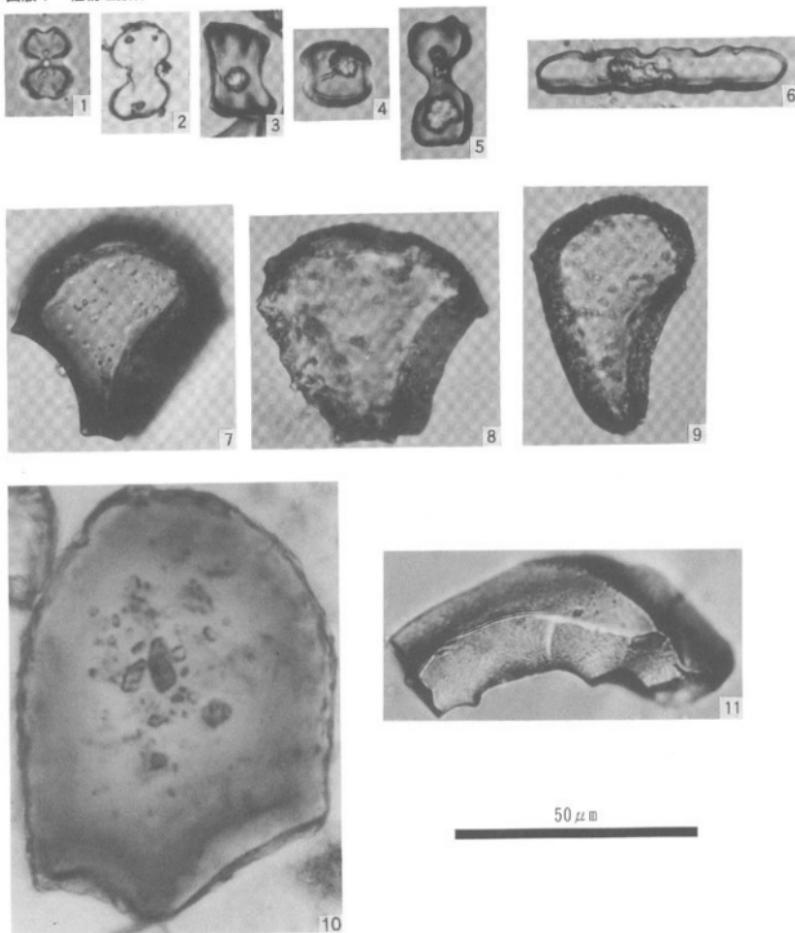
図3註

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++の記号で示す。

〈引用文献〉

- 石田 高（1988）火山、日本の地質4「中部地方I」, p.187-191, 共立出版株式会社。
叶内敦子・田原 豊・中村 純・杉原重夫（1989）静岡県伊東市一碧湖（沼地）におけるボーリング、コアの層序と花粉分析、第四紀研究, p.27-34.
近藤練三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について、帯広畜産大学研究報告, 12, p.217-229.
近藤練三・佐藤 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究, 25, p.31-64.
町田 洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」, 276p., 東京大学出版会。
町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログー、渡辺直経編「古文化財の自然科学的研究」, p.865-928, 同朋舎出版。
松井 健（1988）「土壤地理学序説」, 316p., 築地書館。
松下まり子（1990）伊豆半島松崎低地の後氷期における植生変遷史、日本生態学会誌, 40, p.1-5.
盛谷智之（1988）伊豆半島、日本の地質4「中部地方I」, p.104-107, 共立出版株式会社。
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）遺構・遺物の自然科学分析調査、「八重根 東京都八丈島八丈町八重根遺跡発掘調査報告」, p.327-351, 東京都港湾局・八丈島八重根遺跡調査会。
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）遺構・遺物の自然科学分析、「大島オンダシ遺跡 大島市庁舎新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」, p.115-146, 大島市庁遺跡調査会。
辻誠一郎（1977）山木遺跡における花粉分析的検討、「山木遺跡第4次調査報告書」, p.64-66, 薩摩町教育委員会。
東郷正美・橋屋光孝（1984）丹那盆地における完新世後半の環境変化—花粉分析結果を基にして、月刊地球, 6, p.186-193.

図版 1 植物珪酸体



- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 イネ属短細胞珪酸体（試料番号2） | 2 キビ属短細胞珪酸体（試料番号36） |
| 3 タケ亜科短細胞珪酸体（試料番号28） | 4 ヨシ属短細胞珪酸体（試料番号28） |
| 5 ススキ属短細胞珪酸体（試料番号36） | 6 イチゴソナギ草科短細胞珪酸体（試料番号36） |
| 7 イネ属機動細胞珪酸体（試料番号6） | 8 タケ亜科機動細胞珪酸体（試料番号8） |
| 9 ウシクサ属機動細胞珪酸体（試料番号8） | 10 ヨシ属機動細胞珪酸体（試料番号20） |
| 11 樹木起源珪酸体（試料番号8） | |

中峯遺跡発掘作業・整理作業参加者名簿（五十音順）

現地発掘作業参加者

奥山 操 杉本 道子 竹中 月子 田中よし子 野村 甫 長谷川幸江
丸山 良弘 山田 吉治 山田 龍弘 山田 照義 山田ふゆ子

現地整理作業参加者

鈴木 節子

報告書整理作業参加者

加藤 直美 勝又 幸子 鈴木 里江 鈴木 輝美 峰松 祥子 渡辺 浩美

遺物写真撮影

湊 嘉秀

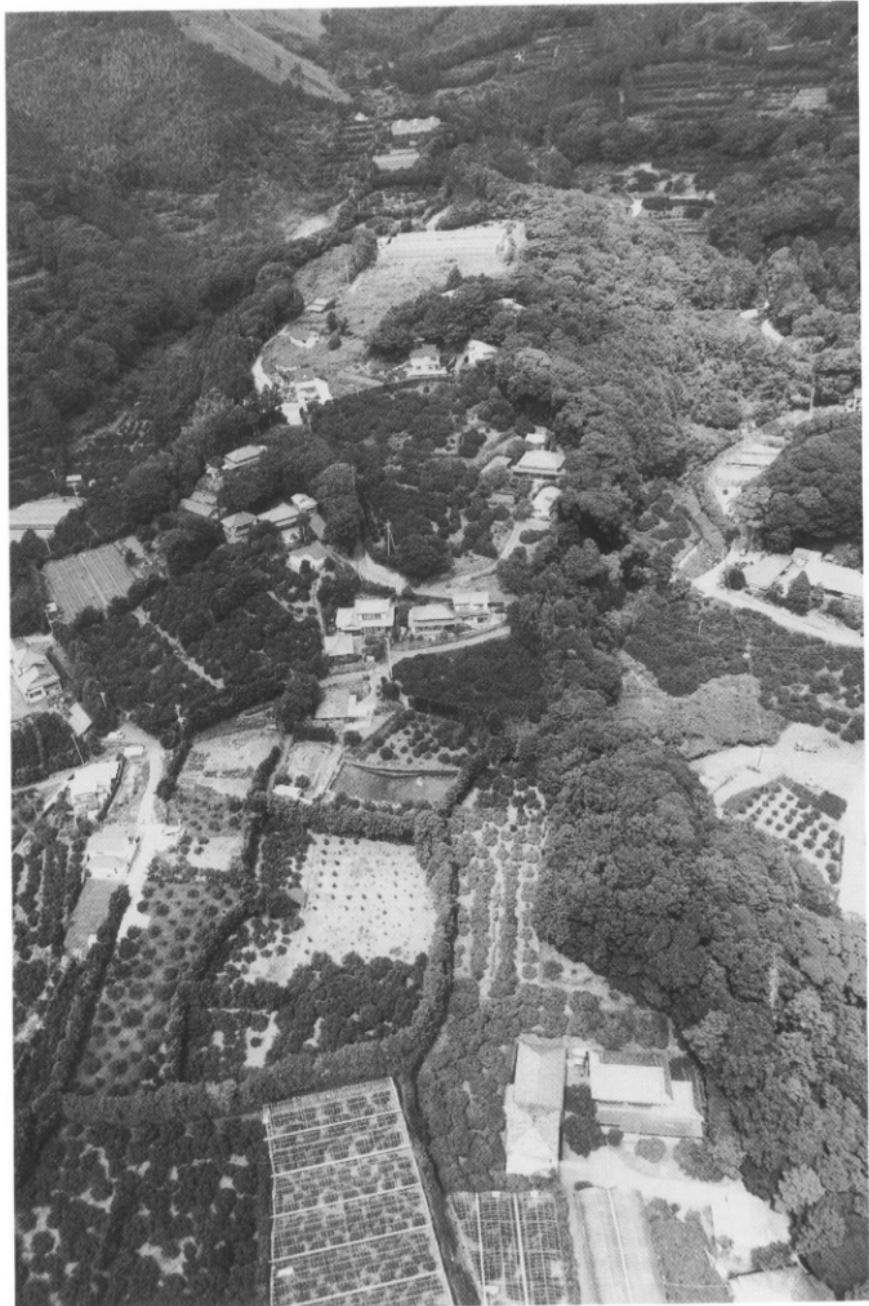
石器石材鑑定

森嶋富士夫

謝 辞

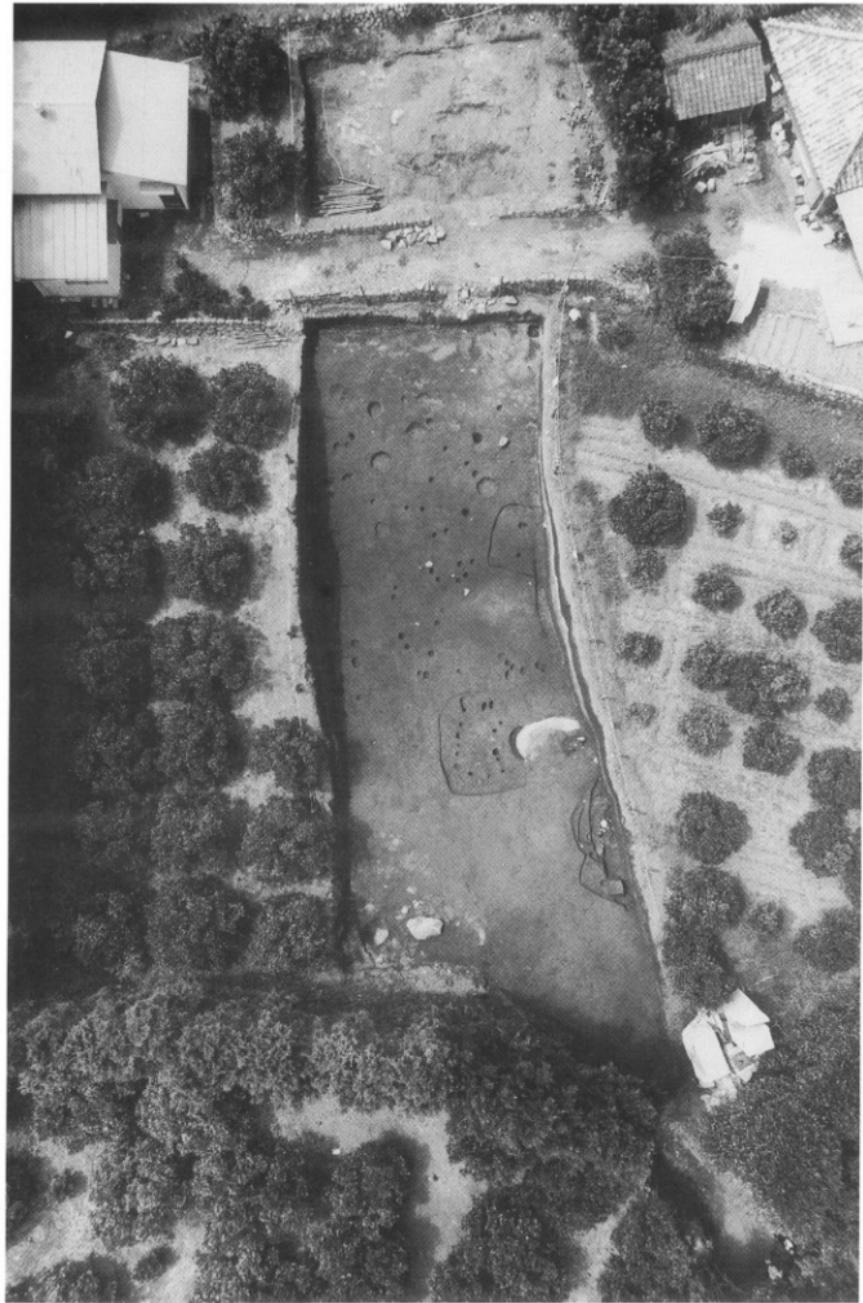
本書をまとめるにあたり、関野哲夫（静岡県教育委員会）・池谷信之（沼津市教育委員会）から御助言・御教授を賜った。また現地・室内作業にも多くの方が参加して頂いた。最後ではあるが感謝申し上げたい。

写真図版



中峯遺跡遠景（南側から）

図版2



中峯遺跡全景（画面上方が西）



1—調査区北壁土層堆積状況 1

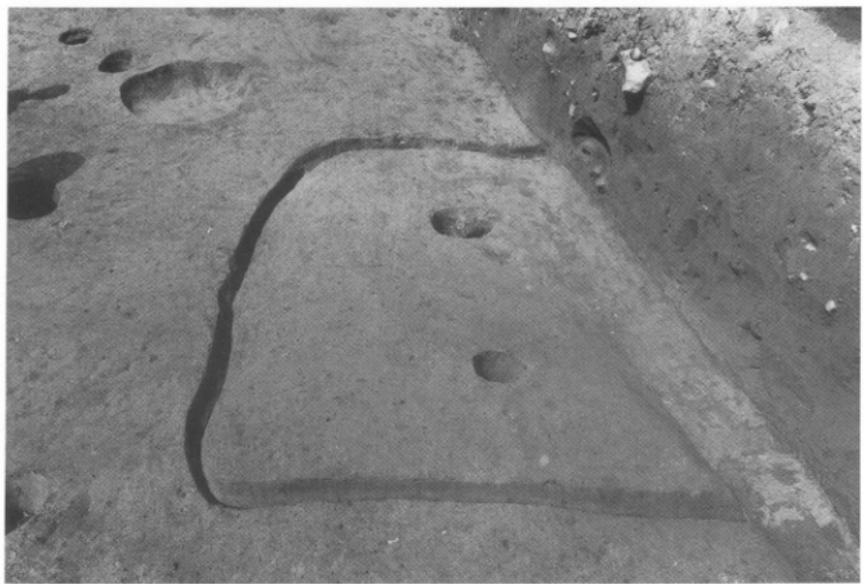


2—調査区北壁土層堆積状況 2

図版4



1—調査区北壁土層堆積状況 3



2—SB 1 完掘状況（東側から）



1—SB 2 完掘状況（西側から）

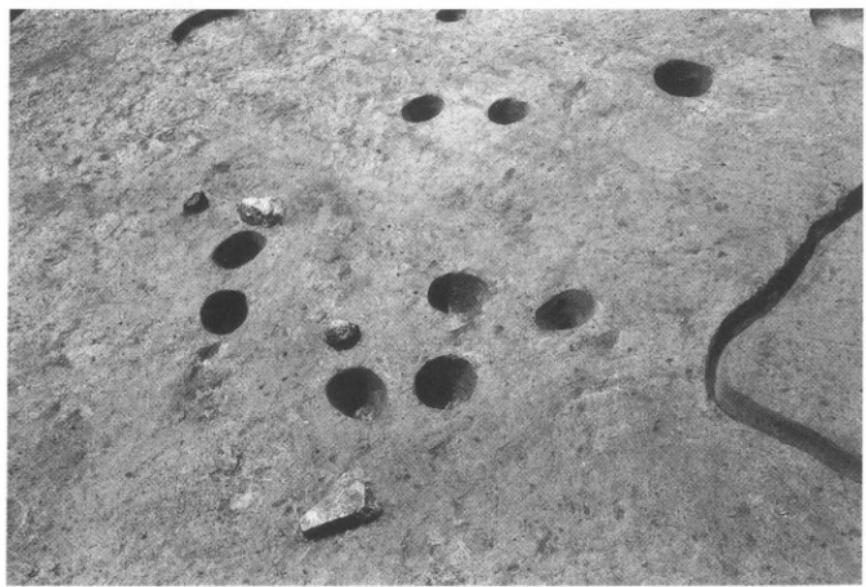


2—SB 2 土坑完掘状況（南側から）

図版 6



1—SB 3 碑出土状況（南側から）



3—柱穴群完掘状況（北東側から）



1—土器283出土状況（東側から）



4—土器284出土状況（北側から）

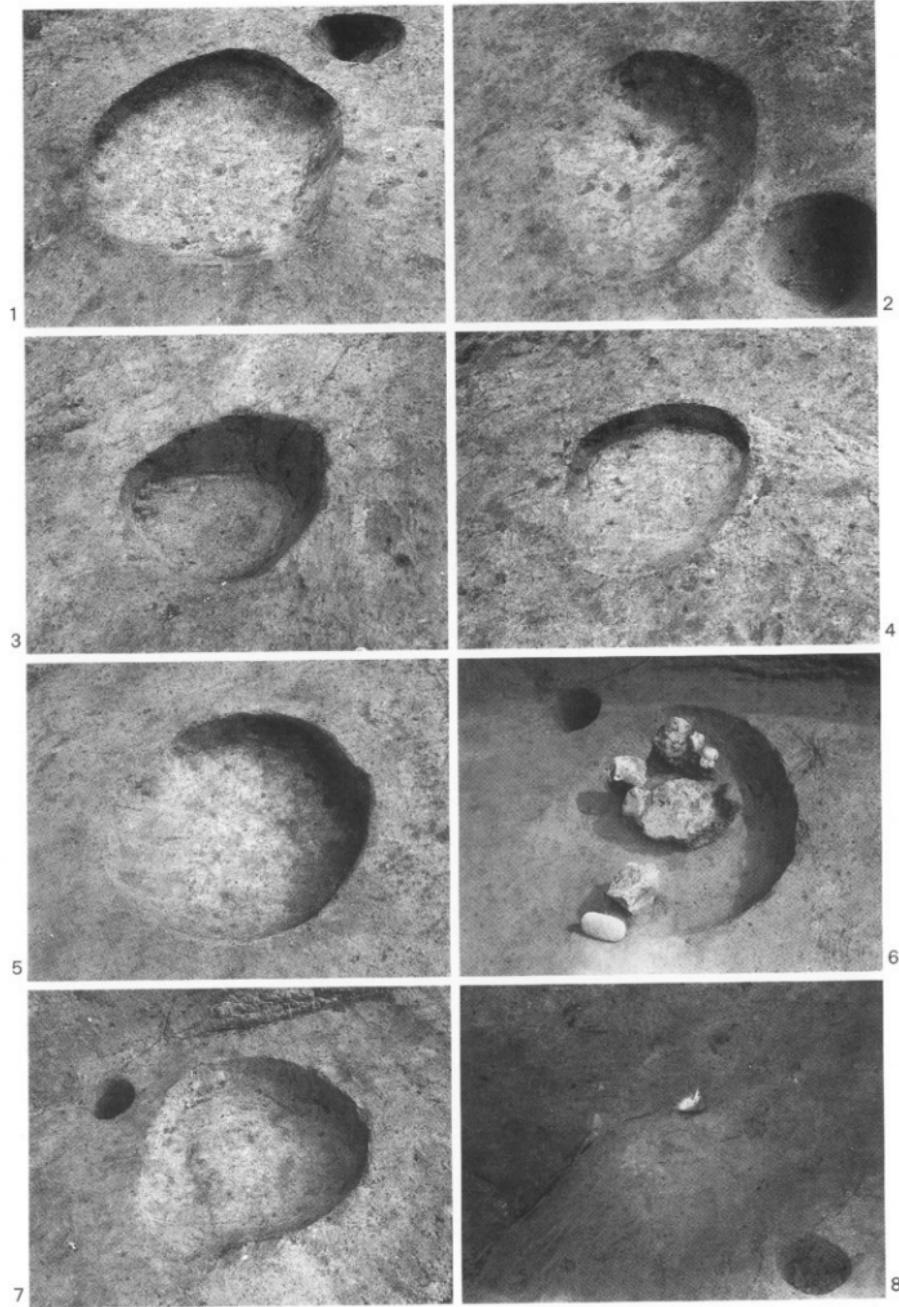
図版 8



1—石皿31出土状況（北側から）



5—S F 8内石皿32出土状況（西側から）



1~8-SF・SX検出・完掘状況



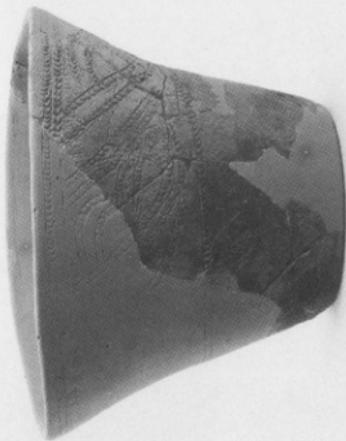
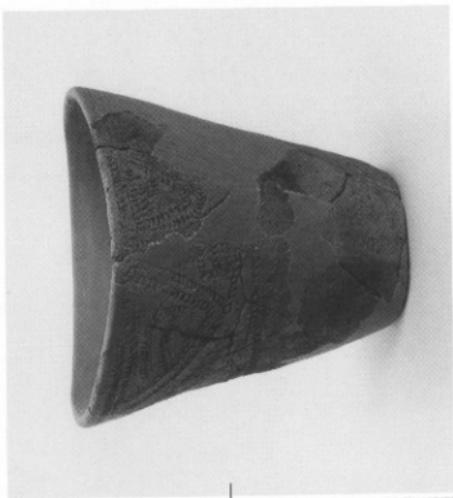
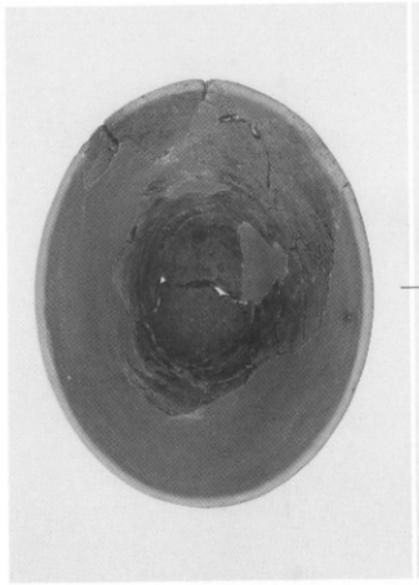
1

281



2

276



土器 275



1

279



2

284



1
274



2
283



3
280



4
282



7



5



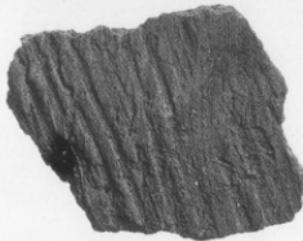
3



1



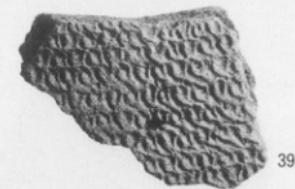
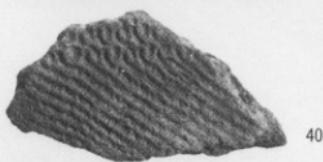
2

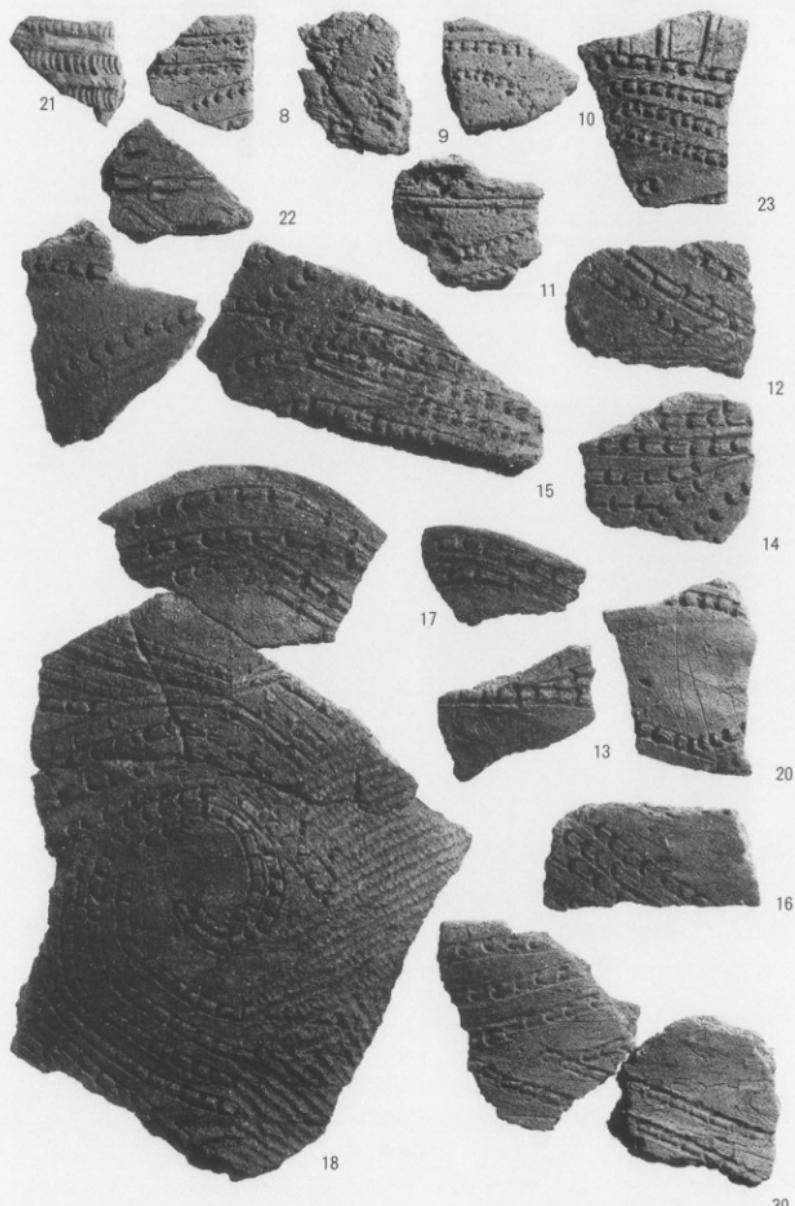


6

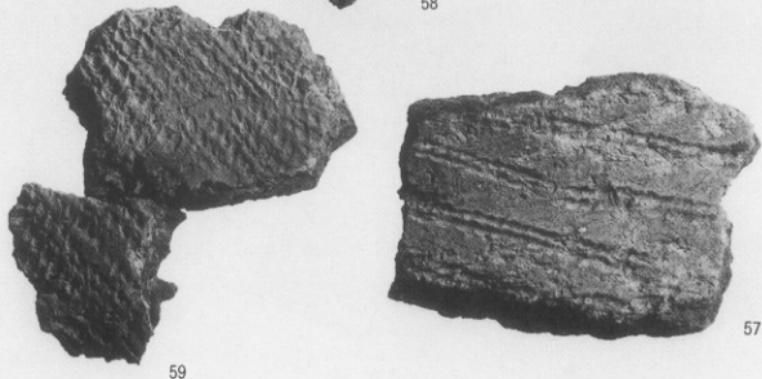
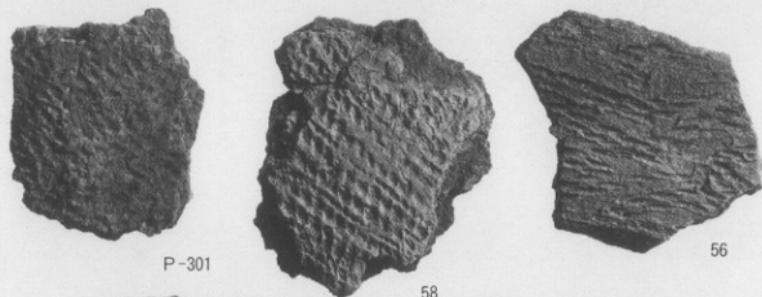
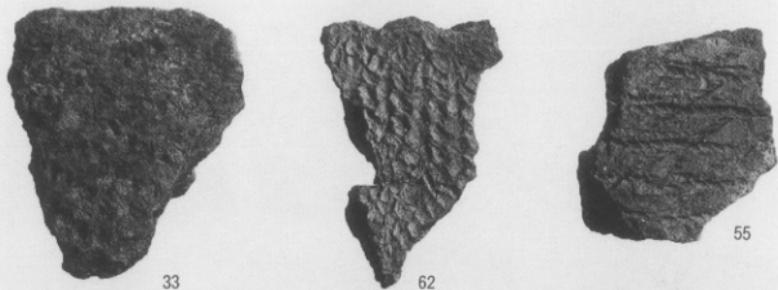


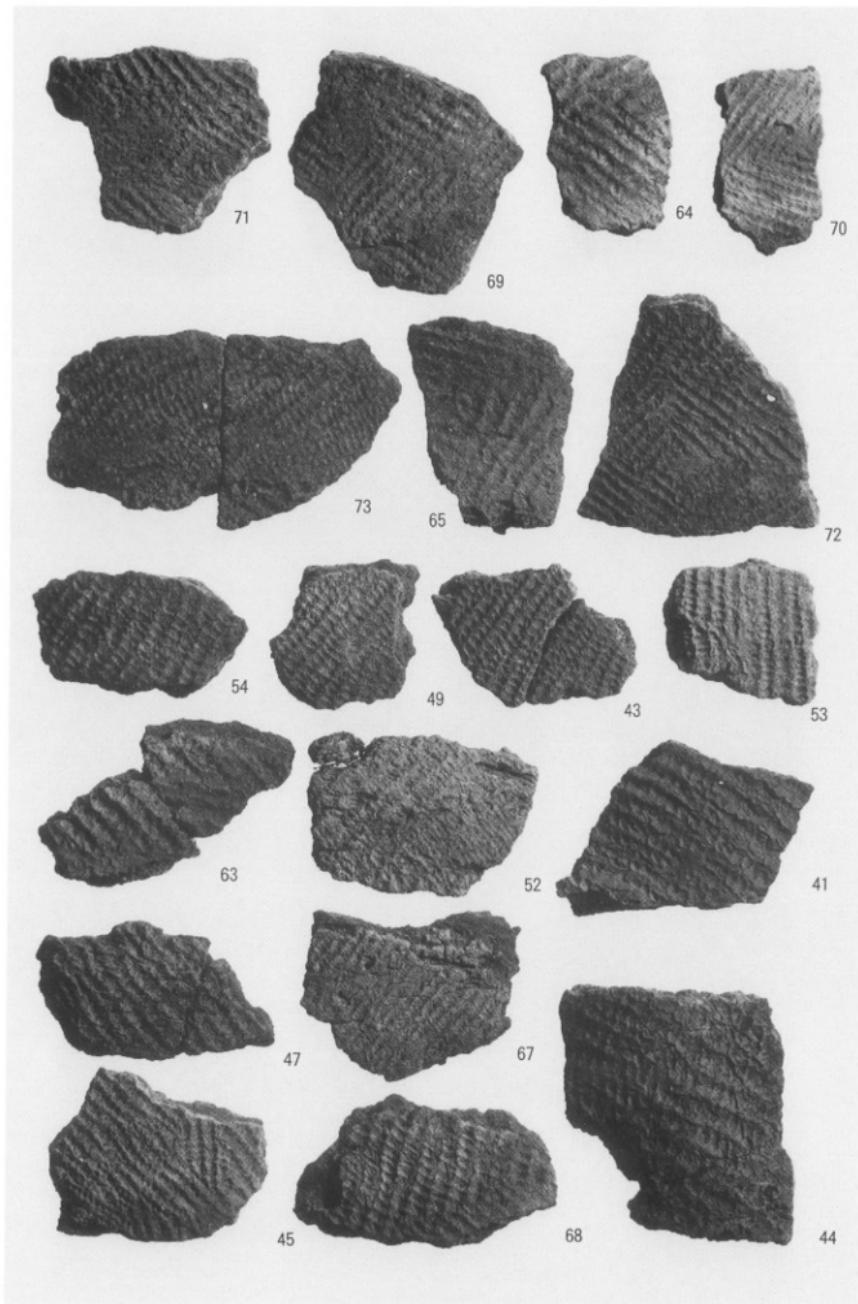
4





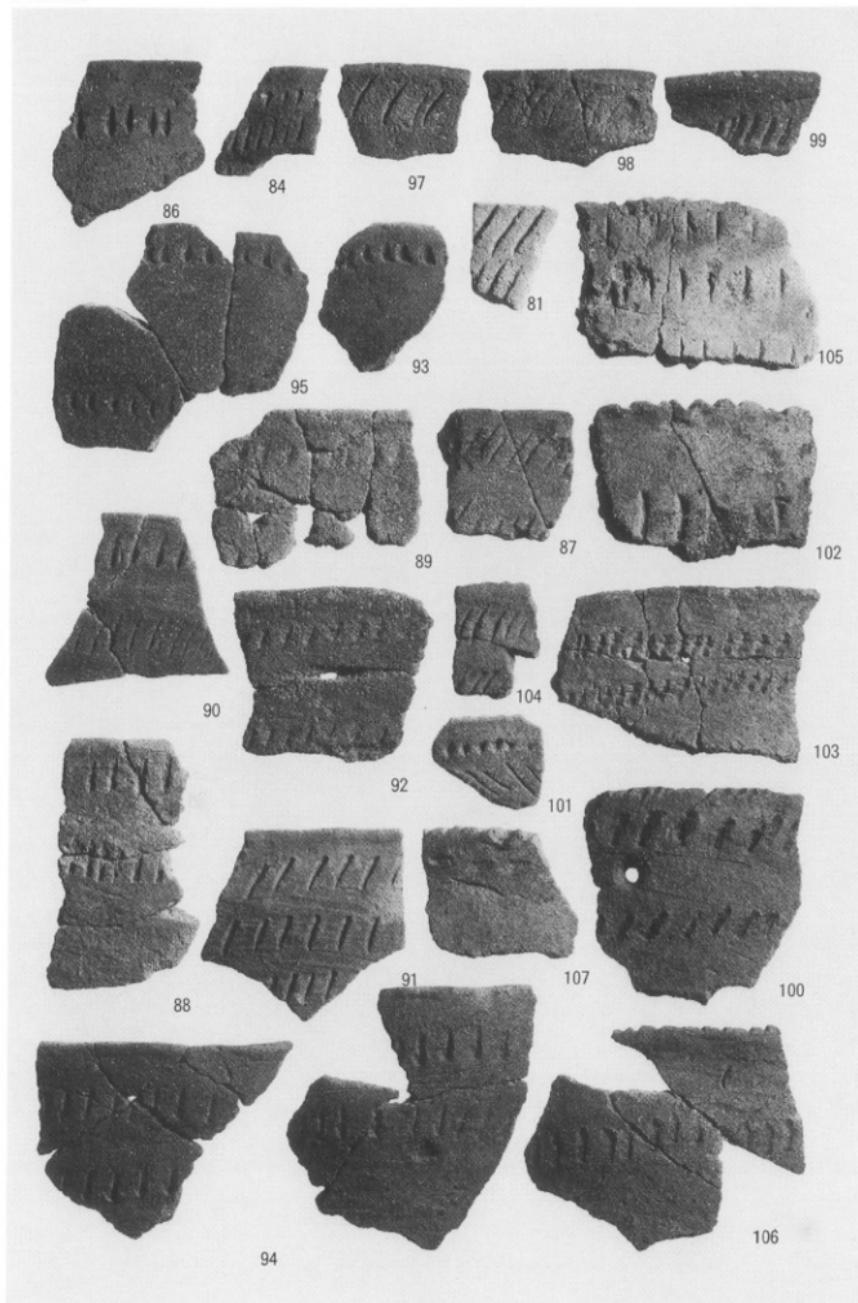


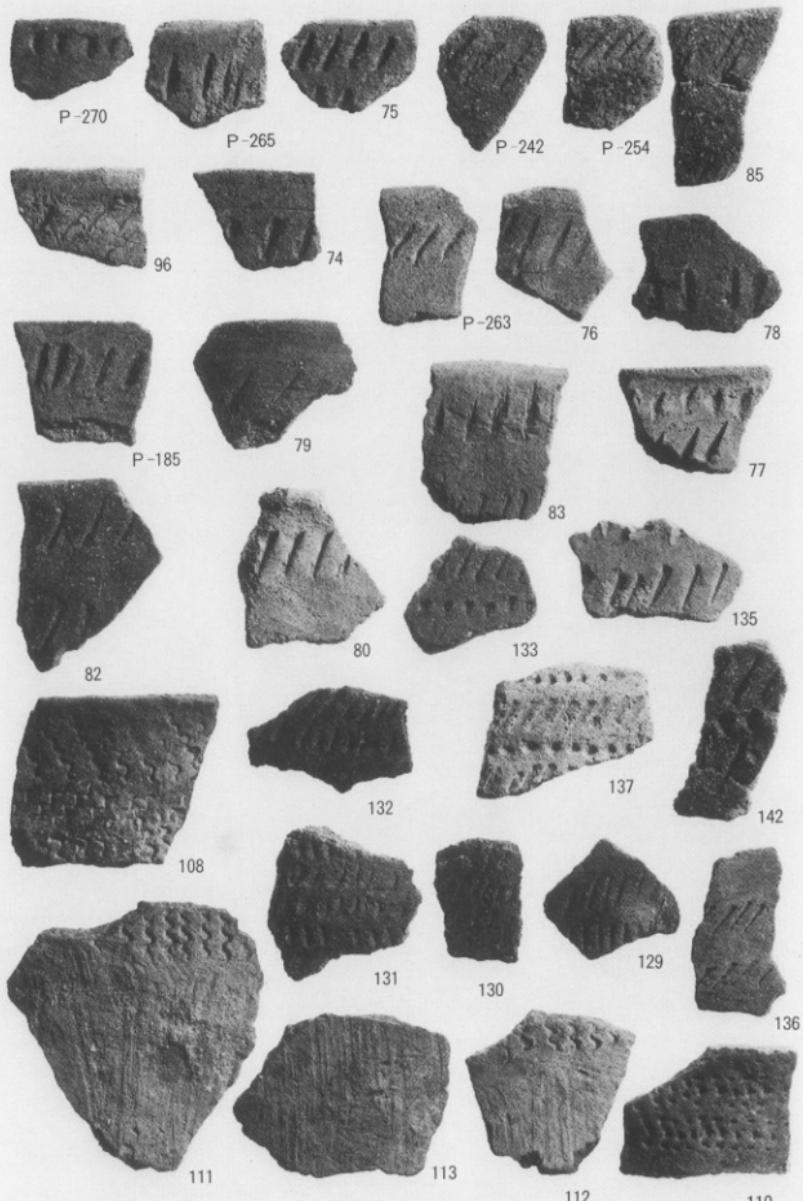


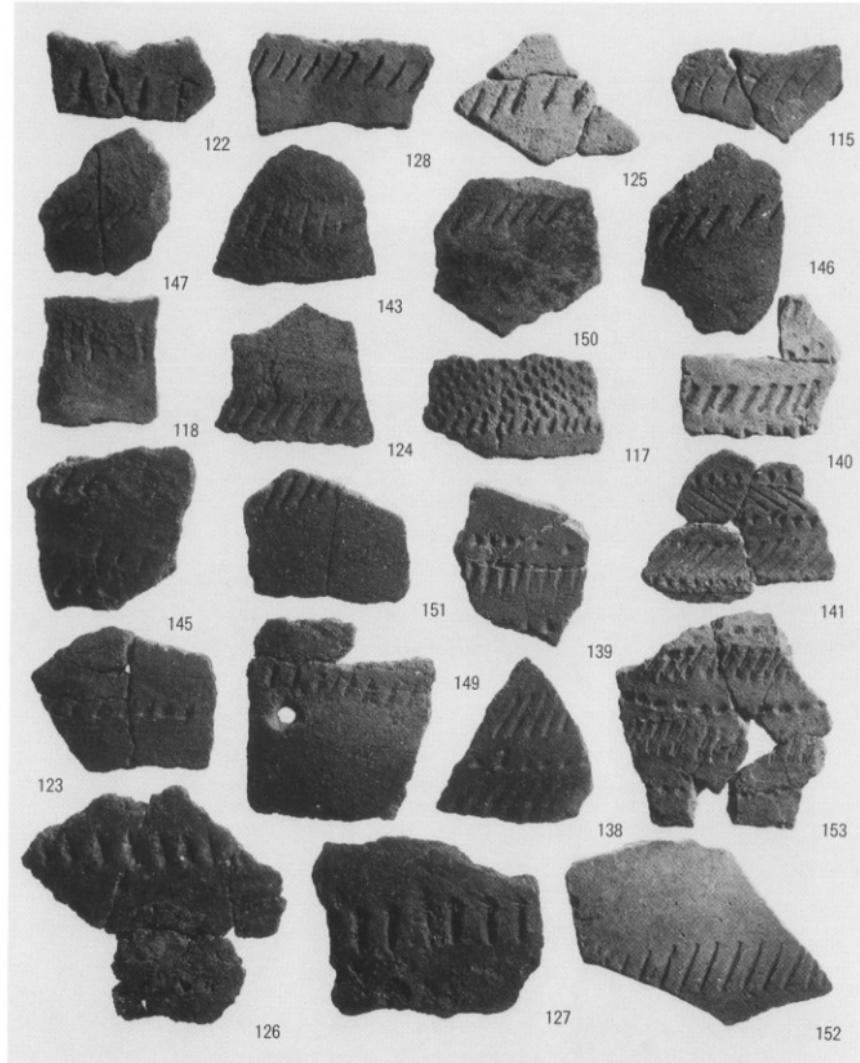


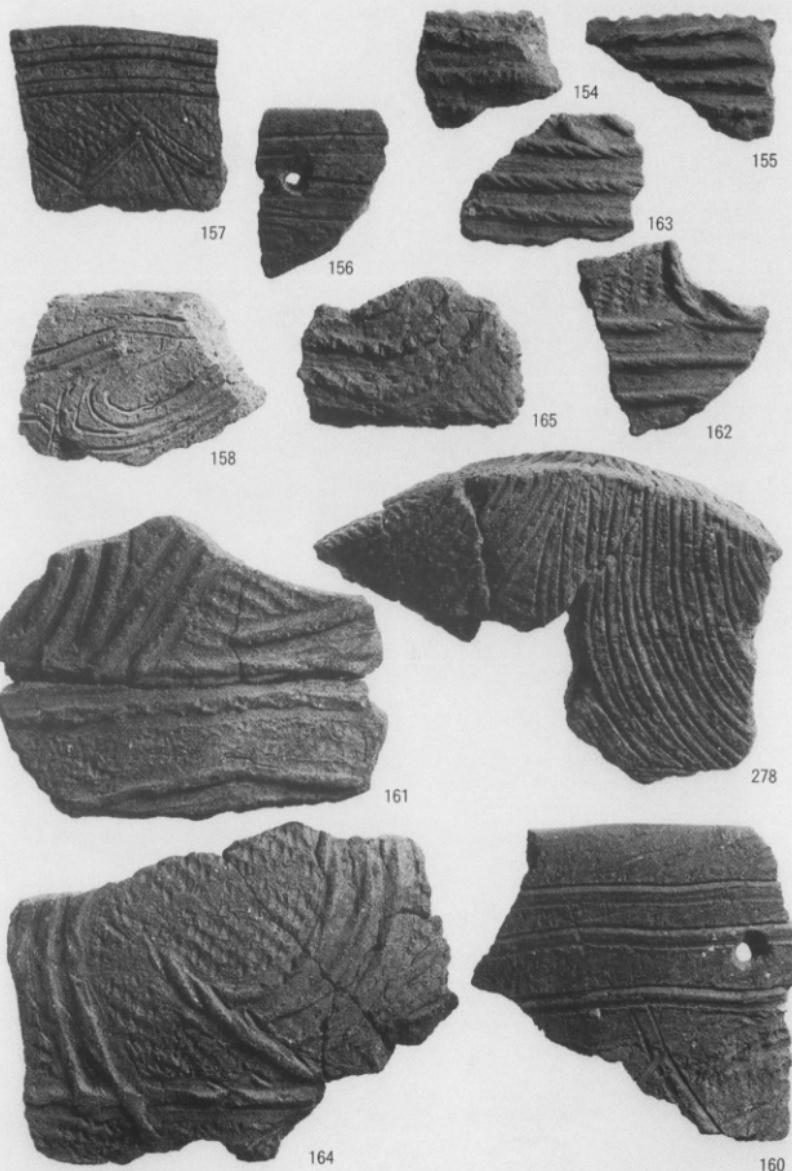


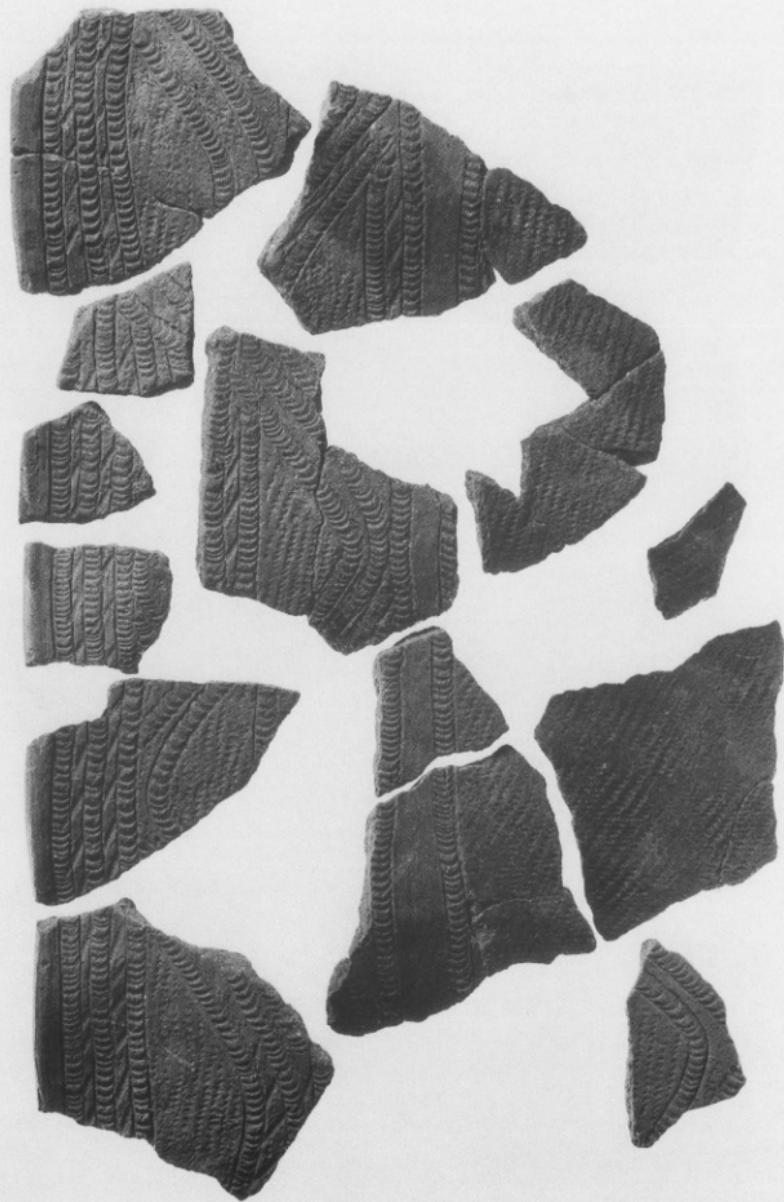
土器 61

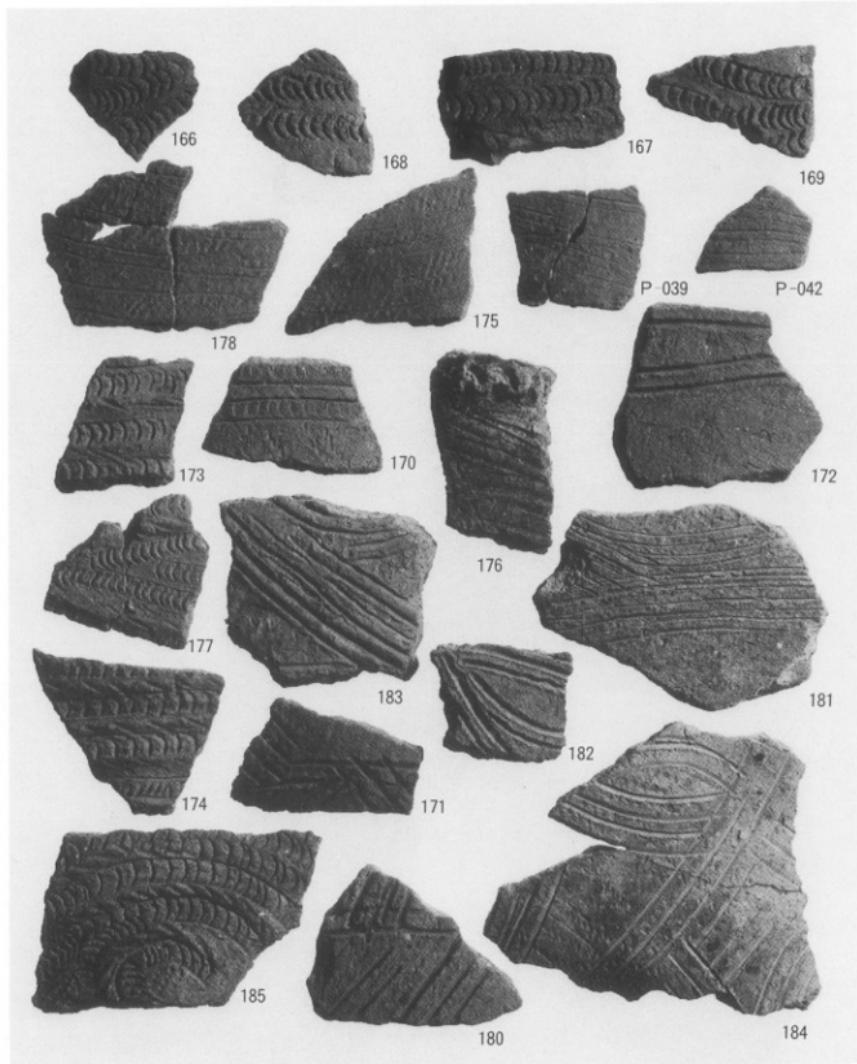


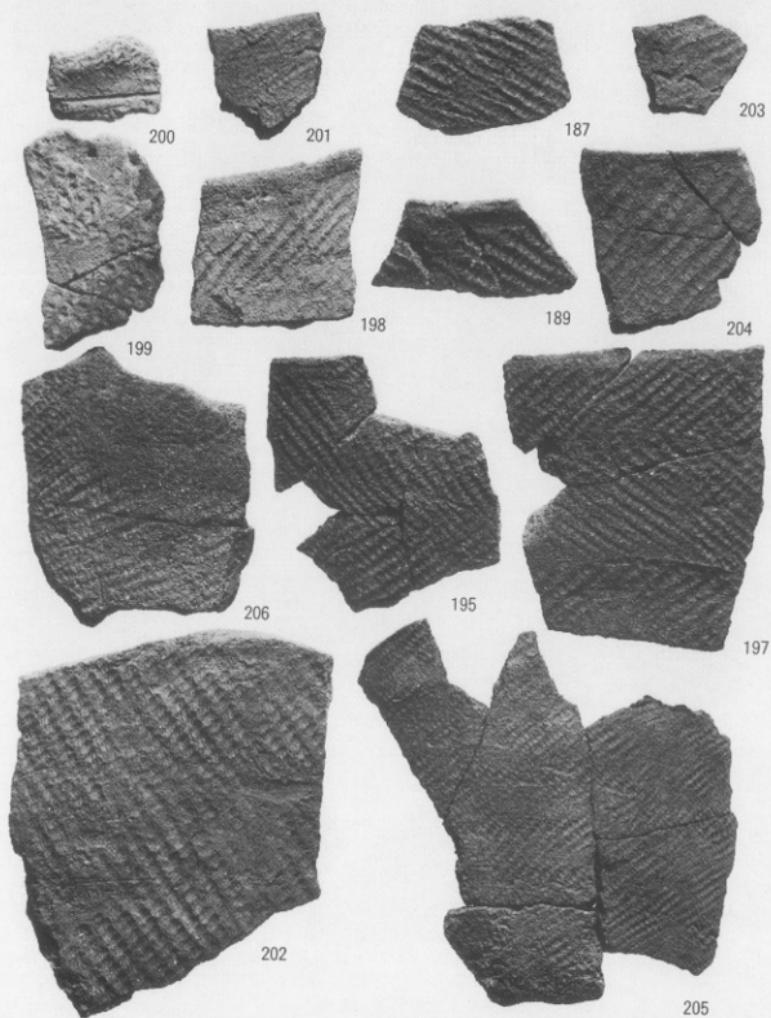


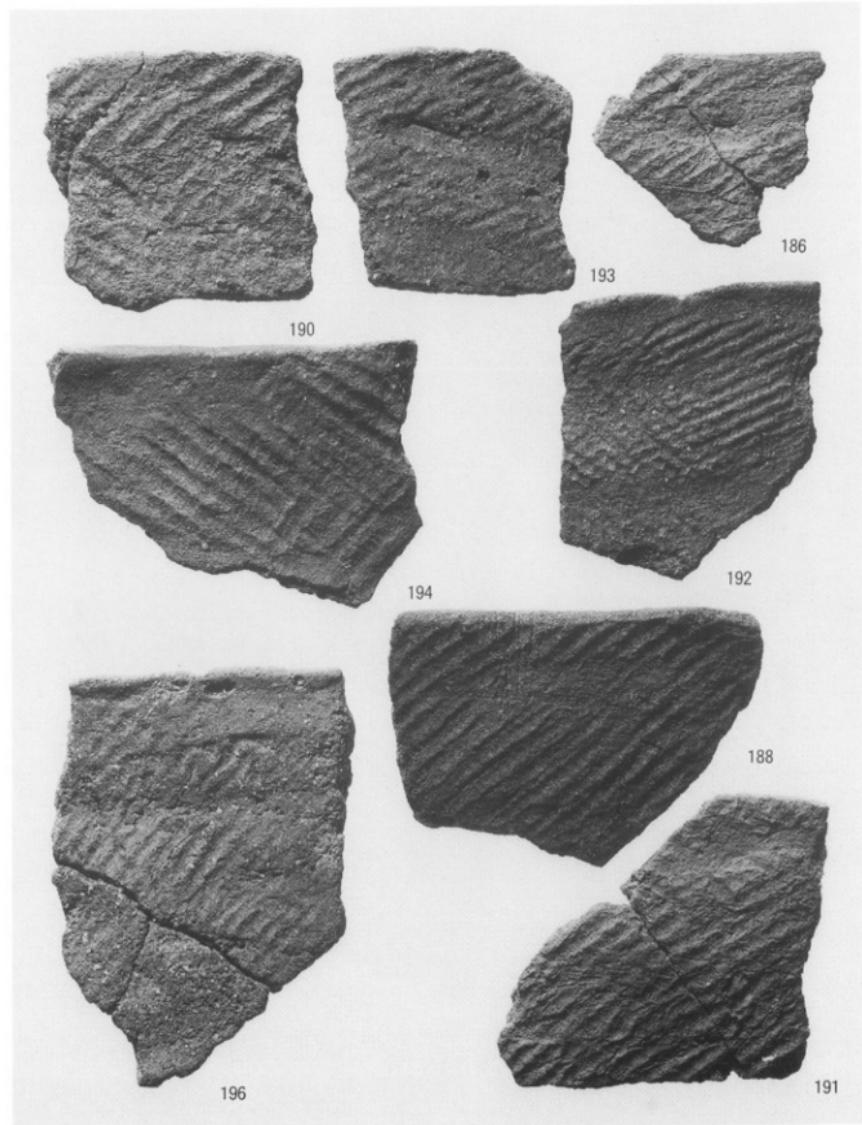




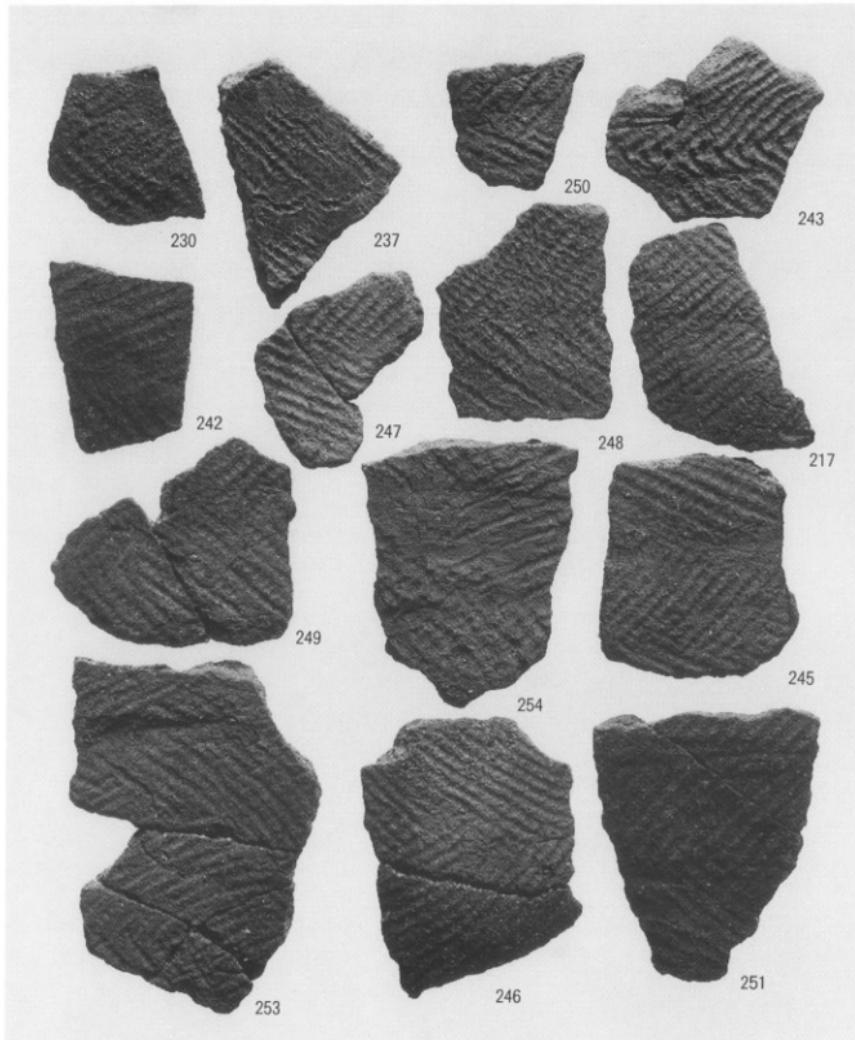


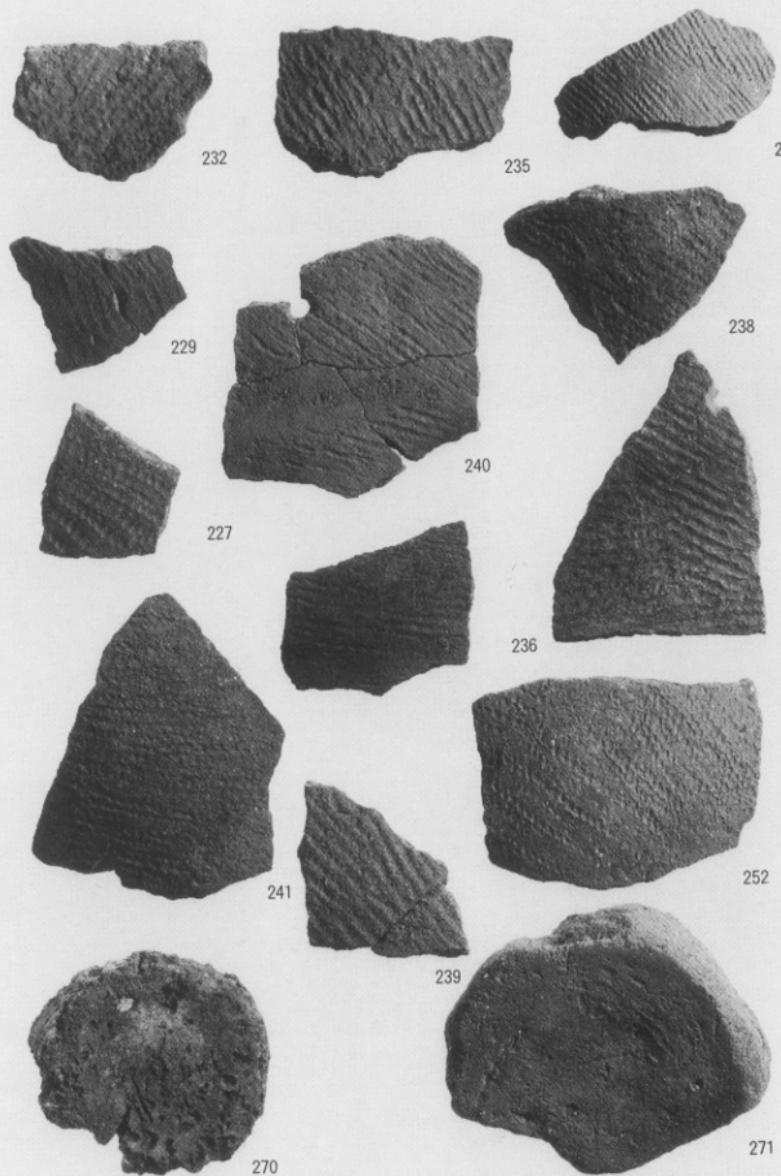


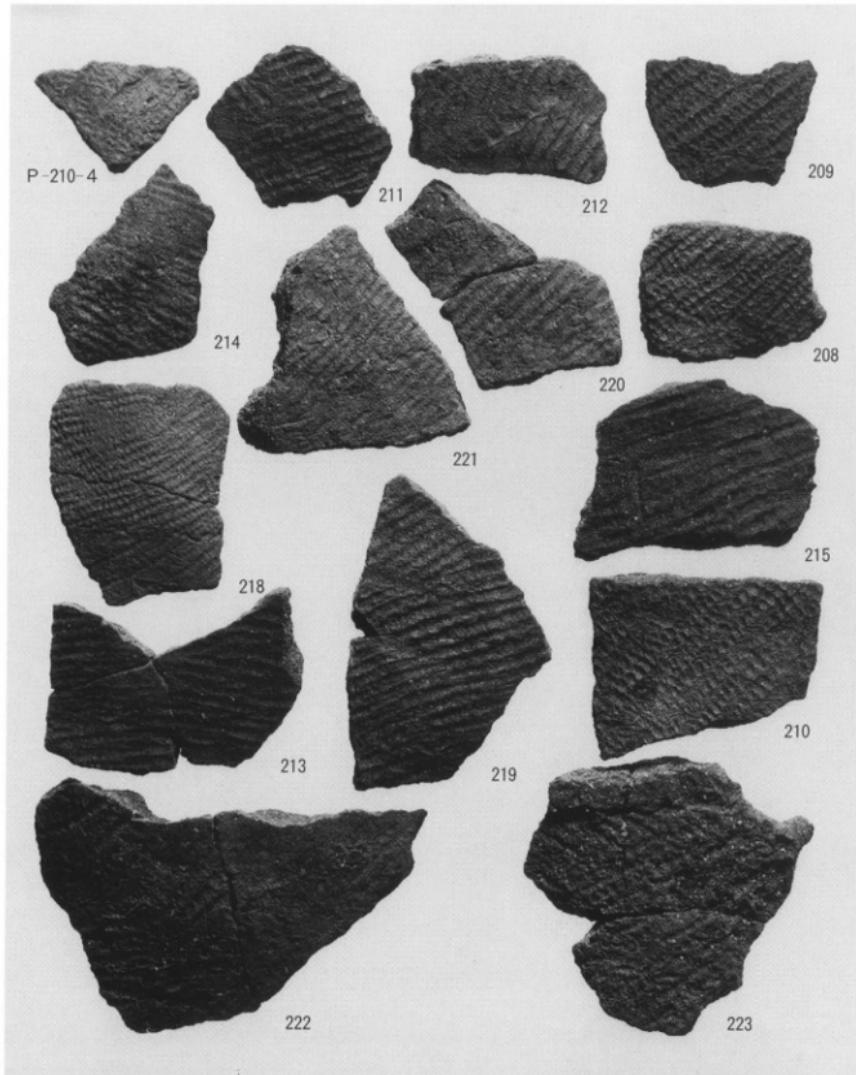


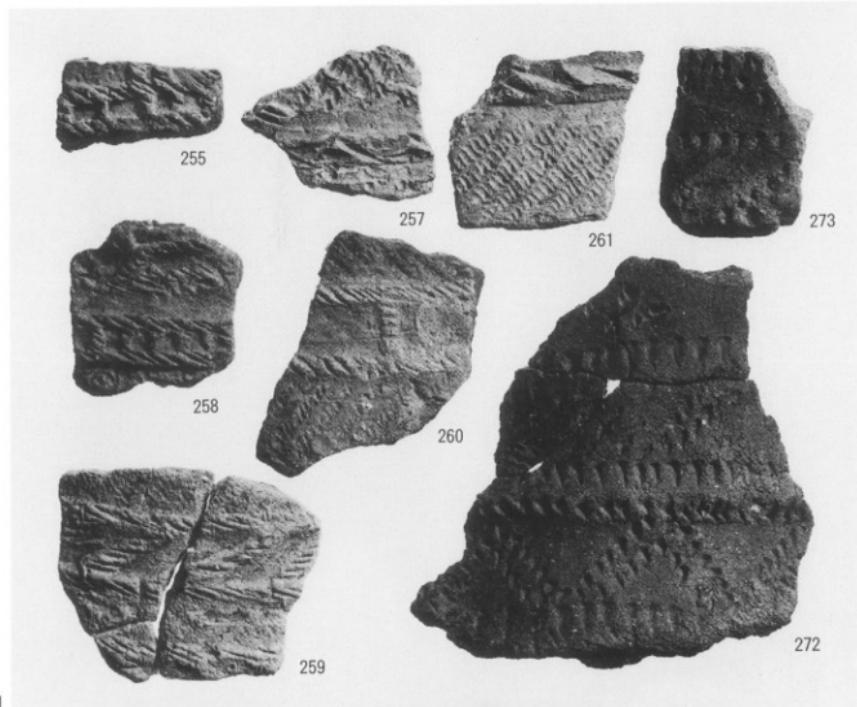


土器集合 13

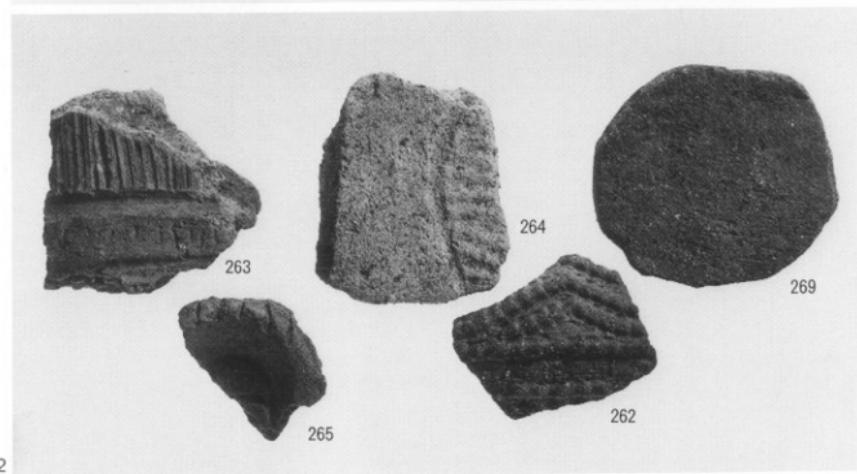








1



2



4



1



3



2

打製石斧集合（表）



4



1



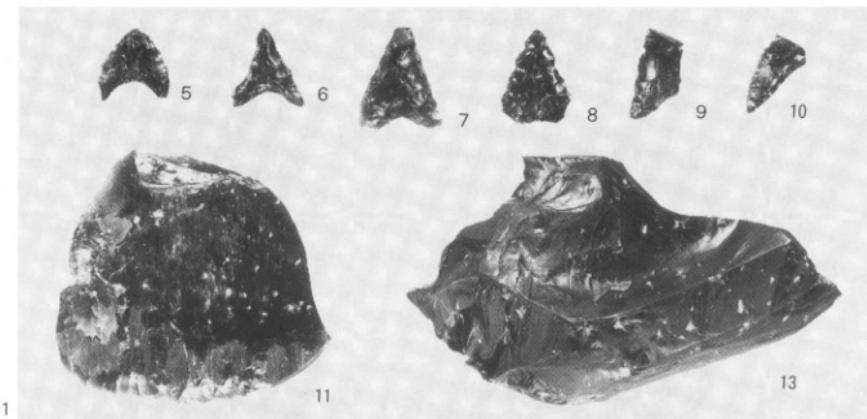
3



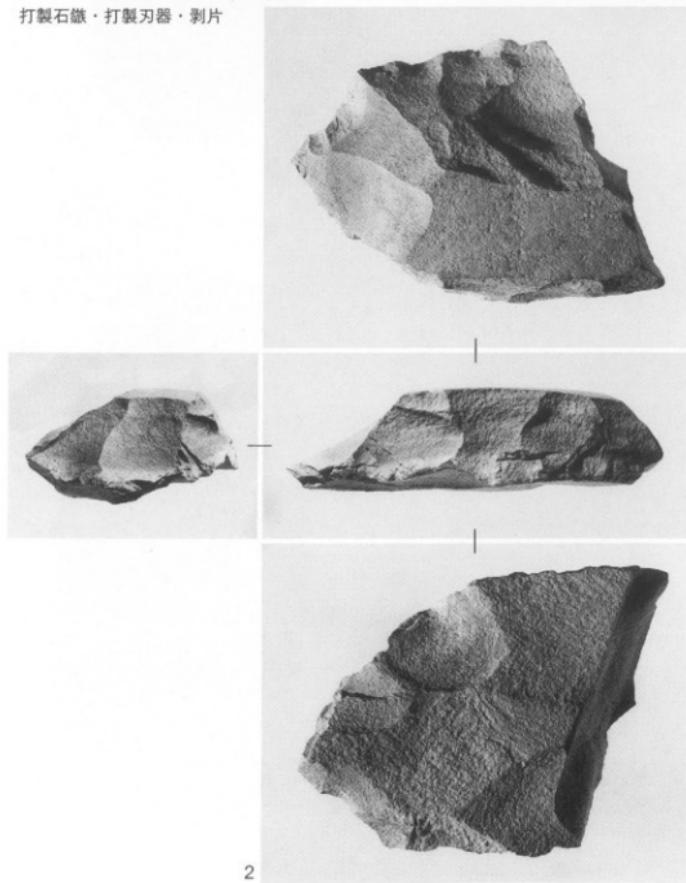
2

打製石斧集合（裏）

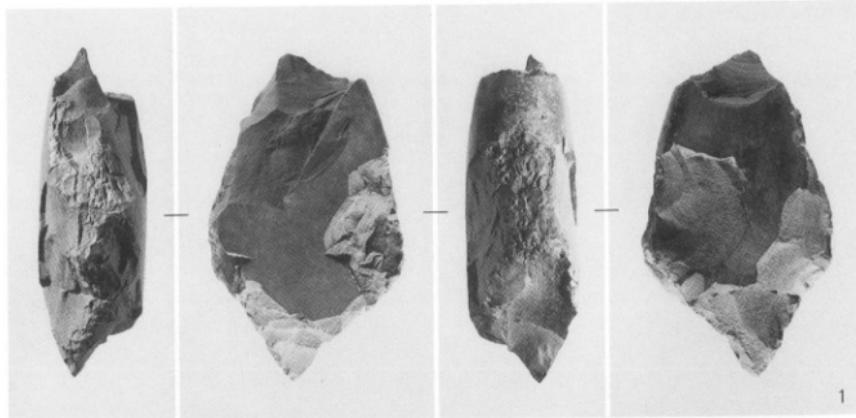
図版34



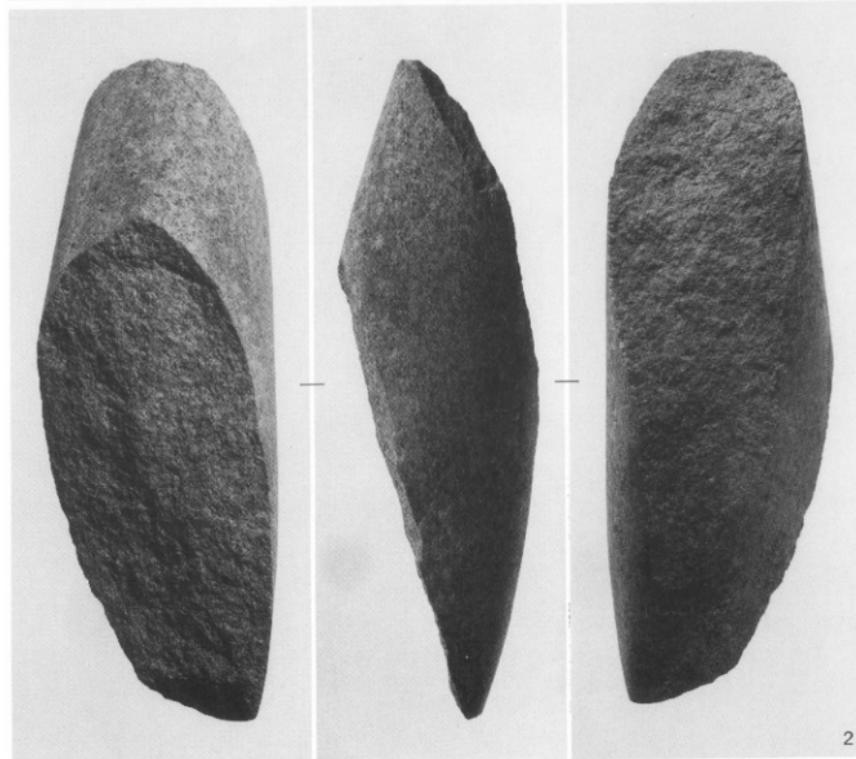
打製石器・打製刃器・剥片



石核 12

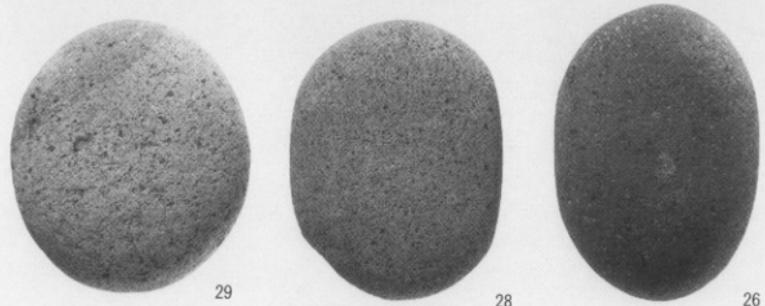
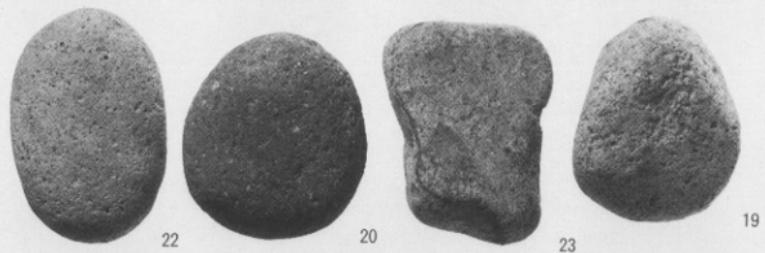
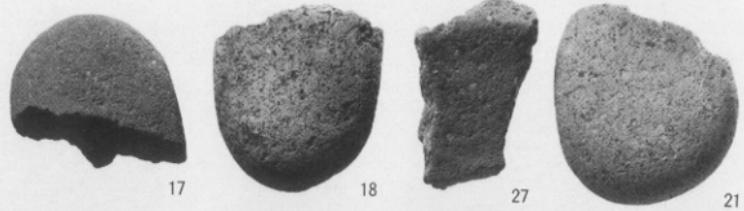


1

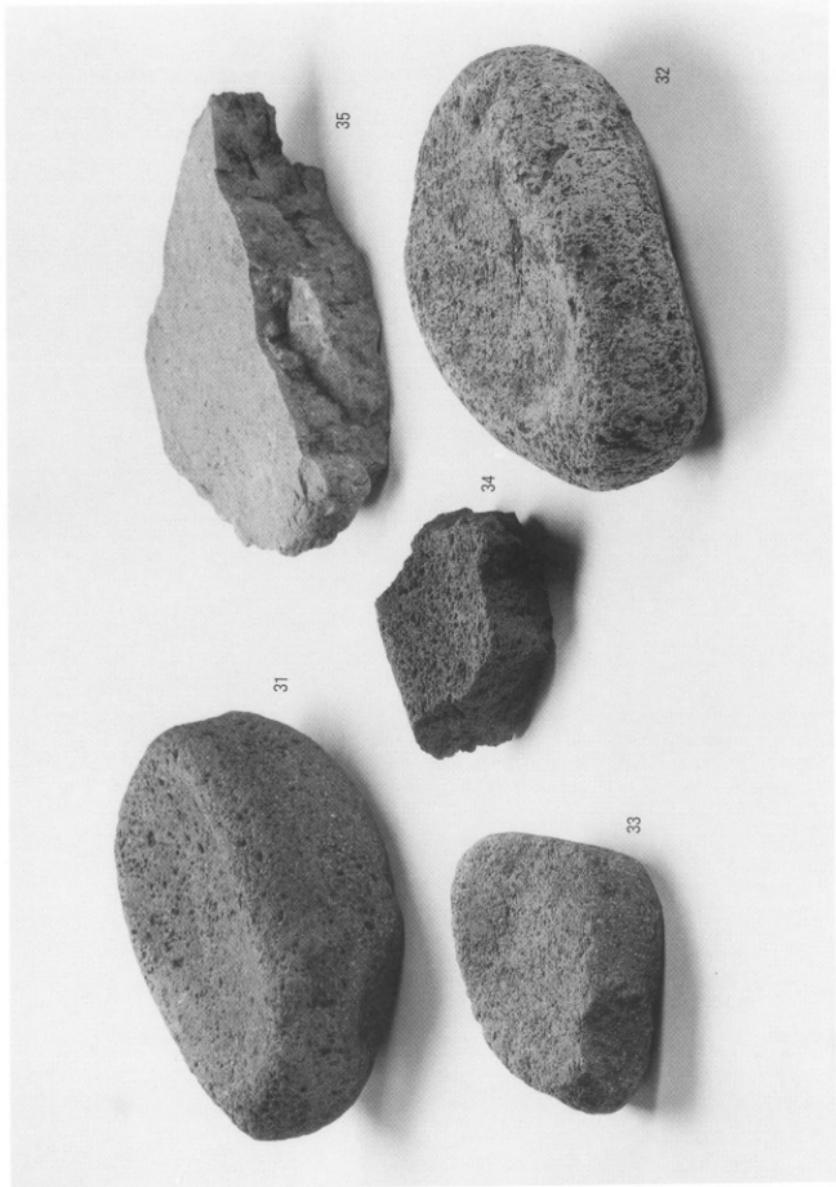


2

磨製石斧14・15



磨石集合



石皿集合

報告書抄録

ふりがな	なかみよいせき
書名	中峯遺跡
副書名	平成8年度農免見高稲取線II期地区建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第88集
編著者名	勝又直人(附編:高橋 豊・パリノ・サーヴェイ株式会社)
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422 静岡県静岡市谷田23-20 TEL054-262-4261
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかみよいせき 中峯遺跡	しづかのけん もぐん 静岡県賀茂郡 ひがしいでちょうおおあさ 東伊豆町大字 いなとひあざなかみよ 稲取字中峯	22301		34° 46' 26"	139° 1' 44"	19960701 19970331	349m ²	農免見高稲 取線II期地 区建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中峯遺跡	集落跡	縄文時代早期～中期	竪穴住居跡 3基 土坑 柱穴 炉状遺構	縄文土器 土製品 石器	縄文時代前期の 土器群が多く出土。 有尾式・北白川下層式土器 等他地域との交流を窺わせる資料が存在。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第88集

中峯遺跡

平成8年度農免見高町歌綱Ⅱ野地区建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年3月31日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 みどり美術印刷株式会社
沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL(0559)21-1839㈹